

曹彬をして南唐の都城を取らしめし時、一人をも殺さず、市場の取引をも攪さずして、その命令を果せるを以てせり。翌日忽必烈は馬に跨り、姚樞に向て叫んで、昨夕汝曹彬殺さざるの事を云へり、吾能く之を爲さんと云へり。既にして大理城壁の下に至るや、絹布の旗に大字を以て殺戮を禁じ、犯すものは之を刑すと認めて周知せしめたり。かくて大理は直ちに城門を開き、この占領に方りては、實に曩に蒙古の勸降使三人を殺したる都城の二將を害したるのみなりき。(一、二、五、四、年、一、月) 忽必烈は敢て深く入らず、軍を去て蒙古の皇帝の許に歸還し、兀良合台を駐めて兵に將としてこの南方諸國征服の事業に當らしめたり。

大理の王國を征服し了る後兀良合台は吐蕃 Tou-po 即ち西藏人を攻撃し、數回の戦闘を経て、三十萬戸以上を數ふるこの尙武的民族を服従せり。若干の西藏兵は部下に屬し、この地方の他の部族を征服するに際し遠征軍の前衛として功を立てたり。兀良合台は一二五四年の季に蒙古なる皇帝の朝廷に赴き戦績を復命したり。翌年再び雲南に派遣され、途を吐蕃に取りて進軍し、白蠻、烏蠻、鬼蠻等の諸部を従へたり。魯魯斯、阿伯、阿魯等の諸王國は或はその兵を受けて破れ或は風を聞て降り、何れも蒙古皇帝の主權を認めたり。ロに據る。雲南は數國に分れ支那人の所謂蠻人之に住したり。白蠻、烏蠻等はなり。南詔の舊王國は首府を大理と呼べり。白蠻は蒙古人之を合刺章 Caru-jiang と呼ぶ。黑人の義にして、漢名の譯語たり。忽必烈の治下には雲南の大部分、寧ろその全部は Caru-jiang (雲南諸路) 行中書省を爲し、首府を Yachi (益州か) と呼べり。グラブロート氏は是を今の Thsu-hiong-tou (楚雄府) なりと云へり。(新亞細亞雜誌第十一冊四五九頁。マルコ・ポーロは Caraiian 地方に七王國あり、忽必烈に従ふと記せり。Kaschid は蒙哥の朝に忽必烈の遠征せることを叙し、忽必烈が Nangutass (南方支那) を征

服するに先ち Caru-jiang 國征服を企てたることを述べ、『カラジヤン國は支那には Tai-jou (大理) 即ち大王國、印度にては Candar 波斯に於て Candahar と稱し、吐蕃、唐古特、支那、印度斯坦、金齒國に界せり。忽必烈はこの王國を劫掠し國王 Maha Radja 即ち大王を擒にし、驅て之を従へて單身北歸せり』と云へり。次にラシッドは忽必烈が領土を十二省に分割せるを説きてカラジヤンクを擧げ首府はヤチなりと云へり。又蒙古種族 Ouriangites の條には『この部族より出たる兀良合台は蒙哥可汗の當時の大將軍なりき。可汗の弟忽必烈に兵十 tomans を授けし Caru-jiang を伐たしめし時兀良合台に司令權を與へ忽必烈をしてその下に立たしめんとせり。この地遠く蒙哥の朝廷を去りて殆んど一年の日子を要し、且風土險惡、軍中疫病に罹るもの多かりき。且又カラジヤンクは防に勇敢なる大軍を以てせしかば日々交戦絶えずこの二種の原因ありしが爲軍隊は忽ちにして二 tomans に減じたり』とあり。

一二五七年の末、兀良合台は安南 Gan-nan 一に東京の境上に現れ、宋の皇帝に隸屬せる國王陳日煨に向て蒙古汗の制令を奉せんことを命じたり。然るにその使節歸來せざりしを以て、兀良合台は安南に入り何等の抵抗にも遭はずして、深く王國を貫流せる洮江の岸に達したり。東京の軍は多數の象を従へ、對岸に戦列を布けり。蒙古軍は三隊を構成し、相次で渡河し、敵兵を敗北せしめたり。國王は倉皇小舟に投じ江を降て海に出で、一小島に避難したり。その軍隊の一部も之に倣ひて逃走したり。初め兀良合台は第一隊を指揮せる將軍徹徹都 Tchêché-tou に命じて、他の兩隊の渡江せざるに先ち、敵の攻撃を開始せず、全軍の濟るを俟ちて、敵の船舶航下を妨害するの任に當らしめたり。然るにこの命令を遵奉せざりしより、兀良合台は徹徹都を叱責し、軍律を以て之を處分せんと威嚇したり。徹徹都乃ち毒を仰ぎて死せり。

兀良合台は東京の都城交趾に薄り、その城門を開くを俟ちて之を略取せり(十二月)。勸降の使節は監獄に投ぜられ、破竹を以て身體を堅縛されたるを以て、破竹は肉を傷け、之を釋放せん

とするに方り、一人は遂に苦痛に堪えずして死せり。兀良合台はこの酷刑に報いんが爲都城を屠り、軍隊を休養すること九日の後、酷熱を避けんが爲師を北方に班したり。ロに據る。間もなく國王陳日煚も降服せるが(一二五八年三月)、位を長子陳光晟に傳へ、新王塔を使節とし他の貴族と共に貢賦を携へて蒙哥の許に至らしめたり。兀良合台之と同行せり。蒙古帝はかくて初めて宋朝に向つてその兵を進めたり。元史并にロの第十二冊に收めたる Gantui の東京史雜考に據る。東京は支那人交趾と稱し、當時國號を安南と呼べり。

蒙哥は一二五六年の春、欲兒伯哥都 Orbolghaton と稱する地に會議を召集したり。二箇月間來會せる諸王百官の爲に盛宴を張り、金帛を賜ひ、且將來歲賜として諸王に給與す可き錢穀の額を定めたり。元史には一二五三年に拔都部下の將校脱必察 Topia を行在に遣し、珠玉購買の爲め金萬錠(Hyacinthe は銀拾壹萬ルーブルに當ると云へり)を乞へり、汗は千錠を授けて、太祖太宗之財、若此費用、何以給諸王之賜、王宜詳審之、此銀就充今後歲賜之數との詔を賜へりとあり。

この年又蒙哥は高麗の來降を受けたり、一二四七年以來高麗は納貢を怠りたりしが、蒙古兵征討に向ひて戦利を博せるより、國王親ら宗主の許に赴きて忠誠を表せざるを得ざりき。

皇帝は弟忽必烈の寛仁大度能く支那人の輿望を收むるを見て、帝位を覬覦せるものなりとなしてその心事を疑ひ、一二五七年に之を召還し、和林副知事阿藍答兒 Alendrar に命じて河南、陝西地方に赴きて行政の任に當らしめたり。阿藍答兒は鈎考局を鞏昌府に設けて、財務官吏の計算に對して嚴密なる審査を加へしめたり。鈎考局は忽必烈部下の官吏を召還して、二人の外は悉く

之を死刑に處し、その二人に對しては阿藍答兒より勅裁を乞へり。忽必烈快々として樂まず、聊か進退に就いて躊躇せり。然るに賢臣姚樞、諫むらく、大王は皇帝第一の臣下なれば須らく服従の模範を示さざる可からずと。かくて一家一族を擧げて蒙古に歸還せられなば、兄君の疑心を氷解せしめ、且將來の奇禍を避け得可く、是れ良策なりと説きしかば、忽必烈はこの忠言を納れて蒙哥の朝廷に歸れり。兄弟の再會するや、互に涙を抑ふる能はず、蒙哥も敢て何等の辯解をも求めず、鞏昌府の鈎考局を廢止し、阿藍答兒を召還し、再びこの案件を問はざりき。イ、ロ并に綱目に據る。

總會議は蒙古の中央に位せる Cabour Caboukchour に於て召集せられたり(九月)。この庫哩勒台の會議の節、成吉思汗の婿たる亦乞刺思氏の Daougai Courgan は南方支那の未だ服従せざるに之を不問に附するは、その意を解するに苦む所なりと主張せり。蒙哥は主戦論に左袒し、且親ら進發す可しとして『朕が父祖は偉業を奏し、戦勝を以て名聲を博したり、朕も是れに倣はむ』と宣言したり。宗族親王は之を聞て『全世界に君臨し且七人の同胞を有する君王焉んぞ親ら敵と鋒を交へんや』と叫べり。されど蒙哥はこの場合に於て窩闊台の先例に依らず、決意を固執したり。チに據る。宋朝は數年前より、開戦の口實を蒙古に與へたり。初め攝政皇后脱列哥那は一二四一年に月里麻思 Youlimassa を使節として宋朝と和を講ぜんとしたり。然るにこの使節の宋の領土に入るや直ちに拘禁され、一行七十餘人と共に湖廣の一城に幽閉されたり、正使は臆て

同地に在て鬼籍に入り、隨行者は一二五四年まで抑留されたり。當時蒙古兵は進んで合州ホチニを圍まんとし、城外に於て守將ツツケン王堅と戰て敗れたり。支那政府は平和維持の誠意を示さんとして月里麻思ユリマの隨行員を放免したり。ロ并に綱目に據る。

同年夏蒙哥モンケは成吉思汗の幹耳朵オウルツを訪ひ、彼處に藏せる旗と鼓とに犠牲を供へたり。總會議は克魯倫河附近に召集されたり。皇帝は駙馬臘眞 Rensin の子、乞得 Kitat を露西亞の達魯花赤 Darouga 元史語解に達魯花赤は頭目也とあり。即ち知事と爲し、馬三百頭羊五百頭を賜へり。元史に據る。

蒙哥は和林の政府を弟阿里不哥に託し、將軍阿藍答兒を之に副へて、一二五七年十月支那に向つて親發したり。この遠征を企てるに先ち蒙哥は往きて太祖の廟にその靈を祭り、又莊嚴なる犠牲を天に供へたり（七月）。イに據る。進んで大砂漠の南方玉龍棧 Catai-yorouin に至るや、忽必烈クビライその他宗族の諸親王來り迎へ、大宴會に招待せられたる後、何れもその任地に歸れり。蒙古新年の元旦（一二五八年二月）は也里本朵哈 Arban-tokhai の地に於て祝され、皇帝は例の如く朝賀を受けたり。三月禁軍は氷を履んで黄河を渡り、陝西シエンシに入りて太祖の崩御によりて名高く成れる六盤山リュンパンに大本營を定め、陝西諸郡縣の守令をして來觀せしめたり（五月）。偶々旭烈兀フアラグが波斯より派遣したる將校（抄馬那顏）來着し、その西域に於ける征服事業に關する報告を齎せり。この際蒙哥は弟旭烈兀フアラグに與ふるにアムー河左岸諸國の統治の權を以てしたり。かくて盛夏三箇月

間休養せる後、輜重を六盤山リュンパンに留めて進軍を繼續せり（八月）。時に兵四萬、揚言して十萬と稱し、三道に分れて四川スチユンに向へり。皇帝の引率せる本隊は隴州ルンチより散關街道を取り皇弟莫哥 Morig の引率せる第二軍は祥州シヤンチユを経て米倉關ミツクワンに向はんとし、萬戶、李里又 Bourchak の引率せる第三軍は漁關ユイクワンより沔州ミエンチユに向はんとせり。他の二軍は湖廣フクワン、江南キヤンナンを侵して宋の兵力を分つる任務を帯び、將軍張柔の率ゐる一軍は、皇弟忽必烈クビライが司令長官となりて鄂州ウオチユ（武昌府）を攻撃するの命令を受け、又宗族幹赤斤 Uchuguen の子、塔察兒 Togatchar は江南の荆山キンヤンを攻撃せり。兀良合台ウリヤンカタイは又東京を發して、武昌府城に於て忽必烈クビライに合す可しとの命令に接したり。宋朝總攻撃の作戰計畫は實に以上の如くなりき。

有力なる前衛に將とせる蒙古軍の紐隣 Neouie は皇帝に先て夙に四川に入り、成都府チンツフに向ひしが、是れ同府は蒙古の都元帥阿答胡 Adacou 重圍のうち之を守れるが爲なり、乃ち宋將劉整チエンを破て府城を救ひしに、その軍隊の遠く去るや、四川制置使蒲擢フユチ之は之を克復し、阿答胡は戰死したり。紐隣ニユリンは救援及ばざりしを憤り、府城と宋軍との中間に陣伍を張り以て府城の糧道を絶ちたり。茲に於て宋軍は退却し、成都府内の諸城は相次で紐隣ニユリンに降れり。紐隣はこの戰功によりて都元帥に拜せられたり。

時に皇帝は途を寶鷄パオキに取りて漢中府ハンチュンフに着し（十月）、將に保寧府パオニンフの西北約二十リীগ小劍山頂シヤキヤンに

位せる苦竹隘を奪はんとせしかば、紐隣は守備隊を成都府に留めて同地に向へり。先づ途上投降せる宋將張實をして往きて苦竹隘に至りて降を勧めしも、この計畫は成功を見ざりき。張實は却て隘に入つて守將と共に之を守ることとなりしかば、皇帝は遂に親ら之を征討せざるを得ざることとなり、嘉陵江を渡り(十一月)、次に白水に至り、占領地方の總帥たる汪德臣に命じて船橋を造らしめ、進んで苦竹隘を圍めり。攻撃十日の後隘内の一將趙仲なるもの、歎を通じて一門を開けり。かくて蒙古兵竊に入城して、巷戰茲に起り、守將楊立は殺され守兵は奔潰したり。皇帝は兵士を禁じて趙仲の家屬を犯すことなからしめ、その内應を賞して衣帽を賜ひ且保寧府内小城の守將に任じたり。翌日張實は捕へられ四肢處を異にせり。汪德臣は皇帝より玉帶を賜はれり。士卒も酒食の下賜を受け、精兵五百を留めて守備隊と爲せり。

この戦勝の後二日、皇帝は保寧府内の險隘なる長寧山を攻撃せしに、王佐、徐昕の兩將之を守れり。王佐破れて鵝頂堡に退きしも、忽ちにして陥落し、兵器を握りて戦死せり。その子及び徐昕以下四十餘人の將校は勅命によりて屠られ、皇帝は間もなく龍安府内五城の降服を受けたり。蒙古はこの頃四川の各府縣を征服せる兩枝隊の來會せるに遭ひ、又蒙古の將李瓊が連水、海州その他四城を奪ひ、支那軍に大敗を蒙らしめたりとの報に接したり。

蒙古は更に進んで大獲山を攻め、別に王仲を遣して閬州(保寧府)に降服を勧めたり。守將

楊大淵は使節を殺害せしも、圍を受くるに及んで降れり。蒙古之に都元帥の職を授けて奉仕せしめ、その部下は蒙古軍に編入されたり。楊大淵は總帥汪德臣と共に進んで相如以下の諸縣を伐ち次で皇帝より運山守將勸降の命を受けその使命に於て成功したり。一二五九年一月大軍の進んで青居山に近くや將校等は守將を殺して降れり。皇帝は保寧府内の隆州守將并に大良山の要隘守將の降服を受けたり。雅州は攻めて之を抜き、石泉の要塞は門を開きて降れり。茲に於て降將晋國寶に命じて往きて合州に至りて守將王堅を招諭せしめしが、使命を果さずして空しく歸れり。蒙古の新年の元旦(二月)は重貴山下の大本營に於て祝されたり。蒙古は一大酒宴を催し、了て、諸王、駙馬、百官と議する所ありき。蓋し蒙古は南國に於て大暑の氣候を迎ふるの可否に就て迷へるを以て、衆に諮らんとせるなり。茲に於て札刺亦兒部の脱歡 Toghan は意見を述べて、南土は瘴癘あり、上は宜しく北還せらる可し、獲る所の人民は、吏に委ねて之を治めしむるを便なりと云へり。阿兒刺氏 arlates の八里赤 Baritchi はこれ怯臣の言なりとて、皇帝に滯留の可なるを説けり。蒙古は後説を善しとし、晋國寶を合州に遣して再び降服を勧めしめたり。然るに王堅遂に國賊として之を殺戮せしより、愈々合州を攻撃するに決し、都元帥楊大淵その任に當り、先づ傍近の地方に於て男女八萬人餘を俘にしたり。皇帝は臆て大部隊を率ゐて、嘉陵江と涪江との合流點に位せる合州の城壁に逼れり(三月)。三、四兩月の間數々強襲行はれたり。五

月大雷雨あり、凡そ二十日間絶えざりき。

守將王堅奮戦苦闘、能く敵兵を撃退して屈せざりしが、四川の新總統はその糧道を断たんとし
て畫策したり。蒲擇之は防備の方略功を奏せずして黜けられ、呂文德之に代つて四川制置副使と
爲れり。この將軍は奪闘して皇帝が糧食輸送の爲に架設したる涪江の船橋を破壊し、重慶府に千
餘の船舶を集め、之を率ゐて嘉陵江を溯航せしも、蒙古兵は兩岸より之に攻撃を加へ、百有餘隻
を奪ひ、更に追撃して重慶府に至れり。

六月中蒙哥は數々合州城に襲撃を試みたり。七月に入りて一夜汪德臣は精兵一隊を率ゐて梯し
て城壁に上り、之を支へて曉に及べり。偶々王堅の戰場に近づき來るを認め單騎進入、高聲を以
て叫で云へり『王堅よ、軍民共に生命をば助く可ければ、宜しく早く降る可し』と。その言未だ
終らざるに拏手の發ちたる石は飛び來つて命中しその生命を奪へり。城壁を奪へる蒙古兵は梯の
折れたるが爲久しく支ふる能はず、遂にこの突撃も失敗に歸せるが、是れ蒙古軍が合州を攻拔せ
んとして試みたる最後の努力なりき。その數回の突撃は多數の士卒を失ひ、且赤痢軍中に發して
猖獗を逞うせり。蒙哥は遂に病魔に襲はれしを以て長圍の策を執るに決したり(八月)。かくて
精兵三千人を監視軍として合州城外に留め、本隊を率ゐて重慶府に進み、之を略取せんとせり。
而もこの決心を立てたる後十二日、蒙哥は合州の東一里に位せる釣魚山附近に於て歿せり。
イに蒙

哥は兵を率て突撃を試み、亂軍の中に戦死せりとあれど、據る所を知らず。元史には釣魚山附近に於て崩すとあり、綱目(其殞には合州城壁の下に殞すとあり。ラシツドには蒙哥は酒量強く軍中に流行せる赤痢に感染して之が爲に崩じたりとあり。或傳其中飛矢云、(通鑑輯覽註文))

蒙哥は在位八年にして、五十二歳なりき。その性剛毅果斷にして多言せず、燕飲を樂まず、奢
侈を好まず、后妃と雖も濫費を容さざりき。窩闊台の治世に放縱度無かりし蒙古の大官は皇帝の
制令に初めて規律を守れり。畋獵は其の最も好める所にして、居止素樸常に祖宗の法を好み南方
帝王の豪奢懦弱を厭へる旨を口にせり。然れども迷信甚しく、絶えず多數宮廷に出入せる巫師に
諮り、何事もその意見を問はずして企つることなかりき。

四川の戦役に際しては蒙哥は軍隊の掠奪を禁じたり。皇子阿速帶 Assoutai が畋獵の時、麥
畑を蹂躪せることを聞かや、之を譴責し近侍數人に體刑を加へたり。又農民の葱を奪ひたる一蒙
古兵は死刑に處せられたり。かかる場合には又その特權を停止することありき。但し蒙哥は復讐
の爲兵士に隨意行動を執らしめしこともありき。
元史并に綱目、ハは蒙哥の殞する迄にて了る。ロ、イとも。蒙哥は蒙古語にて銀、土耳其語にて永生の意なり。蒙古人も

この意味にも用ゆれど、(元史語解には蒙哥人名の場合には然らず。ハは經常也とあり。)

蒙古兵の諸將は退却の議を決し、皇帝の遺骸を奉じて陝西方面に向つて進軍せり。
綱目には蒙哥の遺骸は絹布に包みて驢馬二頭之を運べりとあり。マルコ・ポロは蒙哥の遺骸を護りて支那よりタルタリーに赴ける兵士は途上遭遇せる男女を悉く虐殺し、その數約二萬に達せりと云へり。皇子阿速帶は將軍渾都海 Condoucai を留めて諸軍を統率せしめ、柩に隨て蒙古に北歸せり。王妃四人のうち一人は支那

に隨行せるが各王妃の帳幕に於て訣別の禮を行ふこと四日間に亘れり。その禮を舉行するや、靈柩を玉座に載せ、列席のもの涕泣哀號して永別を悲めり。不兒罕哈勒敦山中、成吉思汗并に拖雷の墳墓に近く埋葬せられたり。

蒙哥は妃妾多く、正妃忽都台 Contouctai は弘吉刺氏 Ykirasses の出身にして、班禿、玉龍 蒼失 Orengriss の兩皇子を擧げ、他の二妃は昔里吉 Schirégui と阿速帶との二皇子を生めり。
チに據、憲宗皇帝五子、長班禿大王、次二阿速帶大王、次三玉龍蒼失大王、
〔次四河平王昔里吉、次五辯都、早卒無嗣(元史宗室世系表)〕

拔都大王は一二五六年(六五四年)を以てヴォルガ附近に逝けり、時に年四十八歳なりき。
チ、又の兩書は拔都六五〇年(一二五二年—一二五三年)に歿すと記す、されども、ウ、兩書には本文の如し、ルブルキ(元史師 Haidon 王が一二五四年に拔都に謁見せるを以て見れば、この説據る可きが如し、拔都とは蒙古語にて鞏固の意也。〔語解には拔都は結實也とあり〕)世人稱して賽因汗 Sain-khan と呼べり、良君の義なり。資性寛大にして施與を好み、進物を受くる時は之を内庫に藏せずして臣下に分配せり。又能く祖先の質樸なる宗教を遵奉して渝らざりき。そのヴォルガ江の東岸に營みたる薩來 Serai の都城は子孫歴代の首府となれり。遊牧民族の常として拔都は周歲地方に行幸を試み、春は先づヴォルガ江の東岸に沿ひて北方に遍歴してブルガル人の領土の境上に達し、八月には南方に歸れり。ルブルキ旅行紀第二十二章 初め朮赤の歿するや拔都は長兄鄂爾達 Orda と父王の遺衆を分てるが、鄂爾達はシル河北方に位せる諸國を領することとなれり。鄂爾達并にその子孫は、ヴォルガ江畔に國を建てたる拔都の系統と區別して左翼

の諸王と呼ばれしが、Signac, Sabéran 訛脫喇兒 Orar 附近に住へり。首府は薩來に置ける本系より獨立せるも、而も拔都の後裔たる汗を認めて宗主となし、詔勅の冒頭には必ずその名を記せり。チ、ムに據る。

蒙哥が一二五六年に庫哩勒台に召集せる折、拔都は王子撒里答をして之に赴かしめたり。然るにその目的地に達せざるに先ち父の計報に接したり。帝は撒里答をして拔都の位を嗣がしめ莫大の幣帛を與へて辭去せしめしに、撒里答は途上に於て不歸の客となれり。ムに據る。撒里答は回教徒の間にも、基督教の信者なりと認められたり。ム并に Assenannus の Biblioth. Orient に據る。 About-Paradise に據る。羅馬法王インノ一世セント第四世は Jean と呼べる僧侶よりその改宗の意思あるを聞き、一二五四年一書を與へて之を祝したり。Odor. Rayn. の教會年代紀第二冊に出づ、この書は Anagni にて第二年の九月に認めたるもの也。

拔都の子烏拉赤 Onlatchi 皇帝の命によりて位を嗣ぎしが、なほ幼年なりし故其成年になるまでの間、蒙哥は拔都の妃妾中にて首位を占むる公主波拉克勤 Boratchin を以て攝政と爲せり。然るに烏拉赤も亦數箇月にして逝きしを以て、朮赤の子伯勒克 Barcai 位に上れり。チに據る。

第三編

第一章 (世祖紀)

第 三 編

上述せるが如く、忽必烈は湖廣に軍を進めて、漢水の會流點に於て大江の南岸に位せる同省の首府鄂州(武昌府)を攻撃す可しとの命令を受けたり。忽必烈は一二五八年の末親らタルタリに營める一都城を發してこの遠征の途に上れり。初め兄の皇帝は忽必烈の爲に盛夏の舍營地として桓州の地方を定めたり。然るに忽必烈は一二五六年を以て支那の學僧にして信任厚き占星家劉秉忠に命じて、宮殿造營に最も適せる地をトせしめ、その判斷に従ひ、桓州の東、灤水の北岸、龍岡と稱する丘陵の麓に、城郭を建て宮室殿堂を營みたり。この新都は長城の門口中最も北に位せる獨石口を東北に距る約二十二リゲに位し、繞らすに城壁を以てし一二六〇年開平府と命名せられたり。綱目に據る。『新亞細亞雜誌』第十一冊にクラプロートの引ける大清一統志に據れば開平府の廢址には今、杉乃滿寺 Djao-rai-man-soume と云ふ村在り。D'Arville の地圖にも出づ。開平府は普通上都として知られ、灤水も蒙古人等の上都城をチヨイムソムと稱す、百人の忽必烈の進軍は徐々として行はれ、一二五九年の八月に至りて、漸く河南の汝水の岸に本營を進め、同地に於て全軍を二隊に分ち、一隊

は忽必烈親ら之を指揮し、一隊は將軍張柔之を率ゐて湖廣に入れり。蒙古軍は麻城縣附近に於て幾多の堅城を下せしが、忽必烈はこの頃初めて兄皇帝の計音に接したり。而も敢て進軍を止めずして長江に向ひ、江上に集注されたる無数の支那戰艦と敵兵との環視のうちにありて、何等の妨害をも受けず渡江し、直ちに鄂州を圍めり。更に分遣隊は江西に入り瑞州府并に臨江府城を奪へり。

忽必烈の作戰は帝都臨安に大恐慌を來し、右丞相兼樞密使丁大全が當時まで蒙古軍の入寇を無視し、以て皇帝の聰明を覆へるを諱めたり。あまたの上奏は右丞相の不忠を論じて極刑に處せんことを乞ひしが、皇帝は僅に之を免黜し、賈似道を以て之に代て右丞相兼樞密使と爲し軍を率ゐて進んで鄂州を救援す可しとの勅命を下せり。新兵徵募の命令は全國に下され、皇帝は銀錢絹布を士卒に分配せり。

新任右丞相は學者にして兵事を解せず、かかる樞要の職司に當るの性格を具へず、皇帝柔弱にして、宮廷腐敗せるより、陰謀を運らしてその地位を保てり。將校の選任宜しきを得ず、部下は怏々として毫も司令長官を尊敬せざりき。但し賈似道は毫も戰功によりて帝國を濟はんとするの意なく、忽必烈が大舉して鄂州を攻撃せんとするに際し、之に對して竊かに媾和を提議し、宋の皇帝の蒙古皇帝に臣隸す可きことを約せり。時に忽必烈は弟莫哥 Munké の使節より皇帝殂落

の公報を得たる際なりしが支那宰相の提議を拒絶したり。然るに急使は新に黨與の書簡を携へて來り、直ちに北歸して阿里不哥帝位篡奪の計畫を妨止せんことを乞へり。忽必烈は脱里赤 Dorigi Bedi 阿藍答兒が、帝國の北方に在りて弟阿里不哥の爲に軍隊を籠絡せんとするを知り、部下將校を集めて會議を開けり。郝經進んで、阿里不哥は和林に政權を振ひ、脱里赤は燕都（北京）の知事として之に黨するが故、帝國兩都の死命を制せるもの相結託して、忽必烈を排斥して、皇帝を推選せんとするの慮あり、而も忽必烈は宗族親王の首席にあれば須らく攝政の任に就き、新帝推選の會議に於て會長席を占めざる可からず、故に兼程蒙古に還らざる可からずとの意見を述べたり。かかる形勢なりしを以て、忽必烈は賈似道より新に提出し來れる更に有利なる條件を容るるを以て策の得たるものなりと認めたり。賈似道は宋の皇帝の大汗の臣隸たるを承認す可きこと、毎歳銀絹各二十萬を貢賦として納む可きこと、長江を以て兩帝國の疆界となす可きことを約したり。この條件を容れて、蒙古の親王は騎兵の精銳なるものを從へて出發し、張傑并に閻旺の兩將を留めて殘兵を率ゐ、以て兀良合台の來着を俟たしめたり。鄂州の圍は解かれ、蒙古兵は江を渡りて北せり。

兀良合台は蒙哥より鄂州城下に於て忽必烈の軍に合す可しとの命令に接し、南方地方に於て服従せる民族等より供給せる一萬三千人の援兵を引率して東京を出發したり。支那の境上に於て寡

軍を以て敵の大兵を破り、廣西の首府桂林を圍みて再び支那兵を破り、深く湖廣の北部に進みて長沙を圍みし時忽必烈の締結せる和約成立せしを以て已むを得ず圍を解いて、長江の北に渡れり。その來着を俟てる兩將は江上に浮橋を作りてその渡江を助けしが、兀良合台の軍は長途の進軍と數度の戰鬪との爲に時に五千人に減じたり。この殘兵の最後の部隊の江畔に達するや一二六〇年三月、賈似道は戰艦をして滿帆の風力を利用して浮橋を中斷せしめ、かくて殿軍約百七十人を虐殺したり。

賈似道は警戒して敢て忽必烈と締結せる屈辱なる條件を奏上せず、皇帝は蒙古兵の退却を以て司令長官の剛勇にして敏捷なるが爲なりと信じたり。兀良合台の部下を虐殺せる一事も宛も堂々たる戰勝なるかの如く報告されたり。賈似道は朝廷に召還されて、この上なき歡迎を受けたり。

一二六〇年一月忽必烈は燕都（北京）城壁の下に本營を定め、阿里不哥に對して、何故に命令を下して人馬金錢の徵發を爲せるやを詰りしに極めて平和的な保證を得たり。阿里不哥は阿爾泰 Altai 山脈地方に於ける蒙哥の大斡耳朶に庫哩勒台を召集し、その葬儀を營むに方り、忽必烈并にその黨與を誘ひて之に來會せしめんことを期せり。かくて脫里赤は忽必烈以下之と共に出征せる宗族諸王を説きて北歸せしめんとせり。忽必烈等は、庫哩勒台に列席するに先ち舍營地に部下の將卒を集合せざる可からずと答へたり。脫里赤はこの回答を阿里不哥の許に傳達して忽必

烈に近く留りしが、四月忽必烈は同志の士が新皇帝推選の地と定めたる開平府に赴けり。弟莫哥、窩闊台の子、哈丹 Catān 斡赤斤諾延の子、塔察兒、其他左翼の諸王諸將は相會して庫哩勒台を開き、波斯出征中の諸王旭烈兀も尤赤、察合台の子孫も、その他の隔在せるがため之を召集するを得ず、而して形勢切逼して些の猶豫をも許さざるを慮り、全會一致を以て、忽必烈を推選し、恒例の如く之を玉座に上らしめたり（六月四日）。時に忽必烈は四十四歳なりき。據る。一週間

に互れる宴會了て、新皇帝は金銀の巴里施（貨幣）并に錦繡を滿載せる車輛を齎さしめ、之を諸王、哈敦并に將軍等に分配したり。諸王并に諸將は一行百人の代表者を遣りて、往きて阿里不哥に忽必烈の選舉を知照せしめたり。脫里赤は出奔せるも捕縛され拷問されて、蒙哥の崩殂以來阿里不哥の企てたるすべての陰謀を白狀し、かくて禁錮されたり。忽必烈は不里 Bouri の子阿畢世喀 Apischga を以て察合台の奥魯思の長官と爲し、その同胞と共に發程せしめしに陝西に於て抑止され、阿里不哥の許に遣られ

て捕虜となれり。阿里不哥も決して拱手して成るを待てるにはあらざりき。先づ阿藍答兒に命じて北方部族の間に赴きて徵發のことに當らしめ、又金銀絹布を部下の將校に分配したり。劉太平と霍魯海 Hōrui Joubai とを陝西に派遣して糧食貯藏用の倉庫を設けしめたり。劉太平は諸王阿速帶が和林の總

會議に向て出發するに方り、留めて六盤山屯營の軍に將たらしめし渾都海と相結託せり。渾都海は更に成都府の知事密里火者 Mihhotché 青居の守將乞台不花 Kitai-Bouca をして阿里不哥に黨せしめ、阿里不哥は遂に部下に推されて、皇帝と稱することを躊躇せざりき。この黨與の重なるものは、蒙哥の正妃忽都台、皇帝の諸子、阿速帶、玉龍答失 Yourung-tasch 昔里吉并に察合台の孫の多くなりき。

夏季の間は彼此互に交渉の全權を缺ける使節を交換するのみなりき。秋に至り、阿里不哥は旭烈兀の子、出木忽兒 Tchounoucour 喀拉札 Caradjar との下に一軍を進發せしめたり。この

の兩王は忽必烈の前衛を指揮せる也先哥 Yessoungga と戦ひて敗北せり。この敗北の報を得て意氣沮喪せる阿里不哥の軍隊は土崩瓦解し、阿里不哥も亦兩王と曩に拘禁せる百人の使節を殺戮せる後乞兒吉思人の地方に奔竄せり。是れこの地方に冬季の舍營地の存せるが爲にて、夏季の幕營地は阿爾泰山中に存し、その領土は母后唆魯忽帖塔尼、別乞の遺領にして、三日程に互れり。

陝西方面に於ける阿里不哥の黨與も毫も成功を見ざりき。忽必烈の位に即くや畏兀兒人出身の名將廉希憲を陝西、四川宣撫使に任じて同地方に派遣したり。廉希憲は西安府に赴き忽必烈の政權を承認せしめたり(六月)。劉太平と霍魯海とは之に先つ二日既に陝西の都城に至り、陰謀を廻らして之をして阿里不哥に黨せしめんと努めたり。新任宣撫使は首尾克くこの兩人の間諜を捕

縛し、忽必烈の將に大赦令を布かんとするを豫知せしを以て、倉皇之を獄中に殺さしめ、了て慣例に従ひ、大赦令を齎せる勅使を郊外に迎へ、直に之を發布したり。

廉希憲は復た劉黑馬を四川に遣して、密里火者と乞台不花とを誅せしめたり。進んで廉希憲の旗下に屬せる諸王合丹 Cadan と總帥汪良臣と八春 Patchun との指揮せる三隊は、その命によりて渾都海征討の準備に着手せり。渾都海は援兵を受くるの必要を感じて黄河の對岸に退却し、途上甘州府を掠め、長城の北に於て蒙古の軍隊を糾合し來れる阿藍答兒と連絡するを得たり。茲に於てか兩軍相合して南進せしが途上に陣營を張れる合丹 Cadan の攻撃に遭へり。彼此互に殊死して戦ひ、勝敗暫く決せざりしも、遂に阿里不哥の軍は四面に敵を受けて挫敗し、復たその陣地を保つ能はず、阿藍答兒と渾都海とは戦死し、その戦役の結果忽必烈は陝西の領土を確保することとなれり。

忽必烈は親ら和林に向て軍を進め汪吉 Ongski 河畔に夏季の舍營地を定めたり。和林の都會は元來支那より食物の供給を得來れるが故、忽必烈が支那の穀物の輸出を禁じたるより以來、飢饉に苦めり。阿里不哥は兵器糧食の缺乏に苦み、貝達爾 Baidar の子阿魯忽 Aigou の幕下に在りしを察合台の奧魯思の君長となし、之に二個の條件を課せんことを思ふに至れり。一は兵器糧食を供給せしむることにして、一はアムー河の境界線并に欽察領土との境上を監視し、旭烈兀、

伯勒克より忽必烈の許に派遣す可き援軍の通過を妨害することこれなりき。

阿里不哥は更に遠く謙謙州 *Kem-Kendjiout* に逃れ、窮乏の極に方りて攻撃されんことを恐れ、使節を兄の許に遣して謀叛を悔み、その宗主たるを承認し、往訪せんことを欲すと雖も、軍馬休養を要するを以て、阿魯忽、旭烈兀、伯勒克諸王の來着を俟たんと旨を致せり。蓋し阿里不哥は以上の諸王の來會を要め、他の宗族諸王と相會して帝國相續のことを定めんとせるなり。忽必烈は來意を諒とする旨を答へ、三王の來着に先ちて速に會見せんことを望めり。次で一隊の兵を授けて一族也先哥をして和林地方に駐屯し、阿里不哥の來着を待ちて之を斡耳朵に案内せしむることとし、開平府に歸りて、爾餘の兵士をしてその衛戍地に歸らしめたり。

一二六一年夏秋の候は了れり、阿里不哥は軍馬の英氣回復せるより進軍を開始し、投降の旨を也先哥に報じたり。かくてその用意を怠らしめ、突然その軍隊を襲ひ之を伐て潰走せしめ、大沙漠を横斷して直ちに忽必烈を侵さんとせり。忽必烈は咄嗟の間に軍隊を糾合し、進んで敵軍に向へり。兩軍は一二六一年の末、戈壁の南端忽札李勒答黑 *Khoudja-Bouldac* 丘陵と昔木土腦兒 *Simoutai* 湖とに近き阿兒卻宏哥兒 *Alchia COUNGOUR* の地に於て會戦し、阿里不哥は大敗せり。忽必烈は追撃を禁じて『彼、思慮なし、思ふに反省せば必ず後悔するに至らん』と云へり。然るに阿里不哥は兄の軍の退却せるを知りて軍を班し、十日の後、曲兒貴兒克 *SIGUITE* の丘陵

に近き先干巴古勒 *Sengan Bagoul* 地方の阿兒志 *Alt* と稱する沙漠の一端に於て第二回の會戦を見たり。激戦夜に及び、兩軍夜陰を利用して退却したり。一二六二年には最早この方面には戦鬪なかりき、これ阿里不哥が阿魯忽背反の報に接し新なる敵軍に向はざるを得ざることとなりしが爲なり。

阿魯忽は阿里不哥より察合台の奧魯思の長官に任命されて、別失八里に赴き、合刺旭烈 *Carai-Holagou* の妃、倭耳干納 *Organa* の手より政權を收めたり。その領土は阿力麻里地方よりアムー河畔に達し、忽ちにして十五萬の大兵を徵發し得たり。阿里不哥は時に敗亡の極物資全く竭きたるを以て三使を阿魯忽の許に遣し、牛馬、兵器、金銀の徵發を命じたり。徵發の結果良好なりしを以て阿魯忽の貪慾心を動して之を沒收せんことを思はしめ、三使の言論のうち不穩の廉ありしと稱して之を拘引し、かくて部下を集めて之に去就を諮りしに、行動を開始するに先て、須らく審議熟考す可かりしも、既に阿里不哥を侮辱したる上は、公然之に敵對して忽必烈を承認するの外他の策なしとの意見なりき。阿魯忽は直ちに三使を斬に處し、徵發せる物資を奪ひて之を部下の軍隊に配賦せり。

阿里不哥はこの豫期せざりし背信の報に接して驚愕し、阿魯忽征討の決心を定め、出發するに臨みて、基督教徒、回教徒、佛教徒等、和林在住の各宗教の管長等に向て、忽必烈若し來て攻撃

せば、任意都城を以て降参することを許したり。これその勇氣に就て恃むこと能はざりしが爲なりき。一度その去るや、可汗は直ちに和林に逼れり。住民は各宗派より降服の使節を出せしに、忽必烈は之を歎待し、且窩闊台、蒙哥が和林に與へたるすべての租税免除の特権を確認したり。かくて更に進軍を繼續せんとせしに、偶々使節支那より來りて、事變起れりとの報を傳へたれば、乃ち途を支那に向けて取れり。

既にして阿里不哥の前衛に將たる哈刺不花 Carad Boucha は布拉 Poulad 城と賽喇木淖爾(速志庫爾 Solt 湖)との附近に於て阿魯忽公子と遭遇し、戰敗れて陣没せり。阿魯忽はこの戰勝によりて安全を得たりと信じ、靜かに伊犁 Hie 河畔の居城に歸り軍隊を解散したり。然るに未だ幾くならずして、阿速帶は第二軍に將として所謂鐵門の險隘を越へて伊犁河を渡り、阿力麻里を陥れ、阿魯忽の私領をも奪ひしかば、阿魯忽は敵兵の未だ攻撃を加へざりし右翼の兵を率ゐて、和闐、喀什噶爾方面に退却せり。間もなく阿里不哥は親ら殘餘の軍隊を引率し來り、伊犁河畔、阿力麻里地方に冬期の舍營地を定め、阿魯忽は敗兵の續々來會せるを糾合して撒馬爾罕に退却せり。

阿里不哥は冬季は人馬を休養し、敵國の領土を劫掠し、阿魯忽の士卒を得る時は悉く之を虐殺したり。この蠻行は禍因を構成せり。翌春阿力麻里地方には恐る可き飢饉起り、夥しき死人を生

じたり。阿里不哥麾下將校の大半は、戰運拙くして投降し來れる敵軍中の蒙古兵に對し非道の待遇を爲すを見て之を怒り、阿里不哥の許を去るに決し、その部下の軍隊と共に、阿爾泰山下の砂漠、綽巴堪 Tchabacan 河畔に於て忽必烈の先鋒隊に將たる蒙哥の子、玉龍答失の許に赴き、忽必烈に仕ふることとなれり。

今や一握の軍隊を止るのみとなりしを以て、阿里不哥は阿魯忽がこの機に乗じて來襲せんことを慮り、倭耳干納と馬思忽惕 Mass'oud-Bey とを遣して媾和の提議を爲さしめたり。倭耳干納は阿魯忽に逼られて察合台遺領の統治權を之に交附せる後、阿里不哥の許に赴きてその命令によりて横領に遭へるを訴へんとし、當時なほその本營に止りたりしなり。然るにその命令を帯びて阿魯忽の許に至るや、阿魯忽は却て之と結婚し、同時に馬思忽惕 Bey に託するに財務行政のこゝとを以てせり。新藏相は撒馬爾罕、蒲花羅兩市に於て莫大なる金銀の貢賦を徵集し阿魯忽をして軍隊の給養を豊ならしめたり。然るに直ちに新強敵に向て之を用ゐざる可からざることとなれり。是れ即ち窩闊台の孫海都 Cairdou が拔都の子孫の後援を恃みて、進んでその領土を奪はんとせるなり。されど撃退されたり。

阿里不哥は今や一兵なく糧食も亦缺乏せるより、一二六四年遂に往きて兄に降りその處分を受く可しと聲明するに至れり。その到着の日、忽必烈は士卒を整列せしめ、阿里不哥が鞠躬如とし

て皇帝の離宮の門に近くや、帳幕の帷を之に被らせ、かく覆はれてかかる場合の恒例に従ひ、俯伏の禮を行へり。暫くして許可を経て内に入り、臣下の席に直立せり。忽必烈は熟視すること多し感慨無量、又一語をも發せず、その涙漣々たるを見て、思はず眼を潤せり。遂に口を開きて、『嗚呼、わが弟よ、我と汝と夫れ何れが正當なりや』と問へり。阿里不哥は答へて『曩には我なりしが、今や皇帝正し』と云へり。阿畢世喀の同胞、阿只吉 Atchigai は阿里不哥と同行せる公子、阿速帶に近づきて『我が同胞を殺せるは汝なるよ』と叫べり。阿速帶は之に答へて『余は當時我が主君たりし阿里不哥の命を受け、我宗族親王の Caradjou こは蒙古語臣下の義也蒙古人は成吉思汗の子孫にあらざるものをすべてと稱す。の手に屠らるるを欲せざりしより親ら之を殺したり。今や忽必烈は我が主君なり、その命だにあらば汝をも殺さん』と云へり。可汗は阿只吉を制止して今やかかる口論を爲す可き時にあらずと戒めたり。茲に於て成吉思汗の甥諸延、塔察兒は立ちて『可汗は本日過去を問ふことを欲し賜はず、一統に歡樂を盡さしめんとの御意なり』と述べたり。次で皇帝に向ひ、語を次ぎて『阿里不哥は立てり何れの席を與へ賜はんや』と問へり。忽必烈は即ち皇子の側に着座せしめ、逸遊以てその日を過したり。

然るに翌日阿里不哥部下の將校は禁錮せられ、忽必烈は四親王三將軍を以て委員を組織し、弟とその黨與とを訊問せしめたり。阿里不哥は叛亂は我一人の計畫に出でたるが故、部下將校には

罪なしと言明したり。皇帝之を詰りて『如何ぞ將校に罪なしと云ふを得んや。蒙哥の推選に反對せる諸將は、敢て之に對して弓を引けるにはあらず、然れども單にその意志の然りしが爲遂に罰せられたるにあらずや、内亂を挑發し、多數の宗族と士卒とを殺したるものに對しては、その刑罰知る可きのみ』と云へり。將校何れも黙して口を開かざりしかば、最も年長なる禿滿 Tolman 諸延は『親友諸子よ、諸子は阿里不哥を擁立するに方りて、一死以て之に盡さんことを誓へるにあらずや、今やこの契約を履行す可きの時となれり』と呼べり。忽必烈はその誠忠を賞し、再び謀反の首謀者を阿里不哥に問へり。阿里不哥遂に之を祕する能はず、不魯花 Bolqa 阿藍蒼兒の二人『旭烈兀、忽必烈の兩王は遙かに出でて遠征の途に在り、而して先帝より大輿魯思の長官と爲されたれば、焉んぞ皇帝たることを憚るの要あらんや』と説きしが故、他の將校とも諮りしに、何れもこの意見を贊成したりしなりと言明せり。列座の諸將も阿里不哥の陳述を是認せしかば、その十人は死刑に處せられたり。されど忽必烈は阿里不哥に判決を下すに方りては、旭烈兀、伯勒克、阿魯忽の列席を臨んで止まざりき。故に暫く三王の來着を俟ちしが、蒙古在住の宗族諸王并に諸將は相會して、阿里不哥并に阿速帶の處分如何に就て協議したり。參列者は忽必烈の意思を體して、全會一致二人の生命を助くるに決し、且帝國三大附庸國の君主に向て、何れも領内に重要條件ありて來會せられざるより、猶豫せば危険なき能はざるを慮りて、有罪の諸將校

を處刑するを以て得策なりと認めたることを知照し、且阿里不哥、阿速帶は之を訊問せる後赦免することとなりたれば、同意を表せられたしと通告したり。

阿魯忽は使節に答へて、忽必烈の同意を経ずして察合台の遺領を支配せる次第なれば、總會議に於て宗族諸王より正式に承認されざる以前に在りては、所見を發表するの資格なしと云へり。旭烈兀はこの際執られたるすべての處置に贊成し、直ちに庫哩勒台に來會す可しと告げたり。伯勒克の回答も同一なりき。かくて阿里不哥と阿速帶とは斡耳朶に入りて可汗に忠誠を表すること許されたり。阿里不哥は一箇月の後病に罹りて斃れ（一二六六年）、拖雷と成吉思汗との側に葬られたり。阿里不哥とは土耳其語にて細腰の義、元史語解には男巫、蒙古語にて純粹の牡牛の義なり。

然るに旭烈兀、伯勒克、阿魯忽は短日月の間に相次で逝きしを以て、忽必烈はイラン方面に於ける蒙古人大食人 Tasiks の統帥權を旭烈兀の長子、阿八哈 Abaca に與へ、朮赤の奥魯思を拔都の孫、忙哥帖木兒 Mangou-Timour に與へ、而して察合台の奥魯思を合刺旭烈の子謨拔來克沙 Moubarek-Schah に與へたり。阿魯忽の逝ける後母倭耳干納之をしてその祖先の位に即かしめたるなり。然るに茲に察合台の曾孫に八刺 Borac 八刺は察合台の子 Moa-tougan 之子 Yissoun-toua の子なり、その同胞の所領は撒馬爾罕の東南 Tchinga-
in 地方に在り。と云ふあり、是より先皇帝の下に逗留せしが謨拔來克沙と共にその奥魯思の統治に與べしとの冊書を得たり。然るにその謨拔來克沙の許に至るや、この任命のことを告げず、唯に故

郷を訪はんが爲に來れるに過ぎずと稱したり。かくて巧みに之を籠絡し、且同時に軍隊の一部を誘惑したるを以て、一度事を擧ぐるや、直ちにこの青年の君公を廢黜し、臆て之を主獵頭に任じたり。謨拔來克沙は回教徒にして、溫厚にして方正、努めて軍隊の暴行掠奪を禁じたり。

宗族諸王のうちにおいてなほ忽必烈を奉戴することを拒みしもの少からざりしが、就中窩闊台の孫海都は阿里不哥が往きて兄に降れるまで之に黨したり。海都は當然父窩闊台の位を襲ぐ可き筈なりし合失 Caschi の子なれば、帝位相續の權利を要求せしも、窩闊台統は是より先皇帝蒙哥に部下の軍隊を奪はれたれば、兵力に訴へてこの要求を主張する能はず、乃ち忽必烈兄弟の確執あるに乗じて、阿里不哥黨に加はれるなり。その降服せる後海都は葉密爾河畔の領土に退却し、擧兵の準備に苦心せり。資性敏捷にして權詐に富み、奇策縱橫、能く朮赤の奥魯思を統率せる諸王侯の友情を博し、その援軍の力によりて、葉密爾河に接壤せる地方、即ち貴由、窩闊台の故地を兼併し、遂に能く一軍を組織するを得たり。忽必烈は使節を遣して、何故に庫哩勒台に來會せざるやを詰り、會見協議の上、友情を示さんと欲するの念切なる旨を傳へしも海都は馬匹瘦せたりとて通常の口實を唱へ、成る可く速に皇帝の許に入御す可しと答へたり。されど三年間種々の託言を爲して約束の履行を避け、遂に公然兵端を開始するに至れり。（一二六八年）チに據る。

上述せるが如く高麗王、王暉 Yang-toun は多年蒙古兵に抵抗せる後、皇帝蒙哥に服従して質

として長子王儂 Wang-tien を遣せり。忽必烈クビライの即位せし時は王暉ツァンは既に歿して數年に及びしかば、王儂は高麗に歸るの許可を乞へり。忽必烈は勅書を與へて國王と爲し、護衛兵を賜ふてその境上まで之を送れり。

王儂ツァンチエンの至るや高麗人は武装して斷乎として蒙古兵を防がんとし、之を君主として認めんとせず、少くもその獨立と相容れざるすべての條約を破棄せんことを要求せり。王儂之と會見すること多しにして、その意見を是認せるが如くなりき。茲に於て境上に駐屯せる蒙古兵の將校等は、高麗人叛けりと皇帝に報告し、征討の部隊を派遣されんことを請求せり。忽必烈は先づ之を慰撫せんと欲し一二六一年を以て、王儂ツァンチエンに與ふるに左の如き敕書を以てしたり。

『我が太祖皇帝、肇めて大業を開きしより、聖々相承け代々鴻勳有りて羣雄を芟夷し、四海を奄有せしも、未だ嘗て専ら殺すことを嗜まざりき。凡そ屬國列侯、茅を分ち土を錫ひ、祚を子孫に傳ふるもの、管に萬里のみならざるも、孰れか向の勅敵に非ざらんや。此を觀れば則ち祖宗の法は言を待たずして章々たり。今や普天の下、未だ臣服せざる者は惟爾の國と宋とあるのみ。宋の恃む所は長江にして長江は險を失ひ、藉る所は川廣にして川廣は支へず。邊成は自ら其の藩籬を撤し、大軍は已に心腹に駐す、鼎魚幕燕、亡ぶることは旦夕に在り。爾は初め世子として幣を奉じ欸を納れ身を束ねて朝に歸し、哀を含で命を請へり。良に矜憫す可きが故に遣して國に歸ら

しめ、完く舊疆を復し、爾が田疇を安んじ、爾が室家を保たしむ。弘生の大徳を弘め宿構の細故を捐つるなり。是を以て已に嘗て戒めて邊將に敕し兵を斂めて命を待ち、東方既に定まらば、將に戈を錢塘に廻らさんとす。半載を餘すに迫んで、乃ち爾の國內亂ありて盟に渝ふを知り、邊將復た戒嚴を請へり。此何故ぞや以て果して内亂ありと謂ふか、權臣何ぞ自立せずして世孫を立つる。以て傳聞の誤なりと謂ふか、世子何ぞ國に之かずして境上に磐桓するや。豈に世子の歸る期を愆るを以て左右自ら相猜疑し私憂過計して然るか。重ねて念ふに島嶼の殘民久しく塗炭に罹り、窮兵極討は殆んど本心に非ず。且、御すること其道を失へば天下狙詐、威な敵と作る、赤心を推して人の腹中に置かば反側の輩自から安んぜん。悠々之言又何ぞ校るに足らん、命を邊關に申るは斷じて予が衷よりす、逋逃を以て執政を問るなく飛語を以て定盟を亂る無し。惟事は誠を推して一切問ふ勿く、宜しく曠蕩の恩を施し遐邇の化を一新せよ。尙書金仁雋より次を以て中外枝黨官吏軍民は聖旨到る日より已前或は首として内亂を謀りて、王師を旅拒するあり、已に降附して還た叛するあり、仇讐に因て擅に殺し歸る所無くして主に背きて亡命し、已むを得ずして衆の脅に隨ひ、從て應に國人に據る可きものは、但し曾て法を犯すも罪に輕重なく、威な赦して之を除かん。世子其れ裝を趣し駕を命じ國に歸て政を知り、仇を解き憾を釋き徳を布き恩を施せよ。緬かに瘡痍の民を惟ふに正に撫綏の日に在り。彼の滄溟を出でて平壤に宅し、刀劍を賣て牛犢を買

ひ、干戈を捨てて耒耜を操る等、凡そ援濟す可きは勤勞を憚ること勿れ。苟も富庶の徴あるは禮義の復す可きことを冀はん。亟かに疆界を正して以て民心を定めよ。我師は復た限を踰えず大號一たび出でて朕言を食まず、復た敢て亂を踵ひ上を犯すものあらば、爾主を干すに非ず、我が典刑を亂すなり。國に常憲あり、人之を誅するを得ん。於戲、世子よ其れ王として往け。欽めよ、恭しく丕訓を承け永く東藩と爲り以て我が休命を揚げよ。』

之と同時に忽必烈は最近の戰に於て捕虜となれる高麗人并に王國の内亂に際して同王國より亡命し來れるものを歸國せしめ、疆上の蒙古兵を禁じて高麗人を擾すことなからしめたり。この態度は叛徒をして解兵して王僦を迎へ以て之に服従せしめたり。高麗は毎年使節を忽必烈に遣りて新年を賀せしめたり。

蒙古皇帝は一二六六年に於て書を日本皇帝に寄せ、未だ使節を派遣し來らざるを訝りて之を責めんとし、二人の使節に命じて高麗より船に乗じて之に赴かしめんとせり。然るに兩使節は高麗に於て日本渡海の危険甚しきを聞きて大に恐怖し、空しく歸路に就けり。忽必烈は高麗政府が使節を戒めてその目的地に至らしめざりしを怒り、給かれたるを信じて疑はず、一二六八年に高麗王の弟王涓 Vang-Tchang が新年祝賀の爲入御するや激しく之を責めたり。王涓の歸るや、皇帝は直ちに兩使を派して高麗王に下の如き詔諭を傳へしめたり。

『太祖の法制に據るに、凡そ内屬の國は、質を納れ軍を助け糧を輸し驛を設け、戶籍を編し長官を置く可しとあり。已に嘗て明かに之を諭せしに稽延して今に至り終に成言なし。太祖の時に在て王綽等已に入て質たりき、〔原文には窩闊台の時 Vang-jouin 云々とあり〕驛傳も亦粗々立てるも、餘は率ね未だ奉行せず。今將に罪を宋に問はんとす、助くる所の士卒舟艦幾何ぞ。糧を輸するときは則ち就て儲積を爲す、設官及び戶版の事の若きに至ては其意何と謂ふか、故に以て之を問ふ。』

高麗王は敬んでこの命令に従ひ、戰艦一千隻を艦裝し、乗組員一萬人を備へたり。忽必烈は之を宋に對して用ゐんとせるにあらざして、日本に對して用ゐんとせるなり。而もこの日本遠征の計畫は暫し之が實行を延期せざるを得ざることなれり。

忽必烈の帝位に即くや、燕京即ち中都を選んで、主たる住居の地と爲し之を以て帝國の首府と爲せり。この金帝國の舊都は曩に成吉思汗の軍隊之を廢址に化せるより、忽必烈は中都の東北に新都を營み、一二七二年を以て竣工し之を大都と稱したり。新都は舊都に隣接し、忽必烈は之を以て冬季の住地となせり。夏季をば開平府に過すを常とし、一二六四年之上都と稱することとなせり。

忽必烈は初めて、各宗教に對しては須らく一視同仁たる可しとの太祖成吉思汗の遺訓を棄て當時蒙古人の間に漸く普及することとなるる佛教を奉じたり。仁義の道を説ける孔夫子の哲學は社

會の秩序を維持するの基として缺く可からざるものなれども、以て剽悍なる戦勝者の心を動すに足らざりき。道士 Tsaosae の迷信的儀式は蒙古人の間にも亦勢力ありしが、畏兀兒吐蕃地方より成吉思汗家諸王の兵營に蔓れる佛陀の僧侶は巫祝 Cames よりも知識優れるが故之を壓倒するに至れり。この僧侶は蒙古人は之を喇嘛と云ひ、支那人は之を和尚と云ひ、日本人は之を坊主と呼べるが、女色を斷ちて例として僧房に住し、その側に巍然として聳てる本堂は極めて奇怪なる寓意的形體を具ふる神を祭れり。靈魂輪廻は佛教の主たる教理にしてこれ婆羅門教より借り來れるものなり。何人にも善惡の守護佛ありて絶えず之を監督し、すべての行爲に注意す、その死するや靈魂は地獄の帝王の法廷に召喚され、判決によりて如何なる身體に宿る可きやを定めらるるなり。各自はその所行の性質に従ひて現世に比して或は優等なる階級に生るるあり、或は劣等なる階級に生るるあり、その種類は上は天上より下は地獄の嚴罰を課せらるる惡鬼に及べり。この天上と惡鬼との兩極端の間には無數の衆生あり、天人、人間、畜生、餓鬼の四大種類あり、是亦無數の階級に分れたり。人は善惡の守護神を祈り、幸福を得んが爲には彼に災禍を避けんが爲には是に訴へざる可からず。是は種々の奇怪なる形體を具ふるものにて、その祟を脱れんと欲せば、佛の位に上れる聖人が印度古代の言語を以て作れる咒文を唱へざる可からず。この教理は大部の神話を構成し、佛教の學者は或は八大地獄の描寫を爲し、或は罪業深きものの苦行を記述して、

以てその豊富なる想像力を驅せたり。

佛教はすべての美德の實行を勧め、而して殺生、偷盜、邪淫、詐欺、讒謗等を殊に禁じたり。その教理の極意に従へば、最も完全なる神聖の域に達せんとするの人は、すべての希望を放棄し、快樂をも苦痛をも感ぜず外物によりて動かされず、全く無感覺の状態に住し、唯に神佛のみ念ぜざる可からずと云へり。一度この境地に至らば、靈魂は復た輪廻によりて清めらるるの必要なければ、神佛の域に上ることとなるなり。

この宗教の開祖は釋迦牟尼にして、西紀前約千年に迦濕彌羅に生れたり。印度語にて佛陀と稱し、支那人は之を轉訛して佛 Foto Foé Fo と呼びて神の如く崇めらるるが、最後に出でたる在天の立法者なりと云ふに過ぎず、釋迦牟尼以前數世紀に互りて、幾多の佛陀即ち宗教の建設者相次で出でたりしなり。現世に於ける之が代表者は神靈を權化せるもの即ち天神の人の生るる時若くはその青年の時に方りて之に宿れるもの是なり。これ即ち佛教信者の精神上の指導者なり。

Pallas の Saml. hist. Nchr. 第二册 Grosier の支那誌第五册 Descriptions の匈奴史第一册に據る。チには支那人印度人その他各民族の博士 Bakischs 夥しと雖も最も尊重せらるるは吐蕃の博士なりとあり。Bakisch は蒙古語にてドクトルの義也。

忽必烈は一二六一年の一月帝國內佛教の管長に青年の喇嘛、瑪迪都幹咱 Mati Dhvâdscha を任命したり。本名よりも八思巴 Pakpa 喇嘛即ち無上聖喇嘛の尊稱にて知られたり。蒙古源流に據る。吐蕃の名家に出で、同國の薩斯迦 Saschia に生れ、非凡の英才を以て嶄然として頭角を現

し、忽必烈クビライの値遇を得て、釋教を統るの職を授けられ、且吐蕃チベットの政權をも委ねられ、大寶法王の稱號を與へられ帝師と爲されたり。大喇嘛の發端はかくの如くなりき。吐蕃チベットの獨立王國仆れてより約四世紀間、同地の部族は各々族長制令の下に立てり。唐古特タングットの亡びてよりこの多數は成吉思汗チンギスに服従し、更に將軍兀良合台ワリヤンカゲに征服せられたるもの少からざりき。吐蕃チベットに對する支配權を確立せんとして忽必烈クビライは之を州縣に分ち、その知事はすべて新に立てたる法王の制御を受けしめたり。Hyacinthe 譯西藏誌に據る。西藏人は八思巴 *Paldar* と云ふ神の權化の義にて蒙古人は之、元史語解には唐古チンギスを *Khoutoukrou* 支那人は之を *Changsaang* (校者曰く、馮氏には聖僧とあり) と呼ぶ。〔特語聖也とあり〕次で忽必烈クビライは八思巴に命じて蒙古文字を製作せしめたり。成吉思汗チンギス以來、塔塔統阿タタツンアが蒙古人に教へたる畏兀兒ウイグル文字を以て、蒙古語を書きしも、今やこの命あるに至れり。八思巴の捧呈せる新文字は形狀方形にして極めて西藏文字に類し綴字一千以上を構成せり。Pallas の *Saml. Hist. Tschirichen* 并にクラブを參考せよ。是より先喇嘛、薩斯嘉班第達 *Sagstcha Pandita* は成吉思汗家の兩親王に聘せられて吐蕃より至り、かかる文字の製作に従事せしも、その效を見るに及ばずして逝けり。蒙古源流のシユミシユミ皇帝は八思巴の文字を嘉納して一二六九年三月下の如き詔を公布したり、『我國家は基を朔方に肇め、俗簡古を尙び未だ製作するに違あらず、凡そ施用するの文字は因て漢楷及び畏兀兒字を用ゐて以て本朝の言を達せり。諸を遼金及び遐方の諸國に考ふるに各々字あるを例とす。今文治寢興して字書闕くるあらば制に於て未だ備らずと爲す。故に特に國師八思巴に命じて蒙古の新字を創

爲し、一切の文字を譯寫せしむ。言に順ひ事を達するを期するのみ。今後凡そ璽書領降のことあらば、并に蒙古の新字を用ゐる、仍各其國字を以て之に副へん』この功を思ひ八思巴に教王 *Kiao-vang* の稱號を與へたり。Hyacinthe 蒙古誌に據る。

祖先に奉祀せる支那人の例に倣ひて忽必烈クビライは一二六三年燕京ヤンキンに殿堂を建てて成吉思汗チンギスその父也速該スガイ、その四子、窩闊台オゴタイ、朮赤ジュチ、察合台チャカタイ、拖雷ツルイ、その孫、貴由クユク、蒙哥モンゴの靈を祭り且之に支那流の諡號を上れり。支那人は之を太廟 *Tai-miao* と稱す。何れも特に一室を以て宛て、壁に懸けたる小牌に俗名と諡號を刻し、その傍に正妃の俗名と諡號とを刻したる小牌を見る可し。皇帝は一二六三年四月初めてこの殿堂を訪ふて祖先の靈を祭りしが、この殿堂の建築は一二六六年に至りて落成せり。忽必烈クビライは毎年時を定めて僧侶に命じて殿堂に於て七日七夜に互りて讀經せしめたり。ロ、イに據る。

支那に於ては太古の世より慣例ありて、新王朝の開祖は新に國號を定めその血統の續かん限り之を用ゐたり。忽必烈クビライの父祖は支那の領土を以てタルタリーに本據を置ける大帝國の屬地と見做せしも、忽必烈クビライは帝都を支那に定めその法律習慣を採用せるより、一二七一年百官の建議を容れて國號を元 *Yuan* と定めたり、その意義は起元、原理と云ふが如し。ニに據る。忽必烈クビライは又年號をも定めたり。イに據る。草木子曰、取大易大哉乾元之義、國號年號曰至元。〔日大元、取至哉坤元之義、年號曰至元〕

忽必烈クビライの左右には支那の學者多く、姚樞ヤウシュ、李昉リチウ、許衡ヒョウヘン、竇默チユイメ、劉秉忠リウヒョウチュウ以下の人物、朝廷に

在りて政治の術を以て進めたり。數々蒙古人の殘忍に過ぐるを説き、その暴行を恐るるの餘り人民をして抵抗を思はしむるに至る可く、仁慈の態度は却て都城の降服を容易ならしむる可しと諫めたり。（ロに據る。）支那の皇帝に倣ひて、忽必烈は學士院を創立し、第一流學者を之に集めたり。是即ち翰林院なるがその學士の多數を擧げて委員を組織し、特に帝國歴史編纂の任務を之に託したり。一二六三年に中書左丞に任ぜられたる姚樞の進言を容れ、忽必烈は帝國内の各行省に命じて學校を設け、以て青年教育訓練の機關と爲せり。蓋し蒙古人は僅に劍を揮ひ、弓を牽き馬を操ることを解するのみなれば、忽必烈は蒙古の宗族大官が宮中にあまた出入する支那人泰西人に比してその知識の及ばざること甚しきを見て大に之を慙ぢ、蒙古人をして無學の域を脱せしめんことを望めり。趙璧と呼べる支那人は既に經書の一部を蒙古語に翻譯したり。許衡は又蒙古語にて支那の歴史と年代記の大要を編纂したり。忽必烈は蒙古人をしてこれらの書に就て學習せしめ、親ら許衡の書に就て之に質問するをも辭せざりき。（イに據る。）國子祭酒許衡、纂歷代帝王名諡統系歲年爲書授諸生、帝位に陞るや曩に四川、江南に於て捕虜となり、蒙古人が奴隸として賣却したる數千の學者を釋放したり。その一技一能あるものは何れの民族に屬し何れの宗教を奉ずるに拘はらず之を保護したり。畏兀兒人、波斯人、土耳其斯坦人等多數の外國人は譯官として採用せられたり。波斯の天文學者札馬魯丁 Djemal-ud-din は朝廷の慣例に従ひて曆を作り、且星學上の精巧なる器械を皇

帝に献上したり。

〔世祖在藩邸時、有旨徵同回爲星學者札馬刺丁等、以其藝進、未有官署、至元八年、始置司天臺（元史、百官志）八年七月壬戌朔、設同回司天臺官屬、以札馬刺丁爲提點、（同本紀）九年七月丁巳朔、禁私書同回曆（本紀）至元四年、西域札馬魯丁撰進萬年曆、世祖稍頒、（同天文志）〕 弗林即ち東羅馬帝國の愛薛 Gaisi は典藥數行之（元史曆志）世祖至元四年、札馬魯丁造西域儀象（同天文志）〕 弗林即ち東羅馬帝國の愛薛 Gaisi は典藥數學のことを掌れり。（イに據る。）時卒（同愛薛傳）廣惠司至元七年始置（同百官志）十年正月乙卯朔、改同回愛薛所立、京師醫藥院、名廣惠司（同本紀）

忽必烈の治世以前に於ては行政司法の官吏は極めて乏しかりき。政權は達魯花赤 Darougas

〔元史語解に札魯花赤は〕と稱して官印を給せられたる軍隊の司令官之を握り、丞相よりもその權重かりき。忽必烈は劉秉忠と許衡とに命じて行政制度を組織し、官吏の數を定め、階級を立て、職權と俸給とを確定したり。次に中書省、御史臺、禮部、吏部、刑部、工部、兵部等の諸官省を設けたり。數學院も設立せられ、軍隊宮中の官吏に關する規定も定められ、それらの法令はすべて公布されたり。（イに據る。）

第二章

海都^{カイツ}は戦端を開始せるも、以て忽必烈^{クビライ}の宋朝攻撃の計畫を牽制するに足らざりき。忽必烈は支那全土に君臨せんことを望みしが、この経略は成吉思汗の子孫たるもの決して之を放棄せざりしなり。數年前、宋朝が國際の法律を無視せしことは忽必烈に絶好なる開戦の口實を與へたり。初め一二六〇年、忽必烈は翰林侍讀學士郝經^{ハオキヤン}を臨安の朝廷に遣して即位を報じ、鄂州城下^{ウオチユ}に於て締結したる條約の實行を促したり。然るにその宋の領土に入るや、賈似道^{キヤシダウ}は皇帝の忽必烈との條約を知らんことを恐れ命を下して之を拘引して幽閉し、且殘忍にもこの條約に干與せるものを悉く殺して以てその口を塞げり。郝經の拘引は忽必烈をして怒て右の如き宣言を發せしめたり。時に一二六一年なり。

『朕即位の後、深く兵を戢むるを以て念と爲せり、故に前年使を宋に遣はして以て和好を通じたり。宋人遠圖を務めずして、我が小隙を伺ひ、反て邊釁を啓きて東剽西掠、曾て寧日なし。朕今春還宮するや諸大臣皆兵を擧げて南伐せんことを請へり。朕重ねて兩國生靈の故を以て、猶ほ信使の還歸するを待ち、心を憐めて以て和議を成さんことを冀へり。然るに留て至らざる者今又

半載なり。往來の禮遽に絶え侵擾の暴已まず。彼嘗て衣冠禮樂の國を以て自ら居れり、理當に是くの如くなる可けんや、曲直の分灼然として見る可し。今王道貞を遣して往て諭さしむ。卿等當に爾の士卒を整へ、爾の戈矛を礪き、爾の弓矢を矯め、約して諸將を會し、秋高く馬肥たる時、水陸道を分て進み、以て問罪の擧を爲す可し。尙くば宗廟社稷の靈に頼り、其れ克く勳あらん。卿等當に朕が心を宣布し、明に將士に諭す可く、各々當に自ら勉む可し朕が命を替る勿れ。』

然るに皇弟阿里不哥^{アリブカ}との對戦は忽必烈をして宋朝に對する征討計畫の實行を是非なく延期せしめたり。而も砂漠附近に於て二度阿里不哥を破りて燕京^{ヤンキン}に還るや（一二六二年二月）間もなく、江^{キヤンホアイ}淮大都督李壇^{リタン}謀叛の報を得たり。李壇は山東の濟南^{シヤンナン}及び益都^{イック}（青州府^{チンチュウフ}）を奪ひ、同地方の要地に配賦されたる蒙古の守備兵を虐殺して宋に降り。忽必烈は諸王哈必赤^{ハピチ} Apiche 并に丞相史天澤^{シテンチエ}をして李壇を攻めて之を濟南に圍ましめたり。守備は頑強にして、城内糧食の盡くるや、乃ち人肉を食へり。四箇月の後、李壇は百計盡き妻妾を手双して大明湖^{タウミン}に身を投ぜしが、水淺かりしが爲、史天澤はその首を刎ねたり。宋朝がこの叛亂に向て陰に聲援を與へしは勿論なり。

宋朝に對する抗議の理由ありしも、忽必烈はなほ數年間開戦を猶豫せざるを得ざりき。皇帝理宗^{リツオン}は在位十四年にして一二六四年十一月齡六十二歳にして崩御され、男子無かりしより帝位は甥趙禔^{チヤウチ}之を襲へり、度宗^{トクオン}即ち是なり。かくて一二六七年に至りて初めて、忽必烈は南方支那攻撃の

宿志を實行せんと決意し、作戰計畫の討議に際して、宋の將軍の投降せるものより有益なる獻策を得たり。是より先數年前劉整と云へるもの、四川の瀘州地方の知事たりしが、宿仇たる四川制置使が賈似道に讒構せるを知り、生命の危険を慮りて降を蒙古に請ひたり。一二六一年の末、忽必烈の許に入朝せる時、湖廣、四川の境上なる夔州府行省兼安撫使に任ぜられたり。劉整は宋朝の武將中に在りて有數の人物なりき、開戦の決せらるるに際して襄陽の攻撃を以て作戰を開始せるは、劉整の發議を採用せるにて、襄陽は漢水の北岸に位し一度之を手にはせば長江流域一帯の征服手に唾して成る可きなり。襄陽も對岸の樊城も共に窩闊台の時代には蒙古人之を占領したりき。賈似道は劉整を歸順せしめんとにや、將た蒙古人をして之を疑はしめんとにや、燕郡王に封じ金印、牙符等を授けたり。劉整はこの辭令を齎らせる使節を執へて、親ら忽必烈の許に至り、脚下に俯伏して再び誠忠を誓へり。忽必烈は劉整を待遇するに敬意を以てし宋の使節を斬に處したり。

兀良合台の子都元帥阿朮 Atchou と鎮國上將軍都元帥劉整とは、忽必烈の命を受け、一二六八年十月七萬の兵を率ゐて進んで襄陽を圍めり。中書左丞相史天澤は宋朝征討軍の司令長官に任ぜられたり。大汗に服從したる畏兀兒人、波斯人、亞刺比亞人、欽察人、アラニー人等各民族出身の多數將校は喜んでこの支那の名將の下に戦へり。史天澤は襄陽の地勢を視察してその長日月

の攻撃に堪え得可きを認め、飢餓に陥れて之を苦しむ可しと爲し、陸上の交通をすべて絶たんとして、圍らすに長壁を以てし、城外三リーグの地に位せる山嶺をその圍内に收め四圍の丘陵には幾多の要塞を築きて互に之が連絡を保てり。

然るに攻撃のことを指揮せる劉整は、支那人が無數の軍船を水面に浮ぶるを見て、河流を制御せざる限り救援隊の入城を妨ぐる可き能はざるを感じたり、蒙古軍は多數の船員の備なきが爲に大に苦めり。勿論劉整の同僚阿朮は五十隻の大船を新造せしめて、士卒をして連日操縦戰鬥の術を演習せしめたり。この準備ありしにも拘らず、攻撃軍は翌年の秋河水の暴漲せるを利として、武装を整へ糧食その他軍需品を満載せる支那船隊の襄陽城下に來りて、補給のことを敢てせんとするに方り、之を妨害し得ざりき。但し阿朮はその歸帆せんとするに方りて兎に角大損害を與へ、五百隻を捕獲せり。

包圍攻撃一箇年の終に至り、蒙古軍は樊城と襄陽とが數條の浮橋によりて相連絡せるより、之をも圍むの必要を認めたり。漢水の兩岸にはあまたの兵營と掩堡とを設け、水流には武装せる船を浮べ且鐵鎖を繋ぎて航通を妨げたり。

襄陽の運命は恰も天に任せられたるが如く、宋の朝廷はこの要地救援の爲に何等の策をも講ぜざりき。賈似道は只管帝國の時事を隠匿して皇帝の聰明を覆はんことに苦心したり。傳ふる處に

據れば、この警戒ありしにも拘らず、ツツオン度宗は襄陽の圍を受くること既に三年に及べるを聞き、その詳細を知らんことを望まれしに、キアセ賈似道は蒙古兵既に圍を解きて北歸したりと詐り皇帝の耳にかかる虚報を傳へたるものは誰ぞとて之を求め、その姓名を明にせざりしも遂に能く之を檢出し、口實を設けて之を殺したり。而も度宗の下問を受けしが爲、キアセ賈似道も暫し覺醒せるが如く、ファンウエンフ范文虎をして中外諸軍を總べて襄陽を救はしめたり。

クビライ忽必烈の側に於ては、一二七一年攻撃軍掩護の任務を帯びたる軍隊を糾合したり。この救援隊は三軍に分れ各々途を異にして進軍し漢水の河岸に於て合して一隊となりしが、その上流に敵の船隊本據を定めたり。チには交戦四年の後可汗の將軍より援兵を乞へるより、直ちに之を派遣せんとし、忽必烈はアヒンを與へて Arghins の征討に向はしむ、功あるものは之を賞せんと云へり。この軍隊は浮橋を造りて水面の往來を而してこの囚徒のうち功に依りて任用されしもの少からず云々とあり。

妨げ、かくて殆んど支那船の全部を奪ひたり。
アチユ阿朮は十萬の兵を引率して進んで襄陽に近けるファンウエンフ范文虎を迎へんとせしに、兩軍の前衛先づ衝突し、支那兵は寸斷されたり。この敗報に狼狽したる宋軍は旗鼓鎧仗輜重を棄てて遁れ去れり。

シアンヤン襄陽の守兵は勇猛にして才略ある武將リウウエンホアン呂文煥を戴き、この兩回の敗戦の報に接するも毫も意氣沮喪せざりき。包圍攻撃四年の終に至り(一二七二年)、城兵は復た十分に糧食の供給を受けしが、食鹽、藁稈、絹布等の必要品は漸く缺乏を告げたり。茲に於てガンロ安陸の守將乃ち之が補給を試

みたり。ガンロ安陸は襄陽府の下流二十リグの地に於て漢水に臨める市街にして、之を守れるは京湖制置大使リチンチ李庭芝なりき。リチンチ李庭芝は先づ北より來て漢水に注げる一枝流に於て輕舟百餘隻を造らしめ、三舟づつ聯結して一舫と爲し、中の一舟に裝載し左右の兩舟には武裝せる兵士を乗込ましむることとなせり。乗船せんとするものには重賞を約せしかば、三千の死士を得たり。リチンチ李庭芝は張順、シユンチヤンクエ張貴の兩統制をして之を率ゐしめしが、その勇猛なる能く士卒をして多大の信頼心を起さしめたり。舟には火箭と弩とを備へしが、弩とは火藥の力を借りて石又は燃燒せる炭を發射するの武器なり。この船隊は二隊に分れ夜に乗じて漢水に入りて溯航し、蒙古兵の屯營を過ぎ、航行を阻害せる鐵鎖を斷ち、絶えず干戈を交えつつ舟を行ること十二リグの後、曉に近くシアンヤン襄陽城下に達せしかば、歡喜と熱誠との盛なる示威運動を以て迎へられたり。されど統制の一人張順は途上に於て戦死し、他の一人張貴は船隊を率ゐて歸航の途に就きしが蒙古の船隊を遠くより望みて宋軍に屬せるものなりと誤認して之と會戦することとなりし爲、激戦多時部下は虐殺せられ、張貴は身に數十の創を負ひて捕虜となれり。されど飽くまで降を肯ぜざりしかば蒙古兵は之を殺し、四人の捕虜に命じてその屍を襄陽に運ばしめたり。

この頃忽必烈が波斯より招聘したりし砲匠、攻撃軍の本營に着したり。是より先畏兀兒人出身の參知政事阿里海牙 Alihaiya 攻撃軍のうちに在り、曾て忽必烈に奏して西域の砲匠一種の兵器

を製造し、之を用ゐる時は能く重きを遠きに致す可しと云へり。皇帝乃ち父旭烈兀に次で波斯の王位に即ける阿八哈 Abaca に之を求めたり。阿不哥は命によりて阿老瓦丁 Alai-rud-din 亦思馬因 Ismail の兩砲匠をして兼程之に赴かしめたり。兩砲匠は先づ大都に於て忽必烈の御前にその技を試み、かくて一二七二年の末に方り軍に赴かしめたり。

翌年の初兩砲匠は樊城の城壁に對して大砲を据え、之を以て重さ百五十斤の石を投げ、〔元史亦思馬因の傳には、相地勢、置砲于城東南隅、重一百五十斤、機發震天地、所擊無不摧陷、入地七尺とあり、本文重さ百五十斤の石を投げは誤解と思はる。〕深さ七八尺の穴を穿ちたり。襲撃は容易となれり。阿里海牙の指揮せる蒙古軍は襲撃の任務に當り殺戮縱横、乃ち外郭を奪へり。茲

に於て蒙古軍は直ちに兩城を連絡せる浮橋を斷たんとし、史天澤よりこの攻撃を命ぜられたる阿朮は、首尾克く浮橋を焼きたり。爾來河岸に沿ふて配置されたる軍隊は、樊城と襄陽とすべての連絡を斷つことを得たり。蒙古軍は先づ樊城を孤立せしめ、襲撃して之を奪へり。守將范天順は生きては宋臣と爲り、死しては宋鬼と爲らんと云ひて自殺せり。同僚牛富は死士百人を率ゐて巷戰を試み、退却するに方りて民家に火を放てり。遂に身に重傷を負ひて火災のうちに投じて自殺し、從兵も亦之に倣ふて死せり。かくて蒙古軍は一二七三年二月樊城を占領したり。

樊城の陥るや、賈似道は初めて意を決して熱心を表示し、親ら襄陽の援に赴かんことを請ひしが、而も御史を利用して帝都に在りて大局を總攬すること更に必要なれば、外に出る勿れとの勅

令を受け、高逵を擧げて軍の司令長官と爲せしが、不幸にも高逵と呂文煥とは公々然相敵視せり。

樊城攻撃に用ゐたる大砲は同城陥落の後、襄陽に對して据えられしが攻撃の開始せられしは同年十一月のことなりき。大砲の恐る可き音響を發して譙樓に命中するや、その聲恰も震雷の如く、守兵は狼狽して大砲の射撃に暴露されたる地點を避け、イ、ロに據る。Videlou の附録には西域の砲匠の製造せる大砲とは即ちカノンの一種なる可しとあり。チには

Sayan-fou の攻撃を叙して支那には大なる Mandjaniks Counga Mandjanik は希臘語 Mechanikos に出で波斯人亞刺比亞人は弩砲の意に用ゐたり、Counga は意義未詳)なければ、可汗は一砲匠を Damas 又は Balbek より招聘せり、その三子 Abou-biker, Ibrahim, Mohammed の三人職工を營つて七門の大なる Mandjaniks を製造し、驛子 Man-zi 即ち南方支那の要塞 Sayan-fou の攻撃に之を用ゐたりとあり。Marco Polo の旅行記には襄陽の攻撃に際し、その父 Nicolo 叔父 Matteo と共に偶々帝都に在り、重さ三百斤の石を投げ可き西域の弩砲を製造せんことを忽必烈に上奏し、かくて勅命によりて鑄工と大工とを使役せしに景教信者殊にその技に熟達し數日にして三門の弩砲を製造し、之を戰地に送りて襄陽攻撃に用ひたるに忽ちにして降り云々とあり。ヴェニス人の朝臣にありて駐ること一年、伯勒克、旭烈兀の兵に破られてより八割の都せし蒲花羅に赴きて滞在三年に及びしに、偶々旭烈兀が忽必烈の許に派せし使節蒲花羅を過ぎ、ヴェニス人の兄弟を雇ひて一行に加へたり。かくて兄弟は數年間支那に滞留し、一二七二年を以て一旦歸國せしも、問もなく Nicolo の子 Marco を携へて再び支那に向へり。この青年は支那に行はれし各國の語に通じ、忽必烈に重用されて十七年間支那に在り、一二九一年を以て之を去れり。從來歐羅巴人は支那と云へばその名を知れるのみならず、その紀行出で始めて支那の事情を知りたり。城中洶洶たりき。今や降服を勧むるの好時機となれり。劉整は豫て呂文煥と相識の間柄なれば之と對談せんことを交渉して城壁の下に近きしに、その將に守將と商議を開始せんとするに方り、城兵の潜伏せるもの急に矢を放ち甲冑の精銳なりしが爲、辛うじて生命を完うすることを得たり。蒙古軍この背信の行爲に對する復讐として、襲撃を試みんとせしが、劉整と阿里海牙とは之を制止

したり。阿里海牙は守兵に傳ふ可き忽必烈の招諭文を有することを之に知らしめ、城壁の下に近きて高聲を以て之を朗讀したり。曰く「爾等茲に孤城を拒守すること今に五年なり、力を爾の主
に宣す固より其れ宜し。然れども勢窮り援絶え、數萬の生靈を如何。若し能く歎を納るれば悉く
赦して治する勿く、且遷擢を加へん」と。

阿里海牙は更に矢を折て約束を實行す可しと誓ひしより、呂文煥も遂に招諭に應じて城を蒙
古軍に引渡し、次で阿里海牙と共に忽必烈の朝廷に赴きて優遇を受け、襄漢大都督に任ぜられた
り。部下の將校は何れも位地を進めて之を禁軍に編入したり。

蒙 古 史

呂文煥の背叛は宋の朝廷に大動搖を來したり。蓋しその一族は帝國名家の一なればなり。一
族のうち要職に就けるものの多數はこの叛賊と血縁あるの罪を思ひ上表して辭職を乞へり。然れ
ども呂氏の一族と親交ある賈似道はその上表を黙過したり。

忽必烈は北方に於て一部の諸王と交戦中なりしを以て南方の敵對行爲を中止せしむるの意あり
しも、阿里海牙、阿朮、劉整等の諸將は、支那政府の無氣力なるを利用し襄陽占領の好機に乗じ
て戰爭を繼續す可きことを主張したり。皇帝度宗は既にして崩じたり（一二七四年八月）。帝は
優柔不斷にして國務を擧げて賈似道その他の大臣に委ねしが、是亦深く帝國の利害を念とせざり
き。大臣等は度宗の長子趙昀を即位せしめんとせしが、賈似道は先帝の第二子趙昀に四歳

なるを立てて帝位に即かしめば、以て長く政權を壟斷し得可しと思へり。是恭宗にして度宗の父
の寡婦謝氏攝政となれり。

支那帝國の出征の準備着々として進捗せらるる時に方り、忽必烈は宣言書を發して宋朝に對す
る敵對行爲を辯明せんとせり。即ち先づ成吉思汗、窩闊台、蒙哥の三朝に兩帝國の間に鞏固なる
平和關係を確立せんとして數回提議を爲せることを説き、次になほ一諸王たりしとき江畔に於て
宋に媾和を許したりしことを述べ、而も宋が部下兵士の退却と共に之を破りしことを語り、更に
即位の後は過去の不滿をすべて水に流して、直ちに提議をなさんとし國使を派してこの平和關係
を確實ならしめんと圖りしに、宋は之を妨げて目的地に赴かしめざるのみか、剩へ國際の禮讓を
無視して之を拘引し、今なほその一行を抑留して還さずとて大にその不法を鳴らしたり。

第 三 編

この宣言書を發布したる後、忽必烈は史天澤と伯顔とを湖廣方面征討軍の總統となし、阿朮、
阿里海牙、呂文煥等を麾下に屬せしめたり。又他の一軍は博羅權 Polohuan 安塔海 Atahai
劉整、塔出 Tatchou 董文炳の指揮を受け、江南に出征することなれり。トには Coubla は六七一
を征服する爲十五 tomans (十五萬人) あり成る一軍を Adjou (阿朮) Begulimisch, Bayan その兵數は總計二十萬人
(蒙古台 Houka nyan の子伯顔) Alibeg (Yekadj) の子) 等の統率の下に送わつとあり。その兵數は總計二十萬人
に上れり。史天澤は途上病に罹り、諸軍皆伯顔の節制の下に立てり。ロ、イに史天澤は一二七五年
初眞定府に於て逝けるが、死するに方て、忽必烈に向つて元兵江を渡りし後、殺掠を禁せんこと

を求めたり。イに據る、チにはこの將軍の名は Semeké と書せり。初め伯顔は數年前阿八哈の使節と共に波斯より來朝せしに、忽必烈はその容貌の雄偉なるを喜で之を左右に止めんとし、大にその技倆を認めて之に要職を授け、間もなく一二六五年に於て之を中書左丞相と爲し、右丞相安童 Hantoun と相並ばしめたり。イに據る。伯顔は蒙古八隣氏 Barines の出身なる曉古台 Gueukdjou の子にして青年時代を波斯に送れり。チに據る。

伯顔は阿朮と共に途を襄陽に取り、博羅權の總統たる他の一軍は江南の揚州に進ましめ、之に向つて濫りに血を流さざらん事を注意せり。かくて伯顔は呂文煥の指揮せる無數の舟師と共に十一月親ら進んで漢水に臨める安陸府に至りしが、城に近くに及んで堅牢なる鐵鎖と密植せる木材と投石機を据え多數の弩手を乗組せたる兵船とを以て通航を妨碍せるあり。伯顔は安陸府の運らすに堂々たる石城を以てし、守るに有力なる戍兵を以てせるを見て、多大の生命と長日月とを犠牲に供するにあらざれば、到底之を抜くこと能はざるを覺れり。支那の捕虜ありて之に間道を示してその困難を避けしめたり。蒙古軍は道路に竹木を横えて兵船を滑走せしめ以て藤湖に至り、更に轉じて、安陸の下流に於て再び漢水に入り進んで沙洋を取り(十二月)更に安陸と相對して漢水を挾める新鄂州を取り、而して漢水を下て長江との會流點に至れり。江の兩岸には鄂州并に漢陽の兩城相對立せり。時に淮西制置使夏貴は多數の舟師を擁してこの地點を扼しその長江

に入るを妨げんとせり。伯顔は陽に之を襲ふて江に達せんとするの色を示して敵の注意をこの方面に集め、突然沙蕪口を奪ふて兵船百餘隻を掠め、船隊を淪河に導き以て長江の北岸に達したり。阿朮は一隊の兵に將として長江を渡れり(一二七五年一月)。茲に於て夏貴は連絡を斷たれんことを恐れて船隊を率ゐて長江を下れり。蒙古軍は進んで陽邏堡を取り、漢陽の守將は降れり。伯顔は全軍を率ゐて長江を超え、將に鄂州を圍まんせしに權守張晏然と都統程鵬飛とは州軍を以て降り、部下の士卒は蒙古軍に入りて戦ふこととなれり。伯顔は阿里海牙に數萬の兵を與へて之を守らしめ、殘兵を引率して東に向つて進みたり。

夏貴の敗走と鄂州の陥落とは宋の朝廷を震駭せしめ、賈似道は輿論に逼られて諸路の軍に都督となれり。

蒙古軍に降れる程鵬飛は命ぜられて黃州の守將陳奕を招諭するの任に當れり。陳奕名爵を求めしより、伯顔は之に沿江大都督の稱號を授くるを約し、陳奕乃ち黃州を以て降り、更に蘄州の守將を説きて同じく宋に叛かしめたり。沿江の要地を守備せる宋軍の多くは、或は曾て呂文炳の部下たり、或は現にその一族の指揮の下に在りしを以て、勸降使を俟たずして蒙古軍に降り。江南の安東州を守る陳奕の子陳巖も父に倣へり。江西の九江府(江州)の守將も城門を伯顔に開き、伯顔は間もなくこの府城に淹留中、安慶、德安府、六安等の守將の降服を受けた

り。伯顔が支那の降將を優遇せし爲、その征服を容易ならしめたるなり。
 この間賈似道は大軍を徵發し大艦隊をして新安池口より長江に入らしめ蕪湖附近に碇泊せしめたり（三月）。夏貴の艦隊も來りて之と合したり。賈似道は蒙古の一將校の捕虜となれるものを伯顔の許に遣し若干の美果を送り、鄂州の第一回攻撃に際し、忽必烈と締結したる條約の條件を以て媾和せんことを求めたり。伯顔は答書を裁して未だ江を渡らざる時和を議し入貢するは則ち可なり、但し賈似道にして衷心和を欲せば、則ち當に來て面議す可きなりと答へたり。この書面には回答なかりき。

史 古 蒙
 江岸に位せる池州は蒙古軍の有に歸せり。賈似道は孫虎臣に命じて重兵を擁して進んで池州の下流に位せる長江の一小島に占據せしめ、更に夏貴に兵船二千五百隻を託して長江を封鎖し蒙古軍を抑止せしめ、親ら後軍に將として魯港附近に陣したり。

伯顔は步騎兩軍を統べて長江の兩岸に沿ひて進めり。その孫虎臣の占據せる小島の對岸に達するや弩砲を放て之を撃ち、兵士を滿載せる多數の小船は阿朮の命令の下に之に襲撃を加ふるを得たり。支那兵は防戦することを思はず争て兵船に乗りしが、兩岸より放てる無數の彈丸命中してその沈没するもの夥しく、且多數の士卒を殺せるより、江水爲に赤かりき。この奇勝は蒙古軍に莫大なる戦利品を與へたり。賈似道は蒙古軍の近くと共に退却せる夏貴より敗報を得て直ちに帆

を揚げ悉くその艦隊を率ゐて江を下り、珠金沙と稱する江上の一小島に駐り、孫虎臣の來會するに遭ひ軍議を凝せしに、夏貴、孫虎臣の兩將共に、士卒は蒙古兵を見たるのみにして戦慄するが故、到底恃む可からずと説きたり。故に賈似道はその意見に隨ひ、揚州に退却して、敗兵を糾合して新に軍隊を組織せんとせしも、その努力は效なく、意氣沮喪せる士卒は復たその旗下に戰ふことを欲せざりき。

第 三 編
 この支那兵の潰走の後、蒙古軍はあまたの江南の城市を奪ひしが、鎮江、寧國、隆興、江陰等は守城を棄てて遁れ、太平、和州、無爲等は守城之を以て降り。伯顔の近くや、南京を守れる江淮招討使汪立信は社稷の前途に絶望し、宋朝の臣として瞑目せんことを決意し、近親、親友を集めて宴會を開きその半ばに於て毒を仰ぎしかば、南京は何等の妨碍なく蒙古軍の有に歸せり。大暑の候は近けり。忽必烈は士卒を休養せんことを欲し秋まで交戦を中止せんことを伯顔に命ぜしが、伯顔は今已に其吭を扼せり、少しく之を縦うせば則ち逸して逝かんと奏上せしかば皇帝は、將の軍に在るや中制に従はざるは兵法なり、宜しく伯顔の言に従ふ可しと、その使者に語られたり。

249
 江南なる廣德、常州、平江府等の守將何れも城を以て蒙古軍に降れるが、廣德は張世傑之を克復したり。是れより先攝政皇太后は詔勅を發して宋の忠良なる臣民に兵器を執て立たんことを

要めたり。この詔勅は軍隊司令長官等の熱心を旺盛ならしめたり。張世傑は江西の饒州を克復し、次で都督府諸軍を總ぶることとなり、兵を三隊に分て廣德、平江、常州に進ましめしも、平江と常州とは之を克復すること能はざりき。

忽必烈の使節郝經はなほ拘禁せられたる儘なりき。忽必烈は郝經の弟を支那の朝廷に遣して之が召還を請求したり。かくて郝經は一行と共にすべて放免せられしも、途に病に罹り、歸て燕京に至るや間もなく逝けり。郝經には數部の名著あり、就中續漢書を推す可し。

忽必烈間もなく、廉希憲の從弟にして禮部尙書たる廉希賢并に工部侍郎嚴忠範を宋の朝廷に派して新に媾和の提議を爲さしめたり。廉希賢は伯顔の本營を置ける建康即ち今の南京に至り五百の護衛兵を借りたり。伯顔は堅く兵士を禁じすべての敵對行爲を避けしめ、以て使節に侮辱を加ふるの口實を與へざらしめんとせしも、而も廉希賢は蘇州府の獨松關附近に於て支那兵より攻撃され、同僚は殺され、身には重傷を負ひ、臨安に送られ遂に創を病で死したり。宋の朝廷は直ちに一將校を南京の軍營に遣し、書を以てこの暴行の全く朝廷の關り知らざることなるを辯疏し、行兇者を取調ぶ可きことを約し、同時に蒙古皇帝に臣屬するの意思あることを聲明したり。

伯顔はこの提議の誠意を疑ひて冷淡に之を聽取し、使節の歸るに方て、媾和の條件に就て交渉の任に當らしむ可しとて、議事官張羽をして之と同行して臨安に赴かしめしが、眞意は帝都の形

勢を視察せしむるにありき。張羽は途上に於て殺されたり。かくの如く背信の擧甚しきを怒り、伯顔は戰鬪繼續の許可を忽必烈に乞へり。忽必烈は時に海都より壓逼を受けし際なりしを以て、却て之に對して朝廷に歸らんことを命じ、之を以て海都征討軍の司令長官となさんとせり。伯顔は乃ち北方に向て上程したり。

湖廣、岳州の安撫使高世傑は鄂州攻撃の計畫を立て、州内の軍隊を糾合し、之を數千の武装せる船舶に載せ、荊江口を扼したり。鄂州を守備せる阿里海牙は船隊を引率して進んで之と會戦せんとせしに、高世傑は岳州を危うせんことを恐れて敢て鋒を交ふるを欲せず、夜に乗じて錨を抜きて洞庭湖に退き、戰列を布て以て俟てり。阿里海牙は部下の兵船を以て數艦隊を組織し、支那船隊に向て突撃を試み、之を潰走せしめたり。蒙古兵は高世傑の乗船を奪ひて之を斬に處し、その首を長槍に貫きて岳州城下に至り、降服を勧めしに直に降れり。

この戦勝に勢を得て阿里海牙は江陵を攻撃せしに守將高達は宋の名將なりしも、朝廷の不公平なる處置を怨望して數日の後城を致し書を管下諸城の守將に與へて同じく蒙古軍に投降せんことを勧め、かくて降れるもの十五城以上に及べり。阿里海牙は獨斷專行の權限を有せるより以前の守將をして依然として之を治めしめたり。特に阿里海牙を眷遇せる忽必烈はこの成功を喜びて親ら手詔を作て之を賞し、高達には曩に宋朝の咨んで與へざりし參知政事を授けたり。

四川の南部もなほ宋朝の制令を奉じたり。蒙古の四川行樞密院事、汪良臣は、宋の成都安撫使咎萬壽を攻めて之を破り、その居城嘉定に之を圍みたり。咎萬壽は降服して管内各地の委細の情報を蒙古の將軍に傳へ、かくてその斡旋により忽必烈より前官と同一の地位に置かれたり。されど四川が全く歸服したるは一二七八年の初のことなりき。

宋の朝廷は伯顔の不在を利用して新に抵抗を試みる計畫を立てずして、只管賈似道の處分に忙殺されたるやの觀ありき。攝政皇太后は一二七四年に至りて終に國民の疾視せるこの大臣を免職し全く官途より遠けしめ、この處置は時機既に晩れ、以て公衆の激怒を抑ふるに足らざりき。大官等は之を公判に附す可しと要求して、罪狀十數條を數へたり。攝政はその命を失はしむるの意なく、財産を官没して、福建の建寧府に追放し、以てその晩年を送らしめんとせり。然るに之が監押官は曾て賈似道が追放の刑に行ひたるものの子なりしかば、途上之を惱すことに苦心し、遂に建寧府に近づくに及んで敢てその生命を奪へり。但しこの犯罪は贖て死刑を以て罰せられたり。阿朮は焦山附近に屯せる張世傑を攻撃せんと決心し、多數の兵船を以て之に向へり。約千人の弩手を巨艦に載せて先頭に立たしめ、之に命じて火箭を以て支那の兵船を焼かしめ、親ら中堅を率ゐて之が掩護の任に當れり。蒙古兵は滿帆の風に乗じて敵の艦隊を襲ひ、忽ちにして烟炎江を蔽へり。或は蒙古兵の手に落るを恐れて、或は焚死を厭ひて江水に投じて溺死せる支那兵夥しか

りき。張世傑は七百隻以上の兵船を蒙古兵に奪はれて退却したり。

上都に召還されたる伯顔は交戦を中止するの帝國の利益と相容れざるを説き南歸軍に赴くの許可を得たり。忽必烈は伯顔を右丞相と爲し、その推稱大なりしを以て阿朮を左丞相と爲せり。宋朝攻撃の一般方略は決定されたり。伯顔は進んで宋の帝都を圍む可く阿朮は淮南の戦鬪を繼續し、阿里海牙は湖廣南部の征服を完成し、最後に將軍塔察兒 Tatcher の子宋都帶 Songtocai 師夔及び西夏の王裔なる李恆之と同時に江西を攻撃す可しと部署を定めたり。

伯顔は上都より歸るに方りて揚州を圍める阿朮の本營を訪ひ、灣頭に於て江を渡り兵を分て三隊と爲し、各々道を異にして臨安に進みたり。阿刺罕 Argan 奥魯赤 Ngaioutchi の指揮せる右軍は建康より廣德井に四安鎮を出でて獨松關に赴き、董文炳井に相威 Sian-Gouei の率ゐる左軍は范文虎を以て前鋒と爲し、海岸に沿ひて途を江陰、激浦、華亭に取り、伯顔は安塔海と中軍に將とし、呂文煥を以て前鋒と爲し、道を常州に取りたり。

宋の朝廷は數部隊の兵を派遣して常州を救はんとせり。伯顔は先づ之を破て招諭せんとせり。或は甘言を以てし或は威嚇を用ひ、譬喩百端、遂に聽かれざりしを以て、城外を夷にして城壁の高さに等しき壘を起し、かくの如くにして初めて之を陥るることを得たり。之を守る長官のうち三人は戦死し、圍を突て遁れしは唯一人のみなりき。住民は悉く虐殺されたり。Marco Polo の

記事あり、即ち常州のことなり。その記事に據れば Baim の蠻子の領土を攻めし時、Cinghin に向へるは Alains と呼べる基督教徒にして包圍攻撃猛烈にして遂に之を降せしも、城内に入るに及びて虐殺されたり。故にバヤムは再び兵を遣て之を屠れり云々とあり。

西路を取りし參政阿剌罕は銀樹、廣徳、四安を奪ひ、一擧にして獨松關を拔けり。茲に於てか隣郡の守將は皆臨安に遁れたり。參政董文炳は進んで江陰を下せり。帝都の驚駭狼狽は名狀す可からざるものありき。當局者も亦策の出る所を知らざりき。右丞相樞密使陳宜中は十五以上のものをして悉く兵器を執て立たしめたり。皇太后は帝州に近き無錫なる伯顔の本營に工部侍郎柳岳を遣して、暴徒が廉希賢に害を加へたることに對して遺憾を表し、既に提言したる條件を基礎として媾和を拒絶せざらんことを熱心に乞へり。柳岳は皇帝のなほ幼冲にして政務を視る能はず且父の喪中に在ることを説き、蒙古に正當なる抗議を提起せしめたる條件はすべて曩に處罰せられたる奸臣賈似道の信を失ひ國を誤りたる結果なりと辯じて伯顔の心を動さんとしたり。伯顔は廉希賢と同僚との虐殺に何等の關係なき賈似道のみ責むるの不都合なるを詰り、更に語を添へて『爾が主幼冲にして未だ政治を視ること能はずと雖も、宋の太祖が昔天下を一小兒なる周の皇帝より奪へるを忘れたるか、今亦之を小兒の手に失ふは蓋し天道なり』と云ひて之をして辭して去らしめたり。

伯顔は進んで平江(蘇州)を陥れんとしてその投降を受け、同地に於て柳岳の再び攝政と陳宜

中との命を受けて來り、幼主が親ら忽必烈の姪又は姪孫と稱し、蒙古に對して納幣するの意志あることを報ずるに會へり。この提議も拒絶されたり。

茲に於て皇太后は伯顔に書を寄せ蒙古の可汗に對して臣禮を執り、歲幣銀二十五萬兩、帛二十五萬匹を約せり。この提議に預り知らざりし陳宜中は帝都を南方に遷さんことを欲せしも皇太后は頑として之を容さざりき。

伯顔は臨安に近づき、既に嘉興を奪へり。宋の宗室諸親王は攝政に逼りて皇帝の同胞なる吉王と信王とを南方に移し、以て國難に際して社稷を完うするの策を講ずることを請へり。皇太后も遂に之に従ひ、吉王の稱呼を益王と改め之を福建の首府に遣せり。信王は同省の泉州に遣り之を廣王と稱することとなせり。伯顔は臨安に近づくに及んで左右兩軍の亦來會するに遣へり。蒙古軍の漸く臨安城下に現はるるや、皇太后は降服の象徴として帝國の國璽を伯顔に交附したり。伯顔は部下の將校、囊加歹 Nankiatari に託して之を上都の可汗の許に致さしめたり。又書を陳宜中の許に寄せて、之と兩帝國の新關係を規定せんことを思ひしが、右丞相は皇太后最後の決意を贊成せざりしより、蒙古軍の本營に赴かずして、臨安の南方約五十リグに位せる濱海の城市溫州に遁れたり。張世傑は一隊の兵を引率して定海に退けり。伯顔は特に一都統を遣して降服を勧めしめんとせしに、張世傑はその言を終らしめず、命じて之を寸斷せしめたり。

皇太后は文天祥を右丞相に任じて左丞相吳堅の同僚と爲し、相共に伯顔の許に使せしめたり。文天祥は伯顔に向て、北朝若し宋を以て與國と爲さんとならば、請ふ兵を平江或は嘉興に退けよ、而して後歲幣を議し金帛を與へて師を犒はんと云ひ、更に言を添へて『若し其宗社を毀たんと欲せば則ち淮浙閩廣尙は多く未だ下らず、利鈍は未だ知る可からず、兵の連り過の結ぶこと必ず此より始まらん』と説けり。伯顔は吳堅を歸らしめ、之と媾和の條件を議定せんと稱して文天祥を留めたり。宋の右丞相はこの國際の慣例に違反せるの處置を攻撃したり。支那の將校が蒙古軍に降れるを見て激しくその罪惡を詰り、呂文煥をも怒することなかりき。伯顔は之を忽必烈の帝都に遣りしが、途上に於て巧みに脱走したり。

伯顔は臨安を治むるが爲、三月蒙古人と支那人とより成れる委員を任命し、忙古歹 Manhou-
[?]と范文虎とを以て之が總裁となせり。又程鵬飛に命じて攝政皇太后の許に赴きて、各州郡の知事に諭して蒙古軍に降伏せしむるの手詔を得、之をして更に效力あらしめんが爲、三省樞密院のすべての大官の副署を求めしに、執政は皆署したれど、惟り家鉉翁は之を威嚇せるも毫も屈せざりき。四人の蒙古軍の將校は伯顔の命を受けて、府庫を封じ、史館禮寺の圖書及び百司の符印を收めたり。

臨安の秩序は最も完全に維持されたるが、伯顔は城内の要地に兵士を配置せる後、湖州を出發

し、大將の旗鼓を建て、左右翼萬戸を率ゐて入城式を行ひたり。皇太后と皇后とは會見せんことを望まれたり。伯顔は如何なる儀式に據る可きやを知らずとて、之を固辭し、明日臨安を出發したり。臨安は今の浙江省の首府杭州府にして南宋九代の都なりしより京師 King-sai と稱せり。Marco Polo の紀行には之を Quinsai と稱し天の都 (Tien-sai) の意味なりと云へり。十七年支那に滞在せるも誤なきにあらず。Quinsai はヴェニス¹の如き地に在り一萬二千の石橋ありとあれど千二百の誤ならん。又大海を距る二十五マイルにして、城内を流るる河の海に注ぐ處激浦 Canton あり印度その他の船舶雲集す、(亞細亞雜誌第五冊にクラブローの激浦考あり) 宋の時京師の人口六十萬戸とあり。一三二八年に航しつ支那に赴ける Odoric d'Udine 師は Quinsai の堂々たる大都なるを見て、偉大なること到底之を筆紙に盡し難しと云ふ。Jean de Mandeville は Cansai をアヒニスに比し、各派の基督教の僧侶信徒之に住へりと記せり。トにも Khanzai の記事あり、旅行家商人の陳述に據りて『これ支那最大の都會にして週週約二十四 ferrenks あり、地上に敷くに磚と石とを以てし、家屋は木造にして繪畫を以て飾れり。城内に三箇所の傳馬役場あり、多くの町は長々三 ferrenks に及べり。四方共に宏壯なる建物を以て圍める廣場六十四箇處あり(鹽稅の收入は毎日七百 balisichs tohao (紙幣即ち鈔の巴里施)に上れり。工匠の多きことは染工のみにて三萬を數ふるにて之を知る可し。守備隊は七 tommans (七萬人)あり。調査の結果納稅者七十 tommans (七十萬戸)あるを知れり。寺院七百何れも豪華にして城郭の如く僧侶之に充てり。橋は三百六十あり、大小の船舶亦夥しく、以て交通に便せり、各國の商人等來住するもの數ふ可からず。京師は即ちかくの如し、その他支那には四百の都會あり、建康府 Kenkan-fou 刺桐城 Zaitoun. Tchinkelan の如き最も小なるものも、なほ且バグダード、シラズを凌げり。驚く可きことは同國を實見せるもの談にかく領土廣きも耕作に適する地なしとのことなり云々』と見ゆ。Moha-nmed Banaketi 并 Hist. Sinensis の著者 Abd-oullah Baidhavi はチヤウ Khanzai には三大回 [藤田豐八氏は宋室南渡後

二人の支那の大官は宮中に於て攝政皇太后の動靜を監視するの任に方り、表面之が爲に盡瘁するの態度を装ひつつ、その所在を失はざらんとせり。間もなく阿塔海は多數の將校を従へて宮中に赴き、皇帝近侍のものをして規定の儀禮を停止せしめ、皇帝と皇太后とに直ちに忽必烈の朝廷に向て發程せんことを促せり。母后はこの注意を受けて、涙を兩眼に浮べて七歳の皇帝を抱擁し

州を行在と稱し京師と呼ばず元史祖本紀にも至元十四年の條に行在宜日杭州とあり、故にマルコ・ポロの Quinsai は京師に非ずして行在なりと云へり(東洋學報三の三)トに Khanzai とあるは最もよく藤田氏の所説を確むるもの也。

『天子聖慈を以て汝を助命し賜へり、宜しく拜謝す可し』と告げ、母子共に面を北方に向けて膝を屈し、九度叩頭して蒙古の皇帝を禮拜したり。かくて皇帝と母后とは兵車に乗じて出發し、當時首府に住せる親王、内親王、丞相、大官、翰林院學士、その他の名士はすべて年少皇帝に隨行して北上せしが、祖母攝政皇太后のみは偶々病めるを以て臨安に駐り、以て健康の回復を俟てり。飽くまで宋朝の爲に努力せんとせる將校等は、年少皇帝の捕虜として押送さるるを見るに忍びず、途上之を奪ひ去らんと計畫したり。その頭に立てるは揚州の守將李庭芝、并に姜才なりき。兩人はその資財を擧げて犠牲に供して以て士卒を徵募し、之を引率して夜に乗じて俘囚を護送せる蒙古軍を長江と揚州府との間に介在せる瓜州に攻撃したり。この多數の護衛兵を引率せる阿塔海、李庭の兩將、戰ふこと三時間にして宋軍を撃退し、北進を繼續せり。眞州の住民も亦同一の企を爲せしが、同じく成功を見ざりき。年少皇帝の上都附近に着するや、その左丞相たりし吳堅をして出でて迎へしめたり。忽必烈は命を下して恭宗その他の捕虜を寛大に待遇せしめしが、その皇帝の稱號を奪ひて王號よりも劣れる公號を與へ瀛國公に封じたり。その母后并に攝政皇太后に對しても同じく皇后の尊稱を奪へり。正妃察必可敦 Djianou Khatoun は之に對する苛酷なる待遇を緩ふせんとして仁慈を施したり。忽必烈は臨安の宮殿に存せる金銀寶玉等を大都に齎らさしめたり。かくて這般の財寶は海路北直隸の天津衛 T'ian-tsin-ouey に輸送され、更に

運河に由りて大都に着せり。宗族の親王内親王等が、眼を輝せて強國より得たる戦利品に注目し、つつあるに方り、正妃は涙を抑ふる能はずして、忽必烈に向て『蒙古の帝國も亦他年一日亡國の歎なきを得んや』と述懐を洩したり。

忽必烈は嘗て宋の降將を召して、汝等降ること何ぞ容易なると問へり。降將等は賈似道國を專らにして毎に文士を優禮して武臣を輕ぜり、臣等久しく不平を積めるが故風を望んで陛下に仕へたりと答へたり。忽必烈乃ち似道實に汝曹を輕ずるも、特に似道一人の過なるに似たり、汝が主何をか負はん、正に汝が言の如くんば、似道の汝を輕ずるや固より宜なりとて之を叱責したり。

伯顔の臨安に向て進軍するに方り、阿里海牙は深く湖廣の南部に入り、潭州(長沙)を圍み、水陸兩面より盛んに攻撃を加へしかば、數日にして守兵全く窮するに至れり。蒙古軍は總攻撃を試みたる後、城壁に據れり(二月)。落城旦夕に逼るの時に際し、衡州の知事偶々丁年に滿たざる二男子と共に長沙にあり、青年二十歳に達したる時支那に行はるる儀式に従ひ、二子をして冠を戴かしめ、家族を擧げて火中に投じて死せり。

湖南鎮撫大使として潭州の知事を兼ねたる李芾は酒を灌ぎてその英靈を祭り、部下の將校が悉く宋の忠臣として仆れたるを確め、帳下の沈忠を召して吾が家人の醜虜に辱めらるるを欲せざれば、汝若し吾を思はば吾が家人を悉く殺し、最後に吾をも殺せよと命じたり。沈忠は膝を屈し、

額を地にしてその命令を解除されんことを乞ひしが容されざりき。李芾の強て之を命じたるより沈忠も萬斛の涙を濺ぎつつ之を諾し、先づ酒を取て家人等に飲ましめ、その泥醉せるに乗じて悉く之を殺し、最後に李芾も亦頸を引て俟ちたれば一刀に之を仆せり。沈忠は乃ち火を長官の官邸に放ち、馳せて家に歸りて妻子を手双し、遂に自刎して果てたり。守將のうち降りしは僅に二人にして他の大官は勿論、兵民の大多數も亦知州の例に倣ひて或は井に投じ、或は林中に縊り、或は毒を仰ぎて自殺したるを以て、蒙古軍の城内に入るや、その無人の境に異ならざるを見て驚けり。阿里海牙は更に湖廣南部の諸城に向て降伏を促せしに、その多くは一撃をも加ふるに及ばずして降れり。之と同時に宋都帯及び、李恆の兩軍は江西に於て連戦連勝十一城を下し撫州を奪へり。

伯顔は絶えず北上入朝せよとの命令に接したり。その出發するに際し、宋都帯より宋の二王福建、廣東の兩省にありて多數の兵を糾合し、將に江西に攻めんとすとの情報に接したり。伯顔は阿刺罕、董文炳の兩將を留めて臨安附近に駐屯せる軍隊を統率せしめ、之に命じて二王をしてその勢力を張るの違勿らしめたり。

初め宋の皇帝の同胞たる二王が臨安より温州に至るや、或は之に隨行し或は之に追及したる將軍は陳宜中、張世傑を首として益王を帝國の都元帥と爲したり。益王は恭宗の長兄にして少弟

廣王は之が副となれり。

二王は將に轉じて福建に入らんとせり、時に福建には黃萬石 Hoang-guan-tan あり、伯顔より同地方の長官に任ぜられ、短日月の間に之を征服し了らんと決心し、その重なる都會は恰も之に降服せんとするの際なりき。宋朝に黨せるものは援助の來らんとするを見て兵を執て立てり。黃萬石は戰敗れて出奔し、その部下は宋の軍旗の下に編入されたり。二王は首府福州に着し益王を奉じて皇帝と爲し即位の式を擧げたり(六月)、時に皇帝は僅に九歳なりき。

宋は忽ちにして大軍を集め、之を四隊に分て、江西、江東、浙東、淮の四方面に出でて戦はしめたり。この際文天祥は年少皇帝護衛の軍隊が瓜州に於て攻撃されたる時、蒙古軍の手を脱して茲に來り會し、右丞相兼樞密院使に拜し諸路の軍馬を督することとなり、支那人の勇氣を鼓舞し愛國心を激勵したり。益王の詔勅には民族的思想活躍し、その全國の壯丁を徵發するや、蒙古軍をして不安の念を抱かしめたり。董文炳は建康安撫使唆都 Soutou をして新皇帝の軍に向はしめたり。

曩に伯顔が攝政皇太后より宋帝國の臣民に蒙古の統治に服従す可しと命ずるの手詔を得たりし時、阿朮は之を李庭芝に告知したり。蓋し李庭芝は年少皇帝を忽必烈の朝廷に護送さるるの途に要して、之を蒙古軍より奪はんと企てて失敗せるより、揚州に退却して頑強に之を守備せるなり

き。李庭芝は阿朮の軍使をして入城せしめず、城壁の上より之に向て、詔を奉じて城を守るもの他の命令を知らずと答へたり。阿朮は新に皇太后より手詔を得たるが、是れ特に李庭芝に賜はれるものにて『比る卿に詔して款を納れしめしに、日久しくして未だ報せず、豈に未だ吾が意を悉さず、尙ほ固く圍がんと欲するか、今吾れ嗣君と與に既に已に臣伏せり、卿なほ誰の爲にか之を守る』と記せり。李庭芝は詔勅を齎らせるものに向て數弓を放たしめたり。玆に於てか阿朮は銳意之が糧道を絶たんとせり。而も伯顔が能く僅々たる日子を以て江南を從へ帝都を下せるに、揚州の容易に降らざるに絶望し、再び李庭芝の決意を動かさんと試みたり。即ち忽必烈の手詔を請ひてその要望をすべて容れんことを約したり。李庭芝はこの詔勅を火中に投じ、使者の首を刎ねたり。長く蒙古軍の圍を受けたる附近の諸城は糧盡きて皆降り、揚州も亦糧食の缺乏に苦めり。忽必烈は阿朮の請を容れて、再び書を李庭芝に與へ、詔を焚き使を殺せる不敬の罪を赦し、而も曩日の約束を守るの意ありとの旨を告げしが、李庭芝はこの新なる信書をも受くることを欲せざりき。既にして李庭芝は益王が宋の皇帝の位に即きたりとの通知に接し、揚州の守備を朱煥に任せ、同僚姜才と共に兵七千人に將として泰州に赴き、將に海路を取りて福州なる新帝の許に至らんとせり。その城を出るや朱煥は直ちに之を以て蒙古軍に降れり。阿朮が即刻兩將追撃の爲に派遣せる一隊の騎兵は之に追及して歩卒千餘人を殺したり。李庭芝は激しく追撃されて泰州

に入り直ちに包圍に會へり。同城の裨將二人蒙古兵を誘ひて入城せしめられたれば、李庭芝は到底遁れ難きを認め、餘り深からざる蓮池に投じて生擒され姜才と共に揚州に送られたり。阿朮は之をして忽必烈に仕へしめんとして百方勧誘せしも、その志奪ふ可からず、遂に之を處刑せり。

阿刺罕と董文炳とは浙江に於て勢力を擴張したり。處州府附近に於て宋軍に對して勝利を博したる後、更に福建邵武の城塞を奪へり。この成功に次ぐに或は諸郡の背反あり、或は任意の降服あり、宋朝をしてその萬全の策を思はしむるに至れり。陳宜中と張世傑とは無數の船舶を艤装せしめ、而して史家の傳ふる所に依れば、軍十七萬人、民兵三萬人、通鑑には民兵三十萬人とあり。淮兵壹萬人は信號と共に直ちに乗船するの準備成れり。兩大官は皇帝と、その弟と宮中の全員とを乗船せしめ、泉州府に向て出帆せり。泉州府は福建濱海の大都會にして港には印度人波斯人亞刺比亞人來往斷えざりき。Marco Poloにもトにもチにも Zaitoun とあり。クラブロート氏は亞細亞雜誌第五冊に泉州はもと Tseuhoun と云へり。この地は當時貿易の盛に行れし港なるが、之に入港するや、張世傑は船を要せしを以てその若干を掠めたりしに、その船は親ら貿易をも營める招撫使の有に係れり。玆に於てか招撫使は大に怒り渡航者の上陸せるものを悉く虐殺せしめ、艦隊に逼て港より遠からしめ、次で城を擧げて蒙古軍に降りしに、興化の軍も亦之に倣へり。

阿里海牙は三箇月以來廣西の首府桂林府を圍めり。この地を守れる都統馬堅の頑強なる抵抗を打破すること能はざりしより、誘惑の策を試みんとし、馬堅に約するに、若し降らば許すに江西

大都督の職〔元史阿里海牙の傳には廣西大都督とあり、一書本文の如しと雖も元史に従ふ可し。〕を以てせんとし、忽必烈より手詔を得て部下の將校をして之を都統に致さしめたれど、馬堅はこの詔勅を火中に投じ使節を殺したり。

桂林府は城壁を洗ふに二江の水を以てし、唯一面より之に達し得可きが故に、守兵はその全力を之に傾注せり。阿里海牙は即ちこの兩江の水流を轉せしめて壘濠を乾かし、襲撃を加へて之を奪へり。馬堅は死士を率ゐて巷戰多時に互りしも、負傷せるが爲捕へられて仆れたり。阿里海牙は住民を虐殺せる後、全軍を數個部隊に分ちて廣西の各州部を奪へり。

皇帝端宗は廣東の惠州〔一、二七六年十二月〕に着し、一將校を將軍唆都の許に遣し、忽必烈に寄せて降伏を乞ふの國書を携帶せしめたり。唆都はその子に命じて之を携へて宋の使節と共に朝廷に至らしめたり。但しこの提議は毫も蒙古軍の作戰を中止せしめず、呂師夔は既に前年を以て廣東に入り、全省忽ちにして降伏し了れり〔一二七七年三月〕。

この頃忽必烈は支那の南部より軍隊の大部分を召還し、諸將に命じて占領地守備に必要な兵數のみを残さしめ、李恆を以て之が總統と爲したり。〔至元十四年二月、時北方有警、帝召諸將班師、凡諸將及淮兵在福安者、命李雄統之。通鑑〕宋はこの機會を利用して福建、廣東、湖廣、江西等に於てあまたの城市を克復したり。

張世傑は福建に於て大に兵士を徵發し、進んで泉州を圍みしが、唆都之に逼て圍を解かしめたり。この蒙古の將軍は支那人恃む可からずと稱して、到る處に大虐殺を行へり。福建なる興化、

漳州 Tcheng-tcheou の住民の屠殺されしは全くその命令によれり。

宋は二軍を以て江西に入り、一軍は文天祥、他の一軍は鄒鳳之を指揮せり。江西宣慰使はその連絡を妨げ、數々文天祥と戰て數々之を破りしかば、文天祥は敗兵を收めて退却せざるを得ざるに至り、その妻と二子は捕へられて大都に送られたり。

忽必烈は宋軍あまたの城市を克復せりとの情報に接して、再び兵を南方諸省に出し、參政塔出 Tatchou 李恆、呂師夔に命じて歩軍を統べて大庾嶺を越へしめ、忙古歹、唆都、蒲壽庚〔詩話總末西域人蒲壽庚與弟壽庚、以互市至、咸淳末擊海口有功、壽庚歷官至招撫使、壽庚授知吉州不赴、勸壽庚歸泉以降元、とあり。元史世祖本紀至元十四年三月條その元に降りしことを云ふ、次で忙古歹等と福州行中書省のことに任ず、而して藤田豐八氏は蒲は Abu の省譯にて蒲壽庚はアラビヤ人ならんと云へり。〕并に元帥劉深の指揮せる舟師をして進んで宋の水軍を攻撃せしめたり。唆都と塔出とは廣東の富場に於て連絡を通ず可き豫定なりき。唆都は水路興化に向ひ、之をも亦漳州をも奪ひしが、潮州に至りて頓挫せり。而も連絡の地點に到着するの期を失はんことを恐れて同地に留るを欲せず海路惠州に向ひて呂師夔と相會し、共に廣東城に赴きて之を降し、同地に於て塔出と連絡を遂げたり〔十二月〕。

廣東落城後、一二七八年塔出は唆都を派して潮州を攻撃せしめたり。唆都は正式攻城の戰略を執らざるを得ざりき。かくて二十日間に互りて激しく攻撃を加へしも、一步も進む能はず、却て守將馬發は或は火災を消し止め或は破口を修理して極力防戦し、遂に開城突撃を試みて包圍軍

の弩砲を燒毀するを得たり。されど衆寡敵せず、亂軍のうち殺されたり。蒙古兵は敗兵を追撃して無二無三に城に入りて之を奪ひ、住民を屠りたり。

年少皇帝端トフンツォン 宗は寄港す可き安全の地點を有せず暫し艦隊と共に海上に漂浪せしが、一二七八年五月無人の一孤島カシチユアン 洲、イに據ればこの孤島は北緯二十一度八分西經六度十五分にありと。に於て崩じたり、時に年十一歳なりき。

隨從せる大官の多數はこの浮浪的生活に飽き、忽必烈クベリクに降らんことを欲せり。陸秀夫リウシュウフはその意志に反對して『度宗皇帝の一人子尙ほ在り、將に焉くに之を置かんとする。古人一旅一成を以て中興する者あり、今百官有司皆具り、士卒數萬あり、天若し未だ宋を絶つことを欲せずんば、此れ豈に國を爲す可からざらんや』と述べて、能く諸將の勇氣を鼓舞し、廣王クワンを推して皇帝と爲し、丘上に玉座を設けて俯伏して之を祝せり。新帝は即ち帝チピンにして、陸秀夫リウシュウフ、張世傑チヤンシキエ之が大臣たり。陳宜中チンイチュウは前年使命を帯びて占城 Cochinchine に赴きしが、竟に還り來らざりき。

支那の艦隊は當時二十餘萬人を載せたりと稱せらるるが、廣東灣内新會縣シンホアイヒエンの南八リーグ、孤島崖山カクヤイと奇石山との間なる海峽に退却したり。張世傑チヤンシキエはこの孤島の巔に皇帝と母后との爲に木造の宮殿を營み、且士卒の爲に兵營を建てたり。艦隊の糧食を補給し、すべての必要品を備辦するの策は盛んに講ぜられ、廣東城その他附近の諸都は勿論、蒙古軍に服從せる地方よりも供給を受けたり。文天祥ウエンチエンシヤンは曩に一旦敗軍せしも再び戰場に現はれ、その軍隊は四月に廣東城を克復した

りしなり。

名將張チヤンシキエ 柔の子張チヤンホンフハン 弘範は戰局を終了せんとならば、須らく速に廣東省を平定せざる可からずと忽必烈クベリクに説きて征服の事を命ぜられたり。皇帝は之に寶劍を賜ひて帝チピン征討軍の都元帥に任じたり。張チヤンホンフハン 弘範は揚州ヤンチュウに至りて精兵二萬を選抜し十二月海路廣東省に向へり。文天祥ウエンチエンシヤンは一旦敗走せるが、殘兵を潮陽チヤウヤウに糾合し、鄒チウ 鳳フウ、劉子俊リウツエチユン兩將の來會するに及びて兵勢復振へり。而も未だ以て張チヤンホンフハン 弘範に當るに足らずと爲し、敵將の近くや海豐ハイフウに退却せしが、進軍の途上追及されたり。新兵より成れる部下の軍隊は潰走し、諸將は多く捕虜となれり。文天祥ウエンチエンシヤンを初として劉子俊リウツエチユン、鄒チウ 鳳フウも縲綑の辱を受け、鄒チウ 鳳フウは自殺し、劉子俊リウツエチユンは烹られたり。文天祥ウエンチエンシヤンも死を望めり。張チヤンホンフハン 弘範は之をして降服の意を表するが爲叩頭せしめんとせしも應ぜず、乃ち之を大都タツに送り。されどその親族及び朋友の捕虜となれるものは之を解放したり。

張チヤンホンフハン 弘範は潮陽附近チヤウヤウに碇泊せる艦隊にその兵を載せて出帆し、忽ちにして厓山ヤイの視界に達したり。支那の陸兵は島上に堅固なる陣地を定め、その艦隊は北方の守備を以て安固なりと信せるが如し、蓋し水淺くして蒙古の兵船を行ふこと能はざればなり。張チヤンホンフハン 弘範は敵の状態を偵察して支那兵船の粗造にして操縦困難なるを認めたり。茲に於て多數の最も輕快なる船舶に油を灌げる茅茨を積み、之に火を放て風に乗じて支那艦隊に向て馳突せしめしが、張世傑チヤンシキエは戰艦戰具に泥を塗

り長木を縛して火船を近づけざりしかば、この火攻の謀計は何等の成功をも見ざりき。

張弘範は廣東城より李恆の指揮せる軍隊兵船の來援するに遭ひ、之をして厓山の北を守らしめ、その西に陣列を布ける支那艦隊攻撃の準備を爲せり。即ち艦隊を四隊に分ち各隊司令官は甲板上にありて號令を受く可く、特に旗艦の信號に注目す可しと命じたり。翌日早潮に乗じ張弘範は軍樂を以て開戦の信號を爲し、親ら南面より攻め、李恆をして北方より攻撃せしめたり。忽ちにして混雜は支那艦隊に起れり。夕に至り張世傑と蘇劉義とは濃霧に乗じて錨索を斷ち、海峽を出でて十六隻の大艦を率ゐて海上に逃れたり。陸秀夫は皇帝の乘艦に移りその後を追はんとせしも、船體殊に大にして操縦自由ならず、諸舟環結して海峽を塞ぎ之を出るに由なかりき。陸秀夫は最早血路を開くの望なきを認め、先づ妻子を海中に投じ、次で帝舅に向て宋朝の皇帝たらんものは死すとも捕虜たる可からずと奏上し、年少皇帝を肩に負ひ、共に洪波のうちに投じたり。支那の大官の多數は之に倣ひて溺死したり。兵船の蒙古軍に鹵獲されしもの八百餘隻にして、海上は壘て無數の屍體を以て被はれたり。帝舅の屍體は帝國の國璽を帶せしを以て明かに識別されたり。

張世傑は皇帝の最後を聽きて、母後の乗船に會し、趙氏の後を求めて、皇帝として之を奉せんことを諮りしも、母後は帝舅の崩御に絶望し直ちに海に投じたり。近侍の女官も悉くその後を追

へり。張世傑は海濱に之を葬り、親ら東京に赴き若干の援兵を得しかば、廣東城に歸りて能ふ可くんば新帝を擁立せんと決心したり。然るにこの歸路に際して颶風に遭ひ、乗船難破して溺死したり。イには張世傑は張弘範と同族にして直隸涿州の人なり、年少張柔に従ひて河南に在りし時罪あり遁れて宋に仕ふとあり。蘇劉義は部下に殺されたり。兩將の死後文武の官吏は蒙古軍に降參し、かくて皇帝忽必烈はこの年を以て支那全土の平和的君主となれり。蒙古は實に之が征服に半世紀以上を費したりしなり。宋朝の治世は三百二十年に互れり。ロ、イに據る。

第三章

忽必烈は支那全土を領有するや、直ちに往古支那帝國に納貢したる日本Japanの稱呼は支那人が之を日本 *Chepa* と云ふに起る。を征服せんと欲したり。曩に一二七〇年に日本皇帝を促して宗主として天子地君を承認せしめんとせしも、入國をさへ許されざりき。宋の滅亡後派遣せる他の使節は更に斬に處せられたれば、忽必烈は日本を征服せんとすの決意を立て、最も思慮ある重臣等はこの計畫の困難なるを認め、その成功も亦利する所少しと斷じて陳述する所ありしも顧みられざりき。一二八〇年三月十萬の兵を以て東洋列島征服の遠征隊を準備す可しとの命令は發せられ、支那の名將范文虎は之が司令官と爲れり。この軍隊は年の終りに方りて臨安、泉州の諸港を出帆し、艦隊は先づ高麗に向ひ、この藩屬國王の徵集せる兵船九百隻正規兵一萬人と合して一團と爲れり。かくて遠征隊はその征服す可き國に向けて出發せしが、日本の附近に於て颶風に遭遇して、兵船の大半は破壊され、難船の厄に苦める者は日本軍の有に歸したれば、支那の史籍の傳ふる所に據れば、日本軍は七萬の支那兵を虜にし三萬の蒙古兵を殺し、この大軍の殘卒は一二八一年の秋支那の海岸に歸着するを得たり。北京宣教師合著『支那雜纂』巴里一七八九年發行第一四冊、シヤールヴォア日本誌第二冊、并にイ等を參照せよ。

史 古 蒙

第 三 編

宋帝國の衰亡後占城 *Cochinchine* 國王は使節を派して支那本土の新元首に忠誠を表したり。忽必烈はその獻じたる貢物に満足せず、部下の將校を以て構成せる執政委員會を占城に設けたり。二年の後占城の王子外國人の來りてその掌裡に政權を壟斷するを怒り、父王に逼りて之を拘引せしめたり。この叛亂の行爲を罰するが爲忽必烈は右丞唆都をして支那兵蒙古兵を載せたる艦隊に將として、南支の港を出發せしめたり。この軍隊は一二八一年占城に上陸してこの首府を奪へり。王子は遁れて山谷に入り、降服を約して蒙古の將軍を愚弄し、之と同時にその軍を全滅するの策を廻したり。唆都は大軍の各方面より進み來りて艦隊との連絡を斷たんとするを知り、已むを得ず退却せり。

宗王相吾答兒 *Siancour* は一二八三年に雲南の西部大理國永昌國を包括せる地方の征服をなす可しと命ぜられたり。一九八頁の大理國に關する註を見よ、永昌國は大理國の西にあり首府を永昌府と稱す。蒙古のこの地方を *Nandandun* と稱す波斯語にて金齒の義也。この時代には支那の地方官には回教徒多かりき。士卒一萬二千人旗下にありて之を指揮せしは招討使怯

然 *Kulie* と右丞納速刺丁 *Nassir-ud-din* となりき。緬甸の王國は本國人之を *Myama* と稱し支那人は緬甸と唱へ雲南よりベンガルに達し、阿華國を含む。今日の *Birmans*、*Burmans* 又 *(Mian ma)* あり。に對しこの二國は疑もなく屬國たりしを以てその國王は蒙古兵を撃退せんとし兵を執て立てり。即ち步騎六萬人を率ゐて進んで永昌附近に於て之と戦ひ、象を前線に立たしめたり。印度兵の近づくや、蒙古軍は密林を利用して右翼を掩護し、設堡を出

でて進撃を試みたれど、象の背に塔を載せ十二人若しくは十六人の戰士之に坐せるを見たる乗馬は恐怖の餘り突然背進して潰走せるより之を抑止するに由なかりき。納速刺丁は命じて騎兵をして下馬して乗馬を森林に潛ましめたり。蒙古兵は臆て象を目標として亂射せしに、象は革甲の保護なかりしより、忽ちにしてあまたの傷を受けたり。苦痛に堪えで怒れる象は却て印度兵の陣列を破りその多くは蒙古兵の未だ占領せざる方面の森林に走り、背上の塔を樹木の間に破壊したり。象の遁走せるを待ちて、蒙古軍は再び乗馬し、先づ遠方より矢戦を試み、更に近づきて劍と矛とを以て攻撃を試み、印度軍に大損害を與へたり。印度軍は敵兵と異り革甲を身に帶びざりしなり、緬軍は潰走して二百頭の象を戦勝者の手に委したり。十二月相吾答兒は緬の首府太公城を奪ひ、その王國は忽必烈皇帝の附庸國となれり。金齒國民は曩に緬國王に妨げられて蒙古帝國に服従するを得ざりしも、既に皇帝に歸順したり。この役以來忽必烈は常に軍中に象を備へたり。 Marco Polo 旅行紀に據る。

一二八三年忽必烈は日本に第二の艦隊を送りて前回の戦敗を償ふことを望めり。丞相阿塔海 Atagai はこの遠征の司令長官に任せられ、高麗國王は兵船五百隻を供給す可しと命ぜられたり。茲に於て造船の工を急ぎ水兵を江南、浙江、福建に徵發し、爲にこの地方の沿海貿易に損害を與へたり。造船職工并に徵發水兵は多數群を爲して脱走し、街道を侵し海岸を擾したり。軍隊の不

平は甚しく中書省に於ても何人もこの計畫に賛成するものなく、隨てその準備は之が爲に永らく延引したり。忽必烈は臆て他の遠征に忙殺されたり。

占城國王は逆鱗を和ぐる爲國使を遣りしも、忽必烈は受くるを欲せず、出でて雲南を治むる皇子鎮南王脱歡 Toghan に命じて東京を経て占城に向て進軍せしめ、更に唆都に令して皇子と協力して征討に従事せしめたり。占城考に據る。 Cambi

東京は忽必烈の即位以來皇帝に臣服し、國王、陳光昺は三年毎に若干の金銀、寶石、藥材、象牙、犀角を納貢することを約し、之と同時に帝國の一官吏は東京に駐在することとなれり。王子陳日烜 一二七七年を以て父の位を襲へるが、蒙古人の徵發飽くなきを怒り、脱歡が占城攻撃に向ふに當り國內を通過し糧食の供給を受けんことを要求するや、只管復讐をのみ思へり。陳日烜の妨害を試むるや、脱歡はその敵愾心を看破し先づ之を征服するの必要を感じたり。一二八五年一月この國に入り、筏に乗じて富良江を渡るや、後方に陣列を布ける敵兵は潰走して國王は所在を失へり。脱歡は戦争終了せりと爲せしに、敗兵は再び糾合されて、その前進を妨害したり。既にして盛夏の候となり、大暑と霖雨とは北軍の陣中に疫病を生じ、北軍は占城の國境に達するの望なくして雲南に退却し、絶えず惱まされたり。脱歡の下に一軍に將たりし李恆は毒矢に申り思明に至りて死せり、唆都はこの軍隊と相距ること二十リグにしてその退却を知らず、交趾軍

に遮斷されて歸路を得んと焦り、之と乾キアンチン 滿江畔に戦ひて陣歿したり。

忽必烈は深く二名將の損失を悲めり。間もなく皇太子と定めたる眞金 Tchingkim の死するあり(一二八五年一月)、忽必烈は更に悲痛に沈めり。皇太子は支那の學問に精通し、誠實方正の譽高く衆望を負へる公子なりき。死する時四十三歳にして三子ありき、甘麻刺 Canala 荅刺麻入刺 Dharmabala 帖木兒 Temour 即ちこれ也、トには忽必烈初め眞金と共治の意ありしも丞相等皇子が父諫め、可汗百年の後は必ず眞金を皇帝に戴く可しとて宣誓書 Mouchelga を上れりとあり。帝の在世中に帝位に即くは成吉思汗の Yezidai に背けりと

日本遠征軍は一二八六年にも未だ出發せざりき。而もその準備は成り、この年九月兵船は集合地合浦ホッパイに會することとなれり。吏部尙書劉リュウシエン 宣は計畫の危険甚だしきを説きて皇帝を諫めしかば、忽必烈も日本を征するを罷め、新に安南遠征を命じたり。平章政事阿里海牙アリハイヤは湖廣其他南方各省の守備兵の一部を雲南ユンナンに向はしむ可しとの令を受けたり。宗王脱歡トクワンはこの軍隊を引率して右丞程鵬飛ボウフエイ、參知政事樊楫ファンチイを伴ひ、一二八七年二月東京トウキンに入り廣東の海港にて艦装せる艦隊は軍隊をこの王國に上陸せしめたり。この軍隊を指揮せる昔都兒 Shour は欽察人にして隨て同部出身の士卒多く之と同行せり。

忽必烈の軍隊は東京軍を破ること十七回、地方を蹂躪し、首府交趾城を陥れ、莫大の戦利品を得て雲南ユンナンに退却したり。國王陳日烜チンニツエンは海上に遁れてその踪跡を晦ませしが、蒙古軍の去るや再

び現れ、大軍を召集するを得たり。故に一二八八年四月脱歡トクワンの再び入寇するや、住民は武装して之を迎へたり。交戦は繼續して酷暑の候に及び、蒙古軍は復た疾病に悩まされたり。脱歡トクワンは廣西方面に退却せざるを得ざりき。然るに陳日烜チンニツエンは更に之を攻撃してその歸路を斷んとせしかば、脱歡トクワンは數回の交戦に於てあまたの士卒を失ひ、右丞相阿八赤 Apatchi 樊楫ファンチイも亦戦死し、その能く命を全うすることを得しは、全く昔都兒が前衛に將として勇を奮て血路を開きしが爲なりき。

この戦勝ありしにも拘らず、東京國王は使を遣して忽必烈クビライに降伏し、過去をも不問に附せんことを乞ひ、金人を貢したり。忽必烈は宗王脱歡トクワンの鎮南王の職を奪ひ、之を揚州に左遷し、入朝することを禁じたり。ロ、并に之に載せたる。Candil の東京考参照。

忽必烈は一二八五年達魯花赤楊庭璧ヤンチンピヒに命じて支那の南方に位せる諸島を訪ひてその兵力富源を内偵し、之をして臣隸として朝貢を約せしめんとせり。この使命は大成功を齎らし、一二八六年十月、十箇國の船は福建の有名なる泉州チユアンチユイ州港に來着し、貢物を齎らせり。これ即ち馬八兒 Ma-par 須門那 Sumenna 僧德里 Sengkli 南無力 Nanvoui 馬蘭丹 Malantan 那旺 Navang 丁呵兒 Tinghor 來來 Lailai 急蘭亦賜 Kianitai 蘇木都刺 Sumatra 等なりき。ロ、こゝに據

忽必烈をして日本遠征斷念の決心を爲さしめたる重なる事情は、二十年來タルタリーの帝國を争へる海都カイツの威嚇的態度に在りき。海都は窩闊台統オゴタイに屬するより之が帝位相續權を主張して多年

忽必烈に入観することを避けたる後公々然敵對の意思を發表したり。皇帝は察合台の奧魯思を支配せしめたる八刺の領土が海都の西に位せるより、之が聲援を恃み得可しと信じたり。この比隣の兩王は臆て實際干戈を執て立ち、シル河畔に於て鉞を交へたり。八刺は伏兵を設けて戦勝を博し、あまたの捕虜戦利品を得たりしが、海都は尢赤の後裔、忙哥帖木兒が叔父伯勒克察耳 Ber-gatchar をして援軍に將として來會せしめしより、勢を得て、再び八刺を攻撃し、血戦之を破りしかば、八刺はトランスオクシアナに退却したり。かくて八刺は敗殘の兵を糾合し且撒馬爾罕、蒲花羅の平和なる市民を徵發して損失を補ひ、將に再び戦端を開始せんと準備せし時、兩王と共に親交ありし窩闊台の孫奇卜察克斡兀立 Kiptchac Ogouti の使節より海都の媾和の提議に接したり。八刺は之を容れ海都と親密なる同盟を結び、兩王は諳達 anda [諳達につきては]と爲れり。この同盟の結果土耳其斯坦とトランスオクシアナとより成れる察合台の遺領は海都の附庸と爲れり。八刺は一二七〇年に死したり。その位を繼げる聶古伯 Nikbey は撒[] Sarban の子にして察合台の孫なり。海都に對して兵を執て立ち、一二七二年攻撃を受けて殺されたり。托喀帖木兒 Toca-Temour 之に次で君臨せしが、その逝くや海都は八刺の子篤哇 Doua を王位に即かしめたり。ト、チに據る。

海都と篤哇とは一二七五年十萬の兵を率ゐて畏兀兒人の領土に入寇し、亦都護 Idicout [亦都護に付て

は上卷一頁參看] をその都城に圍みたり。その精神は之に逼りて共に忽必烈反對の盟約を爲さしめんとするに在りしが、畏兀兒部の君長は之を拒み援軍を得て厄を免れたり。イに據る。

帝國西境防備の必要に逼られ忽必烈は一二七五年に皇子那木罕 Nounougan をして軍に將として之に赴かしめ、木訶里の四世の孫なる行中書省樞密院事安童をして之を輔佐せしめたり。那木罕の弟闊闊出 Guenktdjou 蒙哥の子昔里吉、其他托克帖木兒 Toctimour 等の宗族諸王その兵を率ゐてこの軍隊の一部を爲せり。那木罕は阿力麻里地方の總督となれり。

一二七七年托克帖木兒は忽必烈に對して不満を懷き、昔里吉を戴きて皇帝と爲さんとして、その同意を得、相共に夜に乗じて二皇帝と諸延安童とを擒にしたり。かくて二皇帝を尢赤の奧魯思の君公にして海都の部將たる忙哥帖木兒に交附してその叛亂に加はる可きを告げ、次で察合台の子撒巴その他同家并に窩闊台家公子をも誘ひたり。チに據る。

忽必烈が伯顔を南支より召還して、叛徒討伐軍の司令官と爲せしは當時のことなりき。伯顔は敵軍の鄂爾坤 Orghun 河畔に堅固なる陣地を布けるを見、先づその糧道を絶ち、敵軍も飢餓を恐れて是非なく戰場に相見えたり。勝敗暫し決せざりしも終に昔里吉は破れてロ、イに據る。綱目に殺走して、李庭に殺さるとあり。イルチシユ河方面に退却したり。托克帖木兒は乞兒吉思人の地方に遁れ皇帝の軍隊に襲はれ、輜重を悉く奪はれたり。故に昔里吉に援兵を求めて之を克復せんとせしも、聽かれ

ざりしより、之に復讐せんとして帝冠を撒巴サルバンに捧げたり。昔里吉は托克帖木兒トクテムールを宥めんと試みしも、その勇氣は以て覇者として戴くに足らず、撒巴サルバンこそ十分に威嚴あるなれとの回答を得たり。昔里吉はその不運を諦めざるを得ざることとなり、遂に同志の他の諸公子と共に使節を海都カイツと忙哥帖木兒マングケテムールとの許に遣し、撒巴サルバンを推選せることを告知することと爲れり。

托克帖木兒は次で阿里不哥アリブカの長子要木忽兒ヤウモクコ Yonboucour に逼てその推選せる皇帝を承認せしめんとせり。然るに要木忽兒は之を拒絶せんとして部衆を召集したり。交戦酣なる時、托克帖木兒は軍隊を去て敵軍に投ぜし爲單身如何ともするよしなく、是非なく敗走せしに捕虜となりて昔里吉に交附され要木忽兒の請求により殺されたり。托克帖木兒は勇武絶倫殊に弓術に熟達せるを以て名高く、戦争に際しては常に好んで白馬に跨り、世人は通常鐵驄の馬を喜び以て敵をして戦血を認め難からしむるも、騎士と乗馬の血は勇士の裝飾にして恰も婦女子の面上に施せる紅粉の如しと信ずと云へり。

撒巴サルバンは保護者を失ひ昔里吉の許に至りて托克帖木兒に誘惑せられたるを謝せり。昔里吉はその軍隊を奪ひ、五十人の護衛兵を附して之を朮赤チユチの孫庫赤斡兀立コチウゴウリ Cotchi-ogouli の許に送りたり。然るに撒巴サルバンは斡的ウチク、奧斯懇オウスケン地方を通過せる際偶々同方面に屯せる部下軍隊に救はれ、之に推されて進んで昔里吉に向へり。兩軍の將に相會戦せんとするや、昔里吉の部下は去て撒巴サルバンの旗下に投

じ昔里吉も亦捕虜と爲れり。之を救はんとして來れる要木忽兒も同じく部下に棄てられて俘囚と爲れり。撒巴サルバンはこの兩公子に各々五百名宛の護衛を附し、皇帝の許に入覲せんとして東に向ひたり。斡赤斤ウチクジンの故土附近を通過するに際し、要木忽兒は同地の領主に貨幣と寶石とを贈りて來て救ひ出さんことを以てせり。斡赤斤の後裔は突然撒巴サルバンを襲ひ悉くその士卒を奪へり。撒巴サルバンは僅かに身を以て免れて皇帝の許に至り領土と軍隊とを授けられたり。されど捕はれて共に忽必烈の許に來れる昔里吉は不健康なる海島に流されて餘生を送りたり。要木忽兒は暫く海都黨として戦ひしも遂に皇帝に降伏し、次で忽必烈の子那木罕ナムハンも放免されて歸るを得たり。チに據る。

この事變ありて十年を過ぎて後海都は皇帝忽必烈に反對して有力なる同盟を組織したり。誘惑せられてその黨與となりしものに、宗王乃顔ナヤン Nayán 哈丹カタン Catán 勢格都兒シゲトル Singtour 等その領土を遼東方面女眞の故地に有せるものありき。これ皆成吉思汗の三弟の後裔にして乃顔は斡赤斤ウチクジンの孫、勢格都兒は朮赤チユチの孫、哈丹は哈準カチンの孫なりき。チに據る。第一編附録成吉思汗系と異れり。乃顔は四萬の兵を集め、海都が約の如く十萬の兵を率て來會するを待てり。皇帝はその連絡を妨碍するの必要大なるを感じ、同知樞密院伯顔バヤンに命じて和林の附近に陣地を占めて海都を牽制せしめ、親らその同盟軍の征討に向へり。軍隊の給養に必要な各種の軍需品は、之を江南より船積して遼河の河口に運送す可しと命じたり。忽必烈は咄嗟の間に大軍を集め、兼程行軍、

以て乃顔の領土に進み、二十有五日にして之に達するを得たり。途上充分に警戒を加へて敵をして準備を知ること能はざらしめたり。軍隊は之を二個の大部隊に分ち一軍の漢人より成れるは女眞出身の左丞李庭之を指揮し、他軍の蒙古人より成れるは成吉思汗の股肱の臣たりし博爾朮の孫玉昔鐵木兒 Yissou-temour 之を指揮せり。乃顔の軍隊は遼河の附近に陣營を張り、一列の戰車を以て之を保護せり。據る。ロに。皇帝は先づ占星家に諮りて勝利の豫言を得たる後開戦の信號を爲せり。戰鬪隊次は騎士三十營を三隊に分ちて之を編制し、左右兩翼は延びて敵の兩翼を包めり。各營の前面に長矛と大刀とを帶せる五百人の歩卒を配置せり。この歩兵は騎士の突撃に際しては齊しく馬背に跨り、敵に近くや下馬して長矛を揮ふ可き筈にて、騎士の馬首を廻らすや、復た鞍に倚て遠く走れり。忽必烈の座せる木製の高塔は四頭の象に駕し、象は革甲を纏ひ更に錦欄の馬衣を以て覆はれたり。高塔のうちには弓手弩手あまた警衛せるが、その上に日月を畫ける大纛翻れり。軍隊の戰列を爲すや、無數の樂器は風に連れて種々の音樂を奏し、この音樂了るや士卒の軍歌聞えたり。かくて初めて陣太鼓は開戦の信號を傳へ、忽ちにして飛箭雨の如く、天又暗きの慨ありき。矢戰暫しありて、兩軍の戰士は接戦となり長槍、大刀、長矛を揮て相戦へり。乃顔の士卒も決心を面に示して奮闘せしも、衆寡遂に敵せざりき。曉天より戰て遂に午時に至るまでよく支へし後、乃顔は圍を脱して一旦逃れんとせしも遂に捕虜となれり。忽必烈は直ちに之を死刑に處し

たり。即ち之を二枚の氈に包み激しく動揺して以て死に致せり、是れ即ち宗族諸王を死刑に處するの方法なり。この戰勝の後忽必烈は上都に歸りたり。Marco Polo に據る。マルコ・ポロは乃顔は三十乃顔の死刑に付てはこれその流血を覆はんが爲なりと云へり。又乃顔は公然信者たることを發表せざりしも洗禮を受け、十字架を軍旗に畫けり、士卒の中には基督教徒も少からざりき。忽必烈の軍に在りし、猶太教徒回教徒等基督教徒の降れるものを嘲り、何處に基督の加護ありやと詰りしかば教徒は之を忽必烈に訴へたり云々とあり。予にはこの役に關しては「忽必烈は高年にして病に侵されしも輿に乗じて叛徒の征討に向へり、將に敗北せんとして乗用の象を遁れしめしも遂に勝利を得て敵を追撃し叛王を刑しその士卒を散ぜりこれ忽必烈最後の親征なり」と云へるのみ。

然れども宗王哈丹、勢格都兒の二人はなほ兵を執て立てり。皇帝は翌年皇孫帖木兒 Temour に命じ、玉昔鐵木兒、土土哈 Tountouca 李庭、博羅懼の諸將と共に之を伐たしめたり。帖木兒は先づ故の乃顔の部將金家奴 Kinkianou を攻撃せしに交戦終日に互りて勝敗決せざりき。然れども金家奴退却せしを以て、帖木兒は貴烈河附近に陣せる哈丹に對して進軍せり。戰鬪二日に跨り、哈丹に同盟せる諸公子乃顔の宿將精兵等は多くこの戰場に仆れ帖木兒は譽高き戰勝に由りて、遼河、Tiro 河、貴烈河の灌域に於ける部族の降服を受けたり。據る。イに。右丞李庭はこの戰役に際して殊功あり、その軍隊の前後二回の戰勝は全く軍中に備へたる火炮の力に依れり。據る。ロに。而も海都はなほ依然として頑強に忽必烈に敵對したり。抗愛山と戈壁の砂漠とは兩帝王の領土を分ち、忽必烈が砂漠の西邊に配置せる七隊の兵は數、海都の軍と干戈を交へたり。據る。チに。皇帝は絶えず海都の攻撃に暴露さるる境上の安固を圖らんとして、伯顔を知樞密院事となし全權を與へ

て出て和^{カウ}林^{グルム}に鎮せしめたり。伯^バ顔^{キン}の軍に至るに先ち、前衛に將たる故の太子^{チン}眞^{キム}金の子^カ甘^マ麻^マ刺^ラは海都を妨^{カシ}げて抗^{カシ}愛^{カシ}山の境界線を踰えざらしめんとして、戰敗れて、Selinga 河附近に於て敵兵に圍まれ、土^ツ土^ツ哈^カが麾下の欽^{キン}察^{チャク}兵に將として奮戦せしが爲、辛うじて身を以て免るを得たり。皇帝は高齡なるにも拘らず海都を親征するの必要を認めたり。欽^{キン}察^{チャク}兵の都指揮^{ツツ}土^ツ哈^カは入京を命ぜられて大蘇の下に指揮の任に當ることとなり、戰功を賞せられたり。忽^グ必^ビ烈^{ライ}は一二八九年七月上都を發して西方境上に向ひしに、敵兵を見ずして踵を返せり、蓋し海都は遠く去れるなりき。哈^カ丹はこの頃托^ト吾^ウ兒^エ附近に於て諸王乃蠻台^{ナインマンタイ}に破られたり。イ、ロに據る。

忽^グ必^ビ烈^{ライ}は印度列島各地より多數商船の泉^{チユアン}州^{チユ}に入港するを聞き數々同地方に、大官を派遣したり。これ忽^グ必^ビ烈^{ライ}が外國の奇寶を愛好せしが爲にして、使節は土産を齎らして歸れり。右丞孟^{メン}淇^キは勅命を受け瓜哇^{クアワ}と稱する海外の國王を訪問したり。然るに瓜哇國王は如何なる動機に出でしにや、その面に黥して往還の盜賊に對すると同一の刑罰を加へ、耻辱を與へて之を放還したり。忽^グ必^ビ烈^{ライ}は之を怒り、丞相侍臣等も復讐を要求せり。多數の兵船運送船を泉^{チユアン}州^{チユ}に集合す可しとの命令は發せられたり。江西^{キアンシ}、福建^{フキエン}、湖廣三省より徵集せられたる三萬の兵は乗船せり。一千隻の船隊は一箇年の糧食を供へ、一二九三年一月泉^{チユアン}州^{チユ}を出發せり。支那人史^{チエヒ}弼^ビは遠征軍の司令長官に任せられ、陸兵は同じく支那人なる高^{カウ}興^{ヒン}之を率ゐ、水兵は畏^{ウイ}兀^ウ兒^エ人出身の亦黑迷失^{イホクミシ}に

hemisch 之に將たりき。亦黑^{イホク}迷^ミ失^シと史^{チエヒ}弼^ビとは曾て印度方面の海上に航し瓜哇の言語を解せり。

艦隊は先づ交趾^{コウチ}支那の海岸に向ひ、同地より南洋に入れり。枸欄山^{クランサン} Kan-lan-siu に至りて材木を伐採して、短艇を造り之を以て一二九三年十月瓜哇に向て出帆したり。瓜哇國王は陽に降伏して史^{チエヒ}弼^ビを説きて、恰も交戰中なりし隣境葛郎^{コラン}王國を伐たしめんとせり。史^{チエヒ}弼^ビは進んで葛郎を攻め同國王に對し大勝を博し、その降參せるを斬に處したり。時に瓜哇國王は支那人の掣^{セツ}軌^キを脱せんとして之を攻撃しその艦隊との連絡を絶たんとせり。史^{チエヒ}弼^ビは乗船と相距ること三十リীগなりしが故之に達するに困難を極めしが、出帆の後六十八日にして泉^{チユアン}港^{チユ}に歸港したり。死者三千人を數へしも、あまたの黄金寶石を携へ歸れり。その入朝して皇帝に珍貨を獻ずるや、皇帝は瓜哇國王を降服せしむること能はざりしを怒りて笞刑七十に處し、その資財の三分の一を沒收したり。
イ、ロに據る。康熙帝が第十七世紀の末に瓜哇島に遣したる支那人の紀行に據れば(支那雜纂第十四冊に出づ)此國は古は闍婆國、今は南家龍^{ナムカロン} Pok-kia-loung 下港^{ヒヤサング} Hia-siang と稱し蒙古人瓜哇と稱す、三種の人民住す、一は西洋人一は唐代より來りて回教を奉ぜる支那人一は土人なりと云ふ。チには「忽^グ必^ビ烈^{ライ}が印度の一部なる Djava に送れる兵は之を征服せり」とあり。トに同教紀元六九一年(一二九二年)に忽^グ必^ビ烈^{ライ}は Mout-Djava の島を平じたり、島は印度に近く長さ二百 Tenaks 幅百二十フエルセンクスあり、國王^{セリ} Seri-Rana は忽^グ必^ビ烈^{ライ}の許に入貢せんとして途に死せしが、その子^チは入朝して款待を受け黄金眞珠の歳貢を約して封册を受けたりとあり。Marco Polo は一二九一年に歐洲歸國の途に上れるが、皇帝は未だ瓜哇を征服する能はずと云へり。Jean de Mandeville は瓜哇の王國は極めて大に國王は有力にして附近七島の諸侯を配下と爲せり、大汗は數々瓜哇を征服せんと企てたれど決して成功せずと云へり。この航海家は一二七一年に死せり。

四年以來海都の兵を抑止せる伯^バ顔^{キン}は忽^グ必^ビ烈^{ライ}の朝廷に於て信用を失ひ、或はその活動の不充分なるを責むるものあり、甚しきは海都に内應せりとの嫌疑を抱くものありき。一二九三年七月忽^グ必^ビ烈^{ライ}

烈は之を召還して皇孫帖木兒をして之に代つて北軍を指揮せしめ、同時に皇儲と爲せり。太傅玉昔鐵木兒は之が副將と爲されたり。その未だ到らざるに先ち伯顔は和林を出發して海都の兵を攻撃して之を破れり。かくて帖木兒の招に應じて卓上司長官の印璽を之に交附し謫所と定められたる大同府に至りしに、入覲す可しとの勅命ありき。忽必烈は嫌疑を去り再び敬意を表し、之を款待して、公然その熱誠とその勤勞とを讃え、中書省平章政事に任じ禁軍弁に大都上都附近に駐屯せる軍隊の司令長官と爲せり。ロ、イに據る。

初め忽必烈の帝位に即くや帝國の財務行政を擧げて蒲花羅出身の回教徒賽典赤 Seyid-Edjell に委ねたり、この大臣は一二七〇年に死せるが、誠實の令名ありき。チには忽必烈が Caradjank に入りし

時、同地の知事たり、忽必烈は親しく之を迎へ軍を去て北上せる時之を從へて可汗に推薦したりしかば可汗は之を宰相 Veniz と爲せり。その子納速刺丁 Nassir-ud-din 代て Caradjank の知事に任ぜられ今(西紀一三〇〇年頃)より五六年前に死するの日に及べり。納速刺丁の子 Abou-diker は又 Bryan Fentehan (平章政事伯顔)と稱し、今刺桐の知事たりとあり。忽必烈雲南遠征の後 Caradjank は之に服従せるにあらず隨て蒙哥の知事ある可き筈なし。之に代れるはシル河畔の都會 Fenaket の出身なる阿合馬 Ahmed なりき。阿合馬がこの榮達を見たるは、忽必烈の正妃察必 Djamboui 可敦のなほ翁吉刺氏 Cancarates の長者なる父按陳 Itchi 諾延の家に在りし時より、之と相知れるが爲なりき。初め皇后の宮廷附なりしも、從順にして且狡猾、奇策縱横、人主を籠絡するの手腕あり、後宮に在りて機會ある毎に巧みに可汗の寵を増し賽典赤の死するや、中書平章政事として帝國の財賦を理するの官に任ぜられたり。阿合馬は能く忽必烈の

思想を左右するの秘訣を解せり。チに據る。忽必烈は財貨を需要すること甚だしかりしに、阿合馬は能く之を供給するの手段を講ぜり。阿合馬は寵遇を利用して無制限に權利を行使し、ロ、イに據る。任意にすべての大官を進退し、敵黨と目せるものは專斷に之を死刑に處したり。その暴政の犠牲となれるものは極めて夥しく、門閥高き人も敢てその怨恨を買はんとするの勇氣なかりき。女子の容色あるものは何人と雖もその淫慾に汚されざるはなく、阿合馬は實に情慾を満さんが爲にはすべての手段を用ひたり。二十五人の男子は何れも高官と爲り、身は誅求によりて莫大の資産を積めり、苟くも官途に就かんとするものはすべて之に莫大の苞苴を贈らざるを得ざりき。Marco Polo 第二

阿合馬は中書平章政事たること十二年、その瀆職甚しき爲、私に敵意を挾めるものは益々多く、公憤も亦加はれり。皇帝に親しき支那の學者は、その姦邪を發きて皇帝の聰明を蔽はざらしめんとせしもの効なかりしかば更に之を親王眞金に告げ、かくて眞金は阿合馬の最も危険なる敵と爲れり。イ、ロに據る。一日親王は怒りて弓を以て阿合馬の面部を毆打し、その頬を傷けたり。忽必烈は阿合馬の負傷せるを見て、その何故なるやを知らんとせしに、馬に蹴られたりとの答を得たり。座にありし眞金は何故に毆打せる本人を告白することを愧るやと詰れり。又曾て眞金は皇帝の面前に於て阿合馬を打ちたることもありき。チに據る。その極財務官吏中の有力者なる支那人王 著は一二八二年に至りて帝國よりこの姦臣を除かんと決心し、この計畫を實行するが爲、忽必烈、眞金

共に盛夏の帝都たる上都に滞在する時を選べり。阿合馬が大都在に留りて省務を取れるに際し、王著は一日流言を放て眞金將に歸らんとすと唱へしかば、大官等は宮中に出仕して皇子の前に伺候す可しと命ぜられ、阿合馬は百官を従へて之に赴けり。その將に宮門の闕を越えんとするや、王著は大なる銅鎚を以て之を撃ち立ろに斃れしめたり。ロに據る、チには暗殺方法之と異れり。

史 古 蒙
この暗殺の報に接するや皇帝は赫怒して行兇者と共謀者とを拘引して之を裁判に附して死刑に行へり。忽必烈は内帑より巨額の祭糝料を出して前の平章政事の爲に堂々たる葬儀を営ましめ、大官等に向て葬列に隨はんことを求めたり。而も當初はこの寵臣の慘死を悲みしも、臆て之に對して憤怒制す可からざるの態度を示したり。即ち忽必烈は頭飾用として大なる金剛石を得んとせしに、暫し以前二人の商人ありて一寶石を齎したりしも之を宮中に收めずして阿合馬に交附せるを知れり、而してその正妻なるもの之を所有せり。皇帝はこの所行を怒りしに加へて更に皇子が支那人の官吏等より阿合馬を殺したるは、即ち宿仇を除けるに外ならずと聽きて委曲奏上するあり、而して更に誅求甚しくしてその怨府なりしの事情を知り、恐しく逆鱗せられたり。勅命によりて阿合馬の屍は發かれ、首は身體より切斷されて公衆に曝され屍體は犬の食ふに任せたり。前記の金剛石を藏せる寡婦は勿論二子も死刑に處せられ、四十人の妻と四百人の妾は引出物として分配され、財産は沒收され、その黨與七百有餘人は瀆職に干與せる程度の多少に隨ひ、種々の處

罰を受けたり。チ、ロ、Marco Polo 第二卷第八章に據る。

次で財務大臣の職は畏兀兒人桑哥 Sanga に授けられたり、八思巴に繼で喇嘛の管長と爲れる入の同胞なり。(二十四年二月、復置尙書省、遂以桑哥與鐵木兒、爲平章政事、詔告天下、改行中書省、爲行尙書省(元史桑哥傳)元史桑哥傳に桑哥、瞻國師之弟子也とあり、瞻巴は八思巴の推薦によりて忽必烈に仕へたれどその職司を襲へる)桑哥が先任者の轍によりて帝國の財賦を理すること八年に及びし時、忽必烈の一官吏はその浪費に就て危険にも密告せんと試みたり。即ち敗獵に際して敢て奏上する所ありしがその熱誠は却て酬ひられず、忽必烈は之を讒謗者と認め衛士に命じて之を殴打せしめたり。かくて之を拷問して桑哥に對して嫉妬心を懐けるものの不平を洩せるに過ぎずと告白せしめんとせしも、桑哥に對しては何等一身上の怨恨を有するにあらず、唯皇帝の利益と國家の幸福を思ふのみに過ぎずと抗辯したり。忽必烈は茲に於て臣下を尋問せしにその言は全く事實に基けること明白となり、桑哥の瀆職早く上聞に達せざりしは、人々その殘酷なる復讐を恐れしが爲なるを知れり。イ、ロに據る。一の事件は桑哥をして全く皇帝の信用を失はしめたり。忽必烈は一日眞珠を所望せしに、桑哥は臣一も之を所有せずと答へたり。皇帝の寵を專にし而して桑哥と相容れざる一波斯人あり、直ちに忽必烈の許に至りて、曾て桑哥の家にて夥しき眞珠寶石を目撃せることあり、皇帝にして若し暫し彼を引留られんには其間即刻その邸に赴きて之を搜索す可しと奏上し、實に寶石に充てる二個の箱を携へて歸れり。忽必烈は之を桑哥に示して『爾はかくあまたの眞珠を有し、而もそ

の若干を献上することを欲せざるは何故ぞ、何處よりこれを得たるぞ』と問へり。右丞はこれ臣が任命して支那の地方官と爲せる多數回教官吏の進物として得たるものなりと答へたり。皇帝は詰りて『何故に官吏等は朕に寶石を獻ぜざるか。爾は朕の許に些々たるものを齎らし、親ら貴重なるものを藏するか』と云へり。桑哥は答へて『これ皆臣に對する音物也、但し勅命とあらば之を還附す可し』と云へり。皇帝は怒つて塵芥をその口に填充せしめ之を死刑に處せり。チに據る。その巨額の財産は沒收せられ、桑哥の瀆職を奏上す可かりし御史等は皇帝の怒に觸れ、その刑罰に關しては御史臺に下問され、遂にその決定を俟て免職されたり。ロに據る桑哥の犯罪に連坐せる回教徒出身の二人の地方官をはじめ同じく死刑に處せられたるもの少からざりき(一二九一年)。チに據る。かくの如く、賽典赤サイヂチエの死せしより以來、外國出身の財務大臣并にその配下の多數が眷遇を縦にせるは一に厭ふ可き誅求を爲せるが爲なりき。忽必烈は常に財貨を貪りて飽食を知らず、之を國庫に收納し歳入を増加するの策を立つるものはすべて之を重用したるより、政權を掌裡に握れる廉恥心なき人物は苛斂、誅求、誣告、不法の沒收等あらゆる暴政を行ひ、貪慾心を満足せんとして無辜の民の生命を奪へることも少からざりき。イに據る。桑哥に次で財務長官となれるは完澤 Oichai なりき。

治世の晩年に及んで忽必烈は勅命によりて編纂したる新法典、至元新格を頒行したり(一二九

一年)。從來支那の北部に於ては金朝キョウの當時制定されたる法律を準用し來りしが、聊か苛酷に過ぐるの嫌ありき。ロに據る。

忽必烈は一二九四年二月大都タツの宮殿に於て崩じたり、治世三十五年に至り齡八十歳なりき。祖先の廟に祭りて世祖チツと謚せり。

黒きを見て驚けり、これ己が子の悉く顔色白かりしを以てなりとあり。

ロに據る、Marco Polo に據れば忽必烈は身長高からず低からず兩眼は黒くして美しく鼻は羅馬式にて顔は色淺黒かりきと。チには忽必烈の生るるや成吉思汗はその色薄

第四章

蒙古帝國の皇帝は最早遊牧民族の一酋長にあらず、隨て戰敗民族を奴隸視せず征服地方を荒廢に歸せしめざりき、忽必烈は支那の教育を受け、文明の利益を認め、支那の制度を賞讃し、學藝を保護したり。その宮中には亞細亞に國を建てたるすべての民族の學者出入せり。忽必烈は又支那の良書を蒙古語に翻譯せしめ、蒙古の青年の爲に學校を設け、その學修を獎勵せり。政策上の必要より行政長官の地位は之を支那人に與へざりしも、從來專斷なりし蒙古司令官の政權に制限を加へて、大に支那人の痛苦を緩ふしたり。その仁徳は人之を嘆美せしも、而も歴史の傳ふる所に從へば、單に飽くなきの欲望を充さんが爲にのみ萬里の遠征を計畫して、無數の人を死に致したり。

忽必烈は歴史上の記録に於て知られたる最大帝國の君主なりき。この帝國は支那、高麗、西藏、東京、交趾支那、ガンヂス江東の印度の大部分、南洋の諸島、東海よりドニエプル江に及べる大陸北部を包括したり。但し忽必烈の治世中大陸北部のうち抗愛山脈以西の地方を領せる成吉思汗家の諸王がその政權を正當なりと承認することを欲せざりしは事實なり。最後に波斯も忽必烈の

藩封にして、旭烈兀の子孫なるその君主は北京より封冊を受けたり。而してこの大附庸國の統治權は遠く地中海に達し、希臘帝國の境上に及べるより、亞細亞の殆んど全部は大汗の法律に服従したりと云ひ得可し。

この帝國のうち忽必烈の直接統治せる地方は、十二の大區劃に分たれ、何れも支那語にて省と稱する行政官廳ありて之を支配せり。その省の一は *Soltanica* 是思ふに熟女眞ならん并に女眞の地方を含む、第二は高麗、第三は雲南にして、支那本土は他の九省に分たれたり。各行中書省の丞相

即ち行政長官は蒙古人或は外國人にして回教、基督教、佛教を奉じその多數は皇室に直隸せり。回教徒の多數は波斯、トランスオクシアナ、土耳其斯坦の出身にして、立身出世せんと希望して窩闊台、蒙哥の朝廷に來り、奧都刺合蠻、賽典赤、阿合馬の下に要職に就きたり。蒙古人は支那に於て行省ありて地方行政のことに當れるを見てこの制度を採用し、且官長の傍に次長を置くの方法を可なりとし、この次長の地位を支那の儒者に與へたり。

Marco Polo には大汗が支那の主權を得たるは正當の權利に依れるにあらずして單に武力に依れるなれば、住民を信賴する能はず、爲に行政長官の地位を韃靼人サラセン人基督教徒に與へたり。支那人は韃靼人に奴隸視されサラセン人に虐待されて政府を怨めりとあり。蒙古人の入寇以前は官吏と爲り得るは儒者のみにて、その準備には多年の日子を費したり。官吏たらんとするの候補者は經書法律慣例の知識に關して試験を受くることを必要とせり。經書學藝に通ずるものはすべての官職を占め、讀書人は國家の上流社會を構成せり。然るに上述の如く、蒙古人の支那に入寇する

や數千の儒者は奴隸と爲されしが、その多數は耶律楚材の諫によりて解放せられたり。耶律楚材は皇帝窩闊台を説きて、戦勝の永久的果實を收せんとせば、征服地方に行政組織を施くの必要あることを認めしめたりしなり。次で同大臣の盡力により北狄が支那を蹂躪して混亂を生ぜし際、破壊されたる學校は再築されたり。忽必烈も一二八七年に耶律有尚 Yelü Yeouchang の建議を容れて、曩に耶律楚材によりて燕京（北京）に置かれたるが、その後衰頽せる國子監を再興したり。支那の碩學は之が教授職に任せられ、上流社會の多數の青年は之に入學したり。二年の後忽必烈は大都に第二の學院を建てその管理は回々人に委ねたり。皇帝はこの學院の成功を熱望し、親ら蒙古支那の豪族に向てその子弟を入學せしめんことを要めたり。イ、ロに據る。然れども官吏候補者の競争試験を再興せる詔勅は忽必烈の治世には未だ實施せられざりき。

この廣且大なる帝國各地間の交通は、政府の使節の便を圖りて主要の道路に驛傳の制度を設けたる爲敏活と爲れり。傳馬場は同時に旅舎として用ゐられ、二十五哩乃至三十哩を隔てて置かれ、何れも四百頭の馬匹を備へ、その半數は一箇月間之を休養せしむるの規定なりき。この馬匹を供給し給養するの住民はこの負擔に對する賠償として課税を減ぜられたり。緊急の場合には、使節は能く二十四時間に二百五十哩を馳せたり。傳馬場に近くや使節は號角を吹きて豫め馬匹の準備を要求せり。各傳馬場の間には三哩を隔つる毎に官用の飛脚の繼場あり、飛脚の帶には數箇の小

鈴を附着して豫めその來着を報せしめ、以て之が交代たる可き脚夫をして出發の準備を爲さしめ小包を受領し更に之を遠くに遞送せしむるなり。各繼場には傳馬場と等しく書記ありて飛脚到着の日時を記録せり。Marco Polo 第十一册第二〇章參照。

一二九〇年に舉行せる人口調査はこの時代に於ける支那の人口を明にせり。即ち納税者一千三百萬戸以上にして、之を構成せる人口數は五千九百萬なりと計算せり。ロに據る。Benaket の人、Khar-ud-din Mohammed は、Krouzat Oulji-Eldad (賢人の樂園) と題する世界史を著せるが、その一部はチの抄録にして、うちに火者 Raschid-ed-din は支那の蒙古皇帝より波斯に遣せる使節 Poulad Tchinksank より聽きたりとして、支那の人口は調査に據れば納税者九百萬と云へりといふ。

宗族諸王の各省の施政の局に當れるもの少からざりき。何れも之を輔する萬戸長ありて財務を掌れる中書省より命令を受け、之に隨て納税徵收のことに當り、徵税の必要上、同省の屬僚四人宛を配置せられたり。チに據る。軍隊は蒙古人と支那人とを以て組織され、一部は城市内に駐屯し、一部は村落の間に配布されたり。支那人の軍隊は注意を加へて之を他郷に移し、甲省の兵は之を隔在せる乙省に派遣してその守備兵と爲せり。兵卒の服役期限は六年に限られたり。蒙古の軍隊は全部騎兵より成り、適宜の地點に舍營し等しく俸給を受けたり。而してこの遊牧の民は城市に於てその需要せる貨物と交換したり。Marco Polo 第二册第一章、第六八章參照。軍隊の將校には辭令に代へその官等を區別するの徽章として、牌子を交附せり。即ち百戸に賜へるは銀製にて重さ二十オンス、千戸に賜へる

は銀に鍍金せるものにて重さ之に等しく、萬戸に賜へるは金製にて獅子の頭を具へ重さ三十六オンスありき。この牌子に刻せる銘文の冒頭には『大神の全權に依り、その我帝國に與へ賜へる神佑に依り、可汗の御名は神聖なれ、下に命ずる處に従はざるものは何人にもあれ、死刑に處せらる可し』と必ず一様に記されたり。この銘文にはその牌子を授けられたる將校の義務と權利とを明記せり。大軍の司令長官たる都元帥の牌子は金製にして重さ五十オンス獅子の像と日月の象とを刻せり。外國の貴顯も亦牌子を授けられ旅券と爲せり。アルメニアの公子 Sardan が蒙古の朝廷を辭して歸國せんとせる時「純金の牌子」Peking を受領せり、上帝の名を記せる牌なり、加之親王の爲に蒙古人の所謂札爾拉克 Zhetek (聖旨の義)と呼べるものを起草したり』と史家 Etienne Orpailin は云へり。(St. Martin アルメニア雜考參照)この牌子の制度は支那に起れるものなれど波斯の蒙古朝にても之を採用せり。Marco Polo が波斯出發の際、阿魯渾汗より金牌を授けられしものはその紀行に見ゆ。思ふに旅客に授けたるは純金製にあらずして金を被せしものならん、又蒙古人はすべての奉行旅行者等を Ilchi 即ち使節と呼べり。この官等の將軍若し馬に乗りて外出する時は、頭上に日傘を翳し、坐せんとする時は之に銀製の床机を備へたり。Marco Polo 參照。忽必烈は即位の初より蒙古將校各種の官等職權を定め、極めて微細の點に及べり。その禁軍は一萬二千人の騎兵にして四人の將校之を指揮し各、三千人に將として交代して勤務に服したり。國庫の歲入の最も大なる部分は陸軍の經費に充てられ、士卒は紙幣にてその俸給を受領したり。支那に於ては正貨毫も流通せず、金銀は驅逐されて、造幣官の署名印章を具へ、印刷の外に朱印にて皇帝の印璽を押捺したる證券之に代れり。この紙幣は、桑の内皮を白にて搗き、軟塊となして製したるものにて、長方形なる證券の大きは金額の多少に従ひて相違あり、その額面にはツ

ル鑄造の劣等なる貨幣に匹敵せるものより、ヴェニス^{ヴェニス}の金貨六枚に相當せるものまで、すべての價格を現はせり。商賣上之が受理を拒むは嚴禁にて死刑に處せらる可く、之を贗造せるものは極刑を課せられたり。造幣廠に至りて三分の税を支拂はば舊き證券と交換に新證券を請求するを得たり。鍍金師并に金銀工は、細工に必要な貴金屬の下附を請求するの權利を有したり。外國人の支那の國境に着するや、その金銀を上納して假託的貨幣を受領せざるを得ざりき。忽必烈の治世に流通し發行されたるものは鈔^{チヤウ} Marco Polo 又は寶鈔^{バウチヤウ}と呼べり。忽必烈が即位に際してこの便法を採用せしは宋代及び初めて紙幣を發行したる唐代の君主に倣へるに過ぎずして、支那にては既に四百年來之を知れるなりき。Candhi Obscur. chon. 并に Kanpoth の草木子曰、元世祖中統至元間、立鈔法、中統二貫準至元二百文、一貫準至元一百文、行之四十五年、中統以費工本多、尋不印行、獨至元鈔法通行、用以權百貨輕重、民甚便之、元之鈔法、即周漢之質劑、唐之錢引、宋之交會、金之交鈔、當其盛時、皆用鈔以權錢、及當衰叔、財貨不足、止廣造格幣以爲費、格幣不足以權變百貨、遂濫而不行、職此之由也、必也欲立鈔法、須使錢貨爲之本、如鹽之有引、茶之有引、引至則茶鹽立得、使鈔法如此、烏有不行之患哉、當今變法宜於府縣各立錢庫、貯錢若干、置鈔庫錢引之制、如張詠四川行交子之比、使富室主之、引至錢出、引出錢入、以錢爲母、以引爲子、子母相權。以制天下百貨、出之於貨輕之時、收之於貨重之日、權衡輕重、與時宜之、未有不可行之理也。又曰、元朝至元寶鈔凡十等、一十文爲半錢、二十文爲一錢、三十文爲一錢半、五十文爲二錢半、一百文爲五錢、二百文爲一貫、三百文爲一貫五錢、五百文爲二貫五錢、一貫爲五兩、二貫爲十兩、五箇一貫爲半錠、五箇二貫爲錠。忽必烈は皇后察必^{ツツヒ}可敦^{コタン}の勸を容れて佛教を奉じ、喇嘛の保護を與へたるより、支那の讀書人の間には大なる不平を惹起したり。讀書人はその學修せる書物の感化を受けて概して孔夫子の教を信せるが、この宗教はすべての宗教のうちにて官能空想に訴ふる最も少き宗教にして、禮拜には

神机なく僧職なく、帝王と宰相とを以てその主たる教務執行者と爲し、祭日には即ち天を祭れり。故に孔夫子の信徒は、佛教が偶像を寺院に祭り、隊伍を爲せる懶惰の僧侶が種々の迷信的詐譎的生活を營めるを見て痛く之を厭へり。ルブルキの紀行第二十六章によれば佛教の僧侶は黄衣を纏ひ、頭と頤とを剃り珠數を携へ、百人若しくは二百人づつ寺院に住し獨身生活を營むとあり。讀書人は喇嘛を信奉せる君主に對して熱誠以て奉仕する能はず、而して讀書人は支那人の思想の上に至大の信用を有したり。

佛陀の宗教に對して熱心なりしにも拘はらず、忽必烈は基督教徒、回々教徒、猶太教徒の宗教をも尊崇したり。基督教徒の盛儀を舉行するの日には、親ら之に臨場し、香を薫きて後一心に福音書に接吻したり。曾て各國の民の崇敬せる四大豫言者は耶蘇基督、マホメット、モーゼ及び Sommona-Codorn (釋迦牟尼) なるが、すべて之を尊びその天祐を祈ると云へり。Marco Polo 第二卷第二章熱心なる佛教信者として忽必烈は道士を敵視し、一二八一年には命を下して全帝國の道教の書籍を焼きたり。ロに據る。

ネストリウス派の基督教徒は支那にその數多く、一人の僧正は大都在住せり。羅馬法皇ジョアン第二十一世は旭烈兀の子阿八哈汗の使節として派遣せる二人のゲルジア人の入朝せる時皇帝忽必烈が洗禮を受けて基督教の教義を會得し、宣教師の來りて臣民に福音を説かんことを熱望せんことを傳聞し、タルタリーに派遣す可き多數の僧侶を選擇せしが、法皇の崩御したる爲その出發を中止したり。翌年次の法皇ニコラス第三世は五人のフランシスコ派の僧侶に命じて往きて蒙古人支那人の間に基督教を宣傳せしめんとし、之に阿八哈汗に忽必烈に寄せたる宸翰を授けたり。可汗に寄せたる宸翰は冒頭に耶蘇基督の生涯、刑死、復活、昇天に關する簡單なる敘述を揚げ、次に僧侶派遣の理由事情を審にせり。法皇は忽必烈に向て之を優待し、帝國に滞在中之が經費を支辨し、歸國に際しては之に護衛を附し、以て之をして勤勉努力に對する豫定の果實と、多數の人々に幸福を與へたりとの満足とを以て羅馬に歸らしめんことを乞へり。最後に國內の基督教徒を保護せんことを望みて宸翰を結べり。Oder. Ryvaldus の Annals Eccles. に據る。この宸翰は羅馬聖ペテロ寺院にて第一年四月 Nones 前二日(一二七八年四月十二日)附とあり。

一二八九年羅馬法皇ニコラス第四世はジャン・ド・モントコルヴィノ師を團長として同派の僧侶を支那に出發せしめたり。これ波斯の蒙古汗阿魯渾の使節が、皇帝忽必烈の深く基督教に同情せることを説き、之に代て宣教師を支那に派遣せんことを乞へるが爲なりき。法皇は忽必烈に宛てたる宸翰をジャン師に託して、基督教徒に對して好意を表せらるることを痛く喜び、正に派遣せる僧侶等を保護せんことを要求せり。同書に據る。この宸翰の日附は Rome 第二年七月 Idus 前三日(一二八九年七月十三日)なり、Odorico d'Uttine 師は忽必烈の帝都滞在西僧に厚かりしことを云へり。

この時代には又多數の回回教徒支那に滞在したりしが、さる特殊の事情の爲數年間一種の迫害を受けたり。初め回回教徒の商人ありて、白鷺と白脚紅嘴の鷹 (Sancours) 及び Couirs 及び

乞兒吉思部の地方に獲て來て皇帝に獻上したりし時、皇帝は之に謝意を表せんとして、食卓の珍味を下賜したり。然るに避けて之を食はざるの態度を示せしかば忽必烈はその理由を詰りしに、この食物は我が教徒の律法によりて定めたる方法によりて殺されざる動物を以て調理せるものなれば汚れたりとの答を得たり。皇帝はその食物を嫌へるを怒りしに加へて、宮中に出入せる佛教徒基督教徒の讒言に動され、成吉思汗の法令を復活して死罪を以て羊の喉を斬つて殺すことを禁じ、犯罪者の家族并に財産を告發人に與ふ可きことを約したり。この法令の發布されてより告發者續出し、かくの如くにして回回教徒に損害を與へて富裕となりし者少からず、奴隸は身の自由を得んとして主人を告發したり。この迫害は七年間繼續せるが、結局回回教を奉ぜる大官并に回教高僧の懇請によりて、尙書省右丞相、桑哥は皇帝に説くに、回回教徒の商人等最早支那に到らず爲めに皇帝は從來その例として獻上せし貢物を得る能はず、國庫はその商品に賦課されたる關稅を得る能はずとて諫むる所ありき。この理由は忽必烈を動してその法令を撤廢せしめたり。

是より先マホメットの信徒は既に皇帝の機嫌を害ねたることありき。基督教徒等は Courian のうちに『多數の神を崇むるものはすべて之を殺せ』とあるを援きて回回教徒を皇帝に讒したり。皇帝は帝都に住へる回回教の博士等を徴してその首席を占むるものに向て、その聖經に果してこの訓戒を含めるやを問ひしも、之を否定するを得ざりき。忽必烈は乃ち之を詰て『而して爾は

Courian の上帝の下賜せるものなるを信ずるか』と問ひしに『我等は之を疑はず』と答へたり。可汗は追求して、『既に上帝は不信者を殺さんことを爾に命じ賜へり、爾が之を尊奉せざるは何故ぞ』と云ひしに、『是れ時機の未だ到らざるが爲なり、我等は未だ之を行ふ能はず』と答へしかば、皇帝は怒て『而も朕は能く爾を殺すことを得』と叫び、直ちに之を死刑に處す可しと命令したり。桑哥の先任者たりし中書省平章政事阿合馬をはじめ、爾餘の回回教徒の官吏は處刑を中止して回教の眞の精神を會得せる他の教徒を訊問せんことを皇帝に歎願せり。かくて一人の法官 Cahin を物色し、その來るを俟ちて皇帝は之に曩に摘發されたる Courian の一句に關する同一の質問を爲せり。この法官は應へて『上帝が我等に多神教徒を殺せと命じ賜ひしは眞實なり。而も多神教徒と稱するは神を認めざるもの謂にて、陛下はすべての法令の冒頭に上帝の御名を掲げ賜へば多神教徒の間に列する可きにあらず』と云へり。忽必烈はこの答に満足し、法官に殊遇を施し回回教徒の博士等を放免したり。

皇帝は頗る占星術を信用したり。汗八里克 Khanbalik には、基督教徒回回教徒又は支那人にて、占星家たりト者たるもの約五千人あり、無數の貧民に對して等しく之を扶養せる皇帝は、占星家ト者に衣食の資を給したり。Marco Polo 日月の蝕、彗星の出現、地震等が當時神怒の象徴と目され甚く皇帝を恐怖せしめたることは史籍にも見えたり。

忽必烈は冬期に於ては金の舊都の附近に建てたる都城に住へり。支那語にては之を大都と稱し、蒙古語にては汗八里克 Khanbalik と呼べり、汗の都城の義なり。これ今日の北京にしてその本名は順天府なり。都城は方形にして一面長さ六哩にして各三門あり、何れも一千人を以て之を守れり。チには都城を圍める城壁に七塔あり之を掩護す、各塔の間の距離は一里あり(約一リーグ) 首要の街衢は直線宛あり。宮城は Caracorum と稱し中央に位す、大理石雪花石膏を多く用ゐて造るとあり。

十二門に對して十二の大郭外地域あり、商人并に外國人之に住へり。Marco Polo に據る。物産商品は運河を以て容易に大都へ輸送されたり。運河の終點は北

直隸灣頭白河々口に近き天津の小市街にて、同地より他の河流を經由して山東省を横斷せる帝國

大運河に通じ、以て首府と支那の南部との交通を聯絡したり。イ、ロに據る。十二月、一月、二月、の三

箇月は忽必烈は大都に住へり。宮城の周圍は方形を爲し、一邊は何れも一哩の長さを有せり。四

隅と、四邊の中央部とに高樓立ちて之に兵器を藏せり。第二の内壁にも又之と等しく八箇の建築

物ありて皇帝の寶藏として用ゐられたり。この内外の兩壁には色彩濃艶なる戰爭その他の繪畫を

描き、金銀燦爛として人目を眩せり。第二の方形の中央に宮城ありて建てられ、宮中には食卓あ

り、六千の人坐して休養するを得たり。〔ユール校訂のマルコ・ポロ紀行には六千人を收容し、得可き大廣間ありとあり、本文誤れりと知るべし。〕兩城壁の間に

介在せる空地には果樹園あり、野獸の蕃殖せる園圃あり、最も美しき魚族の遊弋せる養魚池あり

キ。Marco Polo 〔元世祖皇帝、思太祖創業艱難、俾取所居之地青草一株、置於大内丹輝之前、謂之警儆草、蓋欲使後世子孫、

子孫看(草木子)に據る。〕知勤儉之節、至正間大司農達不花公、作宮詞十數首、其一云、墨河萬里金沙漢、世祖深思創業難、却望闡干

護青草、丹輝留與

子孫看(草木子)

祝日に際し皇帝大宴會を催す時は、高臺の上なる玉座の前に特に皇帝の食卓を据え、皇帝は南

面して着席し、左に皇后の坐席を設けたり。ヲには左方即ち心臓所在の側を蒙古人は尊むとあり。皇帝の右には皇子その他の宗

族諸公子着席せるが、その坐せる臺は皇帝のよりは稍低く、恰も諸公子の頭と皇帝の足と水準

を保てり。他の食卓は次第に低く以て大官將軍の席に充てたり。皇帝の左側には高低各種の食卓

に宗室の諸公主、大官將校の妻女等着席せり。著名の人物たりと雖もこの食卓に就くこと能はざ

るものは、多く毛氈の上に坐して飲食を取れり。皇帝の左右に奉仕する大官等は純良なる絹布を

以て口を覆ひ、以て飲食物に呼吸の觸ることなきを期せり。皇帝が杯を舉げて口にする毎に奏

樂の音は聞え、列席の人皆膝を屈するなりき、室の中央には美しく鍍金を施し、種々の動物を彫

刻して飾れる方形の檯ありて、溢るるばかりに葡萄酒を盛れる壯麗なる鉢を載せ、その周圍には

稍小なる四個の容器を並べ、馬乳等の飲料を之に汲み取れり。これらの酒類を滿せる銀製若し

くは朱塗の大杯は食卓の上に置かれ、十二人の賓客毎に一個の杯を充てたり。個々の賓客の前に

は一個の大なる匙あり、之を以て大杯より酒を汲み出し各々之を口にするなり。食後は喜劇役者、

手品師、道化方等を紹介し、皇帝の前に於てその技を演ぜしめたり。軀幹長大なる二人の武官は

手に棍棒を握りて室のすべての入口に立ち、何人も足を以て闕に觸れざるやうにと監督せり。こ

れこの觸接を以て妖術と爲せるが爲なりき。若しこの怠慢の擧に出るものあらば、門衛はその着衣を剥ぎて之を裸體と爲せり、但し棍棒もて若干の杖刑を受くることを辭せざるものは裸體にはせられざりき。Marco Polo に據る。ルブルキには皇帝蒙哥の張幕を辭する時、同行の Barthelemi 師不注意にも関に觸れて門衛に止められしも外國人なりしが爲直ちに放免せられたりともあり。

主なる祝日は西洋曆の二月六日に當れる新年の元旦と、忽必烈の天長節となりき。天長節には皇帝は宗王大官より高價の献上物を受け、各宗教の寺院は皆皇帝の爲に祈禱式を舉行せり。新年の元旦には宗王大官將校等何れも白衣を纏ひて、拂曉より宮城に參内し、官等の順序に従て整列し、一定の信號と共にすべて膝を屈し、四度俯伏して皇帝に祝賀を表したり。かく敬意を表したる後宮廷の中央に据えたる祭壇の上に於て忽必烈の名を現はせる小牌の前の香を薫きたり。都市の守將并に地方の長官はこの日に於て白馬を皇帝に献上するを慣例となせり。その他なほ一年に十二回の祝祭を舉行せるが、その際忽必烈は宮中の大官に金糸を刺繡し眞珠その他の寶石を以て飾れる衣服を賜はりたり。Marco Polo に據る。Odoric of Udine 師の記事参照。

六月七月八月の三箇月間は忽必烈、開平府一名上都に在りて之を過せり。この親ら建てたる都城の一端に營める宮殿は之を飾るに最も美麗なる大理石を以てし、周廻約十六哩の園圍を俯瞰せり、而してこの園圍は忽必烈の數々畋獵を試むるの場たり。かくて九月には大都に歸れるが、この習慣は忽必烈の位を襲へる蒙古歴代の皇帝皆之を守れり。Marco Polo 并に J. de Mandeville & Haiton も上都は羅馬より大なりといふ。

忽必烈は各々一萬人宛の獵手二隊を備へたり。一隊は紅衣を着し、一隊は青衣を纏ひ、獨逸出身の二人の主獵頭之を指揮せり。この獵手の兩隊は遊獵者の埋伏せる方向に、野獸を狩るの勢子として用ゐられたり。皇帝は鷹狩に出遊せらるる際は四頭の象の挽ける小屋内に坐せり。Marco Polo に據る。

忽必烈は數人の皇后と多數の妃妾とを左右に置きり。皇后のうちにありて首位を占め、最も皇帝の寵愛を一身に鍾めたるは、蒙古部翁吉刺氏の一領袖諾延按陳の女察必可敦なりき。その擧げたる四皇子は朵兒只 Dordji 眞金、忙哥刺 Manggala 及び那木罕なりき。チに據る。チに忽必烈に十子ありしが察必可敦の四子は、孛兒帖夫人の四子(成吉思汗の)と同じく嫡子と見做されたりとあり。蒙古源流の註に於て J. T. Schmidt 氏は朵兒只は西藏語にて笏の義、忙哥刺は梵語にて幸福の義、那木罕は蒙古語にて温順の義なりと云へり、但し眞金の意義は之を記さず。

忽必烈は更に他の妃妾との間に八子を擧げたり。Couridai, 合刺章地方の副主(雲南王) 忽哥赤 Hongatchi, 吐蕃の副主(西平王) 奧魯赤 Oucouroudji, 愛牙赤 Abadji, 闊羅王 Genkdjion, 忽都魯帖木兒 Coughtemour, 脫歡等これなり。チに據る。但しチには、蒙兀兒史記忽必烈可汗諸子列傳には赤とあり、是チに缺 Marco Polo には皇后の出男子二十一人、妃妾の出二十七人とあり。

妃妾のうち四人は皇后の位に列せるが、何れも三百人宛の少女と二團の小姓宦官を抱へたるを以て、四人の皇后の隨從を合算せば優に壹萬人の數に上れり。

宮中に奉仕せる少女の大部分は之をタルタリーの部族に取れり、就中美女を出すとの世評高き汪古部オシグより之を取りたり。宮廷附の武官等は數々命を受けて數百人の秀女を選抜し、之を宮中に伴へり。少女の兩親は相當の身價を受け、且その女の宮中に奉仕するを喜べり。少女等の宮城に到るや、更に官吏の之を査閲するありて容貌の最も美なる者を選擇せり。特に皇帝附として奉仕す可き少女等はその採用に先ち、暫し老女官の監督の下に置かれ、老女官は命を受けて周到なる注意を以て少女等の體質上の缺點ありて、君主の微妙なる感情を傷ることなきやを視察せり。この少女等は五人宛を以て一組と爲し、各組は前後三日間づつ内房にありて奉侍し、他の一組は表方にありて彼より皇帝の命令を受けて之を傳達せり。皇帝奉侍の命を受けざる少女等は或は皇后に下賜され、或は宮内官吏の處分に一任され、宮中庖厨、衣房等の雜務に使用せられたり。女官等は通常皇帝の許諾を俟て宮内官と結婚せるが、皇帝は例として之に嫁資を與へたり、Marco Polo に據る。宮中女官を選擇するの制度は支那の各省にては之を行はざりき。窩闊台オゴタイは耶律楚材エリユチニツァイの進言により之を中止し、忽必烈クビライは宋より征服したる地方にこの禁止令を及ぼせり。イに據る。忽必烈は初め第四子那木罕ナムガンに位を傳へんとの意ありしが、皇子は海都の征討に向ひて俘囚となりしより、その拘禁中皇儲として第二子眞金チンキムを選定したり。暫くして那木罕は釋放せられて支那に歸りしも、不平を洩らさんとして放言せるより、父帝の激怒を招きたり。忽必烈は面前より之

を遠け、再び入朝することを禁じたり。間もなく那木罕ナムガンは蟄居のうちに死し、美德を備へたる皇子眞金チンキムは同じく父帝に先ちて墳墓のうちに入れり（一二八六年一月）。この皇太子の死後八年にして一二九三年に至り、忽必烈クビライの輔弼の一人なる將軍伯顔バヤンは眞金の寡婦關關眞クワンクワン Guankuanjinに逼られて、高齡の可汗に向ひ皇嗣の未だ選定されざることを奏上したり。茲に於て忽必烈クビライは和林の政權を委託せる帖木兒チムールを選定し、知樞密院事伯顔に命じてタルタリーに赴きて選定のことを告げしめ、且恆例の盛儀と祝宴とを舉行して之を皇儲たらしめたり。ロ、チに據る。

第五章 (成宗紀)

忽必烈クビライの崩クワレずるや、皇帝推選の總會議は上都シヤンツに召集されたり。帖木兒チムールは麾下の軍隊を引率して之に赴けり(五月)。勿論皇儲として選定されしも長兄甘麻剌カマラも亦帝位を覬覦せり。諸王の間にも亦競争ありしが、支那の文武大官は心を帖木兒チムールに屬せり。結局一身の徳望高く、中書省平章政事、知樞密院事とし文武の兩權を兼ね、來會者中にあつて最も勢力ある蒙古將軍伯顔バヤン(譯文は忠實にれど通鑑輯覽にも考證せるが如く伯顔に兩人あり、成宗確立に功ある伯顔は平章政事にあらず。平章政事の伯顔は世祖本紀に見ゆる如く至元三十年十一月を以て任命されたり。賽典赤賸思丁傳に見ゆる納速剌丁の子伯顔と同一人也。)は劍を握て立ち、勵聲一番、余は先帝の選定せられたる皇儲の外何人をも帝位に即かしめずと聲明したり。この一舉は能く討論を終結せしめ、甘麻剌カマラは弟帖木兒チムールの前に膝を屈し、爾餘の諸公子も之に倣ひ、帖木兒は可汗カカンとして公表されたり。大赦令は例の如く公布されたり。イ、ロに據る。チには帖木兒の母、闊闕眞は帝位の未だ定らざる間攝政の任に當り、總會議の開かるるや甘麻剌の帝位を争はんとするを見て辯説爽かに先帝の意志に従ひ子孫のうち最も能く成吉思汗の遺訓を體せるもの帝位に即く可し。爾等須らくその知れる處を語れ、列座の諸王大官爾等のうちに就て取捨せんと述べたり。能辯なる帖木兒は先づ口を開きて流暢に太祖の聖訓を説けり。甘麻剌は口舌稍々滯滞し聊か確信を缺けり。兩人の陳述を聽き了りて來會者は異口同音帖木兒皇帝の位に即く可しと呼べりとあり。

帖木兒は先づ第一に父に皇帝の尊稱を贈り、母を皇太后に進め、且命じて眞金チンキム、忽必烈クビライ并に皇太后察必チャムバイの爲に陵墓を築かしめたり。帖木兒は完澤篤 *Ojdator* 皇帝と稱せるが、蒙古語にて

『幸福なるもの』との義なり。和林カラクルムを首府とせる蒙古の行政權は之を長兄晉王甘麻剌に與へたり。帖木兒の義兄弟なる闊闕出ケウクチュと闊里吉思 *Keigniguis* とは西北境上に配置せられたる軍隊の司令官に任ぜられて海都カイツと篤哇ツツに向へり。帖木兒の甥阿難荅 *Ananda* は黄河の西に位し曾て唐古特の一部たりし地方をも含める一大地域の藩王と爲れり。この安西王の領土は阿難荅の父忙哥剌マンガラが前朝の時に封ぜられたる地方にて、首都を京兆府キンチヤウフに置けり、今の西安府即ちこれなり。伯顔 *Bar-yan-Fentchan* [Fentchan は平章フウシヤウの國務大臣の意味を有する波斯語なり。]は中書省平章政事に留任し、一は賽典赤 *Seyid-Edjell* と稱せられたり、蒙古人は甚くこの名を重んじ、之を以て中書省の平章政事の固有のものと見做し來れるなりき。その同僚八人ありて共に財務評議官を構成したり。チに據る。

太傅知樞密院事伯顔バヤンは帖木兒の治世の初(一二九五年一月) 齡五十九歳にして死し、一般に蒙古人にも支那人にも惜まれたり。宋朝と干戈を交へし際は能く大軍を指揮するの技倆あることを示したり。部下の將校はその用兵上の天才の卓越せるを信じ全然その命令に服従したり。伯顔は流血の慘禍を減せんと努め、そのすべての性質は稀に見るの謙徳によつて飾られたり。ロに據る。

帖木兒の治世中の著名なる事蹟は前後二回の戦役のみにして、一は支那に隣接せる印度の一部に於て反抗して蜂起せる民族の征服を目的とし、他は忽必烈の宿仇たる海都カイツと篤哇ツツとの征討の爲に企てられたり。

即位以來帖木兒は安南國王と和し、且曩に瓜哇遠征によりて一時中絶したる印度地方との交通を再び開始せり。據る。緬甸國王迪提牙 Tinda 數年來納貢を怠りしより、帖木兒は將にこの藩屬國王に對して問罪の師を起さんとせしに、一二九七年その子信合八的 Sinhabati 入朝して貢賦を獻じ、且父に代りて忠誠を表したり。帖木兒は封冊を授けて緬甸國王を承認し、その子信合八的を世子と爲せり。又皇帝が國王に與へたる方形の印璽には虎の像を刻したり。之と同時に緬甸境上の蒙古軍の守將は、同王國の領土を尊重し、その住民と帝國との通商を保護すべしとの命令を受けたり。據る。

蒙

古

史

三年の後、迪提牙は弟、阿散哥也 Asancoyé に廢され、次で殺されたり。その子來て援兵を乞ひしかば、帖木兒は雲南の平章政事薛超兀兒 Sietchaur に命じて緬甸に赴き、阿散哥也を携へて歸らしめんとせり。薛超兀兒は數々敗北しその極遂に雲南に退却し、而して叛亂を鎮壓し得たりとの報告を爲せり。然れどもその部下將校の多數が叛徒より賄賂を受けたること明白なりしかば、何れも死罪に行はれたり。薛超兀兒は皇帝之を免職してその財産を沒收したり。

この緬甸の遠征に際して、人あり帖木兒に向つて雲南の西に位せる八百媳婦の王國は未だ支那の曆を採用せず、換言すれば大帝國に服從せずと説くものありき。帖木兒は父祖に倣ひ赫々たる武功を以て治世に光彩を添えんとし、この王國に對する征討軍として三萬の兵を出し、(一三〇一

第

三

編

年三月)初めにこの計畫を進言せる雲南行省左丞劉深を以て之に將たらしめたり。然るにこの遠征軍は長途進軍の疲勞と、南方風土の影響とによりて、忽ちにして三分の一に減じたり。軍隊糧食の給養と騎兵馬匹の補充との必要より、雲南に於て徵發を行へるが爲、苗子、獠子その他支那人がをしなべて諸蠻と稱せるこの地方の山間民族を驅て叛亂を起さしめたり。その酋長の一人宋隆濟は諸蠻聯合軍を糾合して之が司令長官と爲り、劉深を圍めり。若し雲南王たる忽必烈の子梁王、忽哥赤にして敏活に來て之を救助せざりしならんには全軍を擧て覆没せしならん。

皇帝の命令により劉國傑并に楊賽因不花 Yangsai-yun-poua の兩將は四川、雲南、湖廣三省に於て出征せしめ得可き軍隊を悉く集めて、劉深の援助に向へり。蓋し劉深は激しく宋隆濟に追擊されて總退却を爲し、輜重を委棄し且多數の士卒を失へり。かくて叛亂は益々蔓延し、爾餘の民族も多く之に加擔したり。烏撒、烏蒙、東川、芒、武定、威楚、普安等これなり。叛徒の分遣せる部隊は抵抗せざる地方に於て各城市を掠奪し、各要塞を破毀し各村落を劫掠したり。劉國傑は僅かにその陣地を保ちて以て只管應援の命令を受けたる陝西行省の平章政事、也速禰兒 Yessour-tair の來著を俟てり。その來著するや、劉國傑は各方面より叛徒の本據に進入し、その大多數を捕獲し殺戮したり。初めより叛徒の巨魁たりし蛇節と稱する女子は擒にせられて處刑に行はれたり。宋隆濟は遁れ去らんとし、て姪に妨げられ、首を刎ねられたり。兩酋の死するや叛徒は忽ちにして降服したり。皇帝は之に

大赦の令を布けるが劉深リウチンは裁判に附せられて、死罪に行はれたり。ロに據る。

北邊の交戦は終始已むことなかりき、牀兀兒 Tchohangour は一二九七年父なる欽察部長キチヤク士哈シカの死後之が後任に擧げられたるが、その指揮せる征北諸軍は一二九七年并に一二九八年に海都并に篤哇の軍に對して多少の戦勝を収めたりしが、兩王も亦敵兵の怠慢に乗じて成功を得たり。一隊の篤哇の兵は帝國の國境を守備せる軍隊の哨兵線を攻撃したり。數個部隊の騎兵は西南より東北に互れる一線上に一定の間隔を置いて配置され、相互の交通連絡は遞騎哨に依りて敏捷を期せり。敵兵の近くを認むるや傳騎は哨兵線に沿つて疾驅し、以て警戒を與ふるの設備なりしも、偶々この日に方りて三個分隊の守將は相會して酒宴を催し、深更この警告に接せし際は、何れも泥酔して馬に乗ること能はざりき。駙馬闕里吉思クエルギスはこの事情を知らずして部下の兵を以て戦列を布きしが、總數僅かに六千人に過ぎず、直ちに攻撃せられたり。而して期待せる援兵は毫も來着せず、已むを得ず敗走せしが追撃を受けて捕虜と爲り、駙馬たることを明かにせしが爲辛うじて命を全うするを得たり（九月）。

帖木兒はその職務を怠れる三將を禁錮したり。然れども之が爲に招ける戦敗は忽ちにして償はれたり。即ち要木忽兒 Youboucour 并に Oulouss-Bouca の兩王并に將軍朵兒朵哈 Dou douca は一萬二千の兵を率ひて篤哇を棄てて帖木兒に降り。何れも忽烈フレイの治下に於て帝國に叛きた

るものなりしが、帖木兒はその貳心を疑ひて之を信ぜず、兵を派して之を警護せしめたり。途上 Oulouss-Bouca は部下の兵をして和林を劫掠せしめたり。その入覲するや拘引され有力なる後援者ありて爲に放免されしも、而も帖木兒は之を任用することを欲せざりき。之に反して要木忽兒は何等謹む可き點なしとて優遇を受けたり。朵兒朵哈は前後二回亡命して敵に降りし廉を以て死刑の宣告に接したりしより、涙を流して忽烈フレイに叛きて走れるは全く恐怖の餘に出でたるに過ぎず、曾て先帝に對して兵器を動かせることなし、今や帖木兒の即位せるを見、兩王と相語りて投降せり。引率し來れる兵は曩に奪ひ去れる兵よりも多數なり、願はくは之に將として進んで可汗の敵に向ふを得んと哀訴せり。帖木兒乃ち之を宥し之に兵を授けて篤哇を征討せしめたり。要木忽兒も之と共に出征するの勅許を得たり。何れも篤哇の軍隊の虚實に通ぜるが故、互にこの叛王に對して殊功を立てんことを思へり。

一旦戦勝の利益を収めたる後篤哇は靜かに兵を収めて徐にその鞞耳朵オウルツに向て退却したり。蓋し途上、唐古特より畏兀兒地方に近き合刺火者に至るの境上に駐屯せる阿難荅 Ananda, Atchik, Tchobai の軍を襲撃せんとの計畫を有せるなりき。然るにその軍隊の列を亂して將に一河流を渡らんとするに方り、朵兒朵哈は突如として之に向つて猛進し、全く之を撃破したれば、その多數は或は戦死し或は溺死せり。篤哇はこの戦に際し義兄弟の捕虜となりしより使節を皇帝の許に

派して闊里吉思ケルギスと交換せんことを提議したり。帖木兒チムールはこれに同意を表し捕虜を篤哇ダウアの本營に送りしに、その到着に先ちて篤哇は闊里吉思を殺し、而して海都カイフの許に送らんとせしに途上病死したりと稱せり。

那延 *Nayan* は曾祖、鄂爾達 *Orda* の奥魯思ウルスに長として數年來海都、篤哇の兩王と戦へり、蓋しこれ兩王が那延の甥にして競争者たる貴烈克 *Kouilek* を助けしが爲にして、この間互に相戦ふこと十五回に及べり。那延は勢ひ支へ難きより、波斯の蒙古汗と皇帝帖木兒チムールとに提議して、同時に三面より共同の敵を攻撃せんとせり。時機は恰適なりしも皇太后闊闊眞ケニクゼンは皇帝を諫めて領土は既に廣きに過ぎたり、若し海都と篤哇とに對して親征せば、その兵力の所在地遠く帝國の本據と隔在せるが故、一、二年の歲月をこの遠征に要す可く、不在中支那に騷亂の起れることを保せずと云へり。茲に於て帖木兒は那延の提議に就ては熟考す可しと答へて謝してその使節を歸せり。チに據る。Raschid は帖木兒と同時代の人なり。ばチの成吉思汗の宗家の記事は茲に終れり。

海都カイフは一三〇一年に從來曾て親ら統率せしことなき程の大兵を擁して帝國に入寇せり。篤哇を初として窩闊台ウカタイ、察合台シャカタイ兩統諸王四十人は軍に従へり。帖木兒の姪海山ハイシェンは是より先、皇帝の命によりて北邊の軍隊に派遣され、月赤察兒 *Yuetchetchar* 牀兀兒オヨノングル兩將の下に軍事を視ることとなりしが、直ちに蒙古のこの方面に駐屯せる五個軍團を召集して、和林カルクムと *Tannir* 河との間に於て

敵兵と會戦したり。海都は戰敗れて退却し、一三〇一年八月その背進の途上病に罹りて仆れたり。イ、ロに據る。トには海都、篤哇の兩王は兩交戰國の境上に位せる *Catalic* 市より數日程の地にて皇帝の軍と遭遇し、蒙古人の實例に従ひ兩軍より交渉委員を出せし和解成らず、乃ち干戈に訴へたり。海都は例の如く勝利を博し多大の戦利品を鹵獲し、遠征の結果に満足して歸國の途に就きし。海都は在世中、汗と稱せるが仁徳ありしが爲臣民より惜まれ、偶々病を得て砂漠のうちに死せりとあり。海都は在世中、汗と稱せるが仁徳ありしが爲臣民より惜まれ、勇武なりしが爲士卒より惜まれたり。或は可汗の兵に對し、或は爾他の敵國に對して干戈を交ゆること前後四十一回、殆ど常に勝たざるはなしと云へり。その部下百戰の兵は蒙古人の間にありても、戰鬪中勇猛の振舞他に勝れて見えたりと云ふ。Olor. Raynald. の書物のうちにニコラス第四世が基督教の教義を説き改宗を勧めたる書簡を收めたり。

この軍隊は慣例に従ひ、故ら慟泣して海都の爲に葬儀を営みたり。海都の遺言を託されたる篤哇は棺の左右に集まれる諸王に向て、その四十人の男子のうち年長者たる察八兒 *Tchabar* は當時恰も不在なりしも、之を推して海都の位を嗣がしめんことを提議したり。蓋し篤哇はこの青年公子に對して負ふ所ありしなり、初め八刺ハサの死後一族の諸公子習慣に従ひ海都の朝廷に赴きて各々空位に即かん事を望みし時自稱候補者の一人たりし篤哇は察合台統の諸公子中の年長者ならざりしも察八兒の盡力によりて目的を達することを得たりしなり。列席の諸王は皆篤哇の提議に賛成したり。茲に於て諸王は多數の部下將校を派して柩を護送して海都の都城に赴かしめたり。間もなく察八兒も來會せるより、篤哇を初として諸王は之に忠誠を表したり。

察八兒の窩闊台の王位に即きし時、篤哇は帖木兒の宗主權を認めて、三十年來成吉思汗の一族を割ける戦役の局を結ばんことを建議したり。この建議は察八兒その他諸王の同意を經、諸王は何れも使節を派して帖木兒に服從の意を通ぜしめたり（一三〇三年八月）。皇帝は喜んでこの平和の保證を受け、初めて一族の諸王より宗主權を承認せらるることとなれり。

然れども帖木兒と和睦したりし諸王の間にも和協は永く繼續せざりき。翌年より察八兒と篤哇との間に紛議起り、爲に成吉思汗家兩統の諸王は互に兵器を執て立つことと爲れり。篤哇は能く皇帝を誘ひてその方面より宿仇の遺子を攻撃せしめたり。察八兒はかくて殆んど部下の軍隊のすべてより見放され、窮餘の策として三百の騎兵を従へ、敢て敵の懷に投じて保護を乞はんとせり。篤哇は之を禮遇せしも、その所領を奪ひて、土耳其斯坦の地をトランスオクシアナに兼併し、曾て海都によりて四分五裂と爲されたる察合台の遺領の殆んど全部を統一するを得たり。抑も窩闊台統は成吉思汗より帝冠を讓られ、窩闊台、貴由の兩朝を經て皇帝蒙哥立つに及びて政權は奪はれ、海都出でて材幹を發揮し稍々廣且大なる領土を所有したりしも、その子察八兒に至りて遂に亡びたり。

篤哇又トリス一三〇六年に死せり。その子寬闊 Gourdjone 位を嗣げるが在位僅かに一年半に止れり。その死するや、察合台の子、莫圖根モツツガンの血統を傳へたる達里忽 Talicou 主權を奪へり。

達里忽は百戦の老将にして回回教を信じ、その君主と爲るや蒙古人の間に之を布教せんと努めたり。既にして察合台統の諸王二人は兵を手にして立ち、王位は須らく篤哇の王子の有に歸す可しと主張したり、されど敗軍せり。他の諸王は將に兵力を合せてこの戦敗に報ゆる所あらんとせしが、偶酒宴に際して達里忽は舊主の王子を即位せしめんと欲せる將校等に暗殺せられたり。（一三〇八—九年回教紀元七〇八年）

叛將等は篤哇の小子怯伯 Gräbek を擁立したり。その位に即くや間もなく、察八兒は海都一門の爾余諸公子と同盟して之を攻撃したり。察八兒は戦敗れて若干の兵を收めて伊犁河を渡り皇帝の領土に奔竄したり。この戦勝を博して窩闊台統の子孫の最後の希望を打破せる後、察合台統の一門は總會議を開き怯伯の兄也先不花 Isanboca を王位に推さんと決議したり。也先不花は時に可汗の朝廷にありしが、直ちに往きて主權を求めんとし、怯伯は快く之を讓れり。但しその死去の年は詳ならねど、怯伯之に次ぎ一三二一年まで君臨したり。トに據る。

窩闊台、察合台兩統諸王の間に於けるこの數回の血戦は土耳其斯坦の荒廢を來し、馬思忽惕 Bey の善政によりてトランスオクシアナに復活したる繁榮の要素を打破したり。蓋し突厥種蒙古種に屬する遊牧民族は産業の果實を認めて掠奪の目的物と爲し、常に平和なる所有者の手より之を奪ふの機會を窺ふものなるが故、這般遊牧民族の劫掠に暴露されたる地方の繁榮は不安の狀

態を脱すること難し。假りに一城市一地方に於て數年間平和繼續し、政府も寛大にして福祉増進したりとせよ、その富裕なるは偶々以て戰亂の災禍を招くの因を爲し、都鄙の住民は絶へずその損害を補ふにこれ汲々たり、これ狂暴なる軍隊に圍まれるが爲、之が新なる徵發に應ぜざるを得ざるが爲なり。地方は一門諸公子の間に分配さるるが、何れも領土と軍隊とを有し、些々たる確執も一變して内亂となること尠からざりき。國君の選舉には悉く參會し何れも國君たるの權利ありと信じ、推選されたるもの若し人格の優れて威望あるにあらずんば、徒らに大諸侯に利用さるるに止まらん。かくの如くにして土耳其斯坦并にトランスオクシアナの歴史は成吉思汗家諸王の治下に於ては、唯是れ一幅の慘憺たる無政府の畫圖に過ぎざりき。

海都の死後蒙古帝國の中央部を攪亂せる波瀾の上に一瞥を與へたれば、再び筆を帖木兒の上に轉ぜん。帖木兒の宗主權は既にこの廣且大なる帝國の各部に於て承認せられたるなり。然れども皇帝は永く亞細亞の統治權を行使せず、一三〇七年二月、四十二歳にして崩じたり。支那人はその總明仁慈の徳を讃えたり。死刑の宣告に對しては之が裁可を拒みてその執行を禁じ、司法行政の上に面目を更めたり。蓋し從來は宗室の公子公主も又帝室の親族もその臣下に對して無限の權力を行使したりしなり。ロに據る。

青年時代に帖木兒は暴飲暴食したり。祖父忽必烈は絶えず之を叱責し、之に杖刑を加へたるこ

と三回に及べり。かくて遂に忽必烈は數人の醫師を之が侍從となして命じて食卓に伺候せしめたり。醫師等若し、帖木兒須らく食卓を去る可しと斷ずる時は兩棒を併せ叩きてその意を通じたり。然れども帖木兒は又その注意を遯るるの策を講じたり。煉金、魔法の祕術に通じたりと稱する一回教徒あり、巧みに青年公子を籠蓋し、之を浴舎に案内し、主人をして浴槽に水を汲み入れずして酒を充たさしめたり。忽必烈は帖木兒をしてこの危険なる人物を左右より遠けしめんとせしも、従はざりしより、一策を按じて、公子の邸宅よりこの寵臣を奪ひ去りて追放の刑に處し、隱密にその命を奪ふ可しとの命令を與へたり。帖木兒の一度皇帝となるや能く酒を嗜むの癖を制して忽必烈の百方苦心してなほ未だ禁壓し得ざりし過失を更め、かくて節酒することとなりしが同時に淫逸度なきに至れり。チに據る。

山は之を好まず三萬の精銳に將として上都を指して進軍し、母と弟とも北上して即位式に參列せんことを求めたり。八達は即ちこの北方の都城に向て出發し、かくて上都に於て諸王諸將の來會せる庫哩勒台の會場に於て海山は皇帝として祝賀を受けたり。

トには海山即位式の記事あり曰く『海山の登極は占星師の定めたる日に莊嚴に行はれたり。宗族の諸王七人選拔せられ四人は白氈の上に坐せる新帝を擔ひ、二人は腕にて之を支へ、さて玉座に着ける時一人は葡萄酒の杯を捧ぐ、巫師は直ちに新帝の幸福を祈り、Kuluk-Kingの尊稱を上る。皇帝は内庫より車に滿載して(卷末の註第五を見よ)絹布を運ばせ宮殿前に堆く積み上げさせ矢鏢に人々に頒與す、無數の眞珠地上に散亂して蒼天の星を望むが如し、宴會は一週間に亘り日々宮中にて四十頭の牝馬と四千頭の羊とを要す。神事に供す可き牝馬七百頭羊七千頭以上の乳を瀧ぎて祝するよりその乳溢れて鞞耳米の附近は恰も乳の往來の如し。この馬羊はOrgonsと稱す幸福を荷ふものと云ふ義なり、すべて純白にて、曾てその肉を食ふものなし。神事に供す可き馬に乗るは唯皇帝のみ』と。この神事に供さるる動物に關してはルブルキ師は『蒙古人の習慣として五月九日牝馬の白きを悉く集め之を神事に供す』と云へり。Marco Poloにも皇帝は白馬一萬以上を所有し八月二十八日の祭日にその乳を地上に瀧ぐとの記事あり。○トには又海山の弟 Buryanqou Caan 即位式の記事あり。庫哩勒台に召集されたる宗族諸王はその數一千四百に達し、何れも途上格式に従ひて一千頭乃至七百頭の驛馬を徵發したり。宴會は一週間に亘り日々四十頭の牝馬四千頭の羊を屠れるが、なほその他に回教徒の肉を口にせざる動物に至りてはその數詳ならずと云へり。葡萄酒、クイミズ、乳、乾酪等の消費額も是によりて類推し得らる可し。占星師の定めたる時刻に至り新帝は絹布錦欄を以て飾れるCarpetのうちに南面して玉座に着けり。成吉思汗の宗族諸王は玉座の右に、その弟朮赤哈薩兒の後裔たる諸王は左に立てり。可敦は床几の上に座せり。Finchans(平章)諸將はその官等に從ひて或は室内に或は室外に着座せり。玉座の前には寶玉を鑲めたる食器酒杯夥しく煌けり。新皇帝はPouli Yantouic Caanの尊稱を受け、諸王諸將は慣行の儀式に從ひて膝を屈し錦欄を敷き誓詞を述べ酒杯を捧げたり云々とあるもの是なり。

海山は曲律可汗 Kuluk Khacan の尊號を受け、生母を皇太后に進め、亡父に皇帝の尊號を贈れり。之と同時に弟八達の殊功ありしことを認め實子を措きて之を皇儲と定めたり。

海山は大都に入城するや先づ祖宗を祭れる靈廟に參拜したり。次に阿難荅の黨與に對して皇弟の下したる死刑の宣告を執行したり。阿難荅とその親友明里帖木兒、皇太后ト魯罕も新帝の安全

を圖るが爲犠牲に供せられたり。イ、ロに據る。トには海山初め上都の庫哩勒台に來會せる諸王諸將に、可汗の札撒は海山の祖父なる皇子眞金を皇儲と定め、阿難荅の父忙哥刺には唯一地方の政權を授けたるに過ぎざれば、帝位は當然海山の有に歸す可しと答へたり。茲に於て來會者は皆海山を奉戴す可しと誓ひたり。新帝は八達の功績を認め實子ありしにも拘はらず之を皇儲と定め、來會者にもこの勅詔を尊重せられたしと注意せり。次で阿難荅の處分を議し同族諸王に諮らず帝位を篡奪するは成吉思汗の大法の禁する所なりとて之を死罪に行へり云々と見ゆ。

阿難荅は幼時一回教徒に託されてその教旨を學べるより、熱心に之を信奉し、且之を唐古特に弘通せしめんと努めたり。十五萬人を數ふるその軍隊のうち大多數は、阿難荅の盡力によりて回教に改宗したりと稱せり。阿難荅はコーランを暗誦し巧みに亞刺比亞文字を書寫したり。部下將校の一人は皇帝帖木兒の許に赴きて、阿難荅は常に回教寺院にありてコーランを讀誦することをのみ好み、蒙古人の小兒に對して割禮を行はしめ、軍隊の間にマホメットの教義を普及せしめんと努むとて不平を訴へたり。帖木兒は二人の使節を特派して之をして再び佛教信者たらしめんとせしも使節の諫言は無効に了れり。皇帝は阿難荅に入朝を命じ親ら訓戒せしも、何等良好なる成績を見ざりしより之を禁錮したり。而も間もなく、皇太后關關眞がこの苛酷なる處分を聞かば阿難荅に心服して措かざる唐古特の住民の不平を抱かんことを慮りて皇帝に説きしかば乃ち之を歸任せしめたり。チの帖木兒傳に據る。

海山の治世には聊か重要な事蹟の記述す可きあるのみ。即ち皇帝は孝經と題する孝行を説ける孔夫子の著書の蒙古譯を全帝國に配布し、蒙古の諸王大官に之が讀誦を奨めたり。ロに據る。又皇帝

の命により喇嘛、托音垂濟鄂特色爾 Tchhoigji Odszer は佛教の經典の大部分を蒙古語に翻譯したり。蒙古源流に命有名之托音垂濟鄂特色爾之新帝は海都の子察八兒を初として入覲して忠誠を表せる同族諸王を優遇したり。支那人は皇帝の餘りに喇嘛に歸依したることを非難せり。曾て僧侶の暴行を爲せるものありしに、海山は之に刑罪を加へずして、却て喇嘛を毆つ者は其手を斷ち、之を罵る者は其舌を裁らんとカイツの法令を出したりき。この特別の保護は加へられしも、從來全然課税を免れ來りし佛僧と道士との所在地はこの時代より爾余の土地と等しく租税を課せらるることとなれり。海山は餘りに酒色に耽り一三二一年二月三十一歳にして崩じたり。諡して武宗と云へり。元朝正行鈔法、而不鑄錢、獨至大官裏行、至大二等錢當五、以蒙古字書、小錢以楷書、及至正官裏、脫脫爲相、立寶泉提舉司、鑄至正錢、直世道變尋亦罷鑄(草木子)皇太弟、愛育犁拔力八達は皇帝の位に即き八達は即ち Boyantou と字され、此皇帝以後の記事はトに見えず。八達には普顏篤即位式の記事に次ぐ當時の恩賜のことを述べ、新帝は各地に即位を報じたが、その使節二人 Ayadji Tchink-sank 及び Devlet-schah とは七一年の tamazan 月(一三二二年二月)に冬季バグダードを宮城とせる支丹完澤篤 Oldjaitou の許に到れり。使節は波斯の蒙古汗に支那の蒙古汗の勅書と香物とを齎せり。Oldjaitou は使節を優待し之に錦衣と玉帶とを與へたり。兩使は途上各驛馬六百頭を徵發したり。此際波斯の支丹が支那に遣れる使節は旭烈兀家の世襲領として支那に存せる采邑の帳簿を調査し數年來の貢租を徵收す可しとの命を受けたりとあり。普顏篤可汗 Boyantou-khacan と稱せり。直ちに多くの丞相等が海山の政に荒めるに乗じて政權を濫用し、私腹を肥し、幾多の不正を行へるより之を罰したり、即ち或は死罪に處せられたるあり、或は流竄せられたるあり。

八達が即位を知照したる附庸國王のうち、占城國王、安南國王、八百媳婦蠻、大徹里蠻、小徹里蠻、馬八兒國王并に日本に近き島なる Hien 國王等ありき。諸王はすべて使節をして朝貢せしめたり。

曩に忽必烈の時科擧の新制を議定せしも未だ實行するに及ばざりき。一三一五年八達はこの前代の制度を復舊せり。競争試験に應ず可き讀書人は之を二種に分ち、一は蒙古人より他は支那人より成れり。皇帝は親ら之に課題を與へて面前に於て論策を起草せしむることとなし、蒙古人支那人共に最も優良なるもの三人を擧げ之に格式と報酬とを授けたり。讀書人は支那人の思想の上に多大の勢力を有するの常なるが、科擧の實行は之をして八達を敬慕せしむるの媒介と爲れり。八達は歴代宦官權力濫用の弊甚しかりしに鑑み、一三二四年を以て之を文官に任用することを禁じたり。而も翌年一宦官を昭文館大學士と爲して親らこの禁令を破れり。

海山の長子和世球 Corschala は帝位相續の權利を有せるより、八達に遠けられて出でて雲南に鎮せり。然るにその左右に侍せる將校等はこの新任に不満を抱き之を以て流謫に異ならずとなし、途上陝西に於てあまたの蒙古の將官と相圖りて和世球の爲に干戈を執て立ち、潼關の要塞を奪へり。而も間もなく諸將の變心せる爲、和世球は已むなく亡命して、阿爾泰山の西北に位せる地方に走れり。皇帝は茲に於て皇子碩德八剌 Schordj-bala を立てて皇太子と定めたり。八達は察合台の奧魯思の君公たる也先不花と戦へり。欽察部の長官、牀兀兒は部衆を率ゐて二

度也先不花の軍隊に對して勝利を博し、之を追撃して鐵門關に近き札亦兒 Tchair の地に至れり。イは牝兒の頌徳文によりて之を記す。〔元史卷一百二十八牝兒傳に也先不花の歴史にはこの戰の記事なし。〕〔花とのこの戰を記す原註は誤れり。〕

八達は一三二〇年二月三十有餘歲〔校者曰く、馮氏には應作三十六歲とあり〕にして崩じたり。皇帝は仁慈の徳を具へ、政務に勵精し、讀書を好み、歴史殊に蒙古史に精通したり。諡は仁宗と呼べり。

八達は右丞相として蒙古の貴族鐵木迭兒 Temouder を登庸せしに、その爲す所邪曲多く人之を厭ふに至れり。遂に内外の御史四十餘人より政權濫用を理由として彈劾せられ、右丞相の職を罷められ且死刑の宣告を受けたり。然るに皇太后は之を保護して宣告を執行せしめず、聽て八達の崩御するに及びて直ちにこの寵臣を復職せしめたり。新皇帝碩德八剌は皇太后を憚りて之を留任せしめしも、偏に木訶里の後裔なる拜住 Baidjou を信任したり。鐵木迭兒は政敵の多數に對して復讐せんとして之を殺戮したり。一三二二年に至りてその死するや、幾多の告訴狀は最早恐怖心によりて抑制さるるの必要なく、その舊惡を暴露し、無辜の被害者の近親は司直の再審を乞へり。皇帝は鐵木迭兒の官爵を追奪し、その墳墓を發き、資産を沒收したり。

鐵木迭兒の虐政に參與せるもの、就中その養子鐵失 Tekchi は更に追究されんことを恐れて皇帝と右丞相とを暗殺して、甘麻刺の子也孫鐵木兒 Yissoun-temour を擁立せんとして陰謀を企てたり。鐵失は御史大夫として軍隊の間に大に勢力を有せしなり。時に也孫鐵木兒は漠北土拉

河地方の軍に將たりしが、鐵失は密に斡羅思 Oralous と呼べる將校をして陰謀者十六名の署名せる書狀を携へて之を訪はしめ謀計の既に定まれることを報じ、來て帝位に即かんことを乞へり。也孫鐵木兒は斡羅思を拘禁し、皇帝に對して弑逆の密謀あることを報ぜしも、その使節の來着は時機を失したり。陰謀者等は計畫の外間に洩れんことを恐れ、公子の回答を俟たずして之を實行せんと決したり。皇帝は上都より大都に還幸せんとして、南坡に駐蹕せり。陰謀者等は先づ拜住をその帳幕に殺し次で禁幄の衛兵を襲ひ、鐵失は手づから皇帝を臥所に弑したり。(一三二三年) 碩德八剌は時に二十一歳なりき。

諸王、按梯不花 Antai-bouca 也先帖木兒 Yésien-temour とは皇帝の璽綬を奪ひて之を

也孫鐵木兒の許に齎したり。九月也孫鐵木兒は克魯倫河畔〔宋元通鑑には九月癸巳遂即位於龍居河とあり。元史本紀も同じ。〕の陣營に於て即位し大赦の令を布けり。新皇帝は初め弑逆によりて帝位に陞るの機會を造れる陰謀者等を要路に用ゐんと欲せしも、是れ陰謀に與れりとの嫌疑を招く可しとて諫むるものありき。也孫鐵木兒は大に動かされ、直ちに也先帖木兒を他の二人の共謀者と共に拘引し、而も之をその犯罪地に於て死刑に處す可しと命令したり。更に大都には二人の將校を派遣して命令して鐵失以下の共犯并に之が家族を誅せしめ、その財産は之を沒收したり。鐵木迭兒の子鎖南 Sonan は遠流の刑に處せられたるのみなりしが、その親ら拜住の臂を斫りしことを説くものありしより、又之を誅

したり。陰謀に左祖したる宗族諸王は各地に追放されたり。也孫鐵木兒は一三二三年十二月大都に至り、翌年の初皇子阿速吉八 Asoukêpa を皇太子に擧げたり。

也孫鐵木兒の治世の初年には、大地震あり、皆既月蝕あり、大雨の田園に氾濫するあり、旱魃の收穫を害するあり、最後に蝗蟲簇生して恐る可き損害を與へたり。這般の現象殊に彗星の出現は支那人蒙古人の間に甚しく恐怖を起さしめたり。即ち之を以て天子たる皇帝又は皇帝の政務を分擔せる官吏等が或は非難を受く可き行爲に出で、或は管轄せる人民の幸福を進捗するを怠りて、天譴を招ける象徴なりとなせり。曩に八達治世に於て蒙古人出身の丞相は旱魃久しきに亙り且彗星出現せるより、天意は明かに要路に當れるものに、曠職の點あるを以て之を罰せんとするに外ならずとて、辭職を乞ひたり。時に皇帝は事豈に汝輩に關せん邪とて之を許さざりしが、一三三四年の天災は碩德八剌、拜住君臣を暗殺せるが爲なりと見做されたり。也孫鐵木兒は政府にありて天譴を招けるは何人ぞやと下問したり。有司百官は乃ち威望高き平章政事張珪をして上奏文を起草し最も痛切に改革を要する弊政數條を指摘せしめたり。張珪は先づ冒頭に於て鐵失の行へる弒逆に對し法律上の處分の徹底せんことを乞へり。鐵木迭兒の子、鎖南の財産一旦官没の宣告ありしも未だ沒收されず、鎖南の諸子は法律上追放されその財産を官沒さる可き筈なるに資縁して再び宿衛に入り、鐵失の共犯として有罪の宣告を受けたる宗族諸王は須らく之を死刑に處

す可きに僅かに流謫の刑に行はれたるに過ぎずと訴へたり。かくて罪ありて而も刑罰を免れたるものを多く列擧せる後張珪は人民の汗の成果たる國庫の財寶がその價値の十倍も劣れる外人の齎らせる寶石の代償として支給さるるを歎じたり。かくて坊主、喇嘛、道士等の佛に對して祈願を籠め犠牲を供へたるより以來、天は暫くもその怒の象徴を示さざるなしと稱し、若しその宗教を廢し僧侶を追ふにあらずんば、更に大なる不幸の到來を期待せざる可からずと云へり。又宮中には宦者、女紅、大醫、陰陽師等遊惰の民夥しく、之が給養に要する國費鉅額に上れるを訴へたり。又右丞相鐵木迭兒の在職當時及び鐵失の陰謀計畫以來行はれたる非道の政事を改め、犠牲者の遺族に對して賠償するの必要を説きたり。かくて監獄を視察し都鄙の實狀を査閲すべしと云ひ、最後に廣東地方の眞珠採收が毎年多數の人命を失ふにより之を禁止せんことを乞へり。皇帝はこの上奏文を一讀せしも何等の命令をも發せざりき。

イ、ロに據る。

喇嘛は實に宮廷に於て絶大の勢力を振ひ、殊に後宮に於て重用せられたり。その往來するや官符を受けて驛馬を徵發し、沿道の住民は更に之が食料給與の義務を負ひしより、その頻繁なる往來は大に地方の煩累を増せり。據る。地方窮乏の状態を巡視し之が救濟策を講ず可しとの命を受けて陝西方面に派遣されたる一官吏は、その報告に於て同地方の疲弊は主として、西僧即ち喇嘛が皇帝の保護を利用し容赦なく人民を抑壓するが爲なりと斷じたり。曰く『視察する處に依るに、

西蕃の僧は金字の圓符を佩び、道途に絡繹し馳騎百を累ね傳舍容るる能はざるに至れば、則ち館を民間に假り、因て男子を迫逐して婦人を姦汚す。而も驛戸は控訴する所無く、臺察は誰何するを得る莫し。且國家の圓符を製するや本と邊防警報の虞あるが爲なり。僧人何事ぞ輒ち之を佩ぶるとは。乞ふ僧人給驛の法を更正し、且令して以て糾察するを得ん」〔この報告の引抄は宋元通鑑に依れず。〕と。皇帝はこの報告正確なるを認め、喇嘛の支那に入るを禁じたり。據る。

この無能の皇帝は支那名を泰定帝と呼べるが、一三二八年八月齡三十六歳にして上都に崩御したり。四子ありて長子羅閣畢迦 Radchapika 是れ薩囊薛珍に見えたる名也、シユミットは梵語な〔欽定蒙古源流卷四、第二行、三十六歳の次に及、嗣曲律汗之長子、羅閣畢迦汗、庚子〕は時に年九歳にして曩に皇太子に立てられしも、その帝位相續の權は争はれたり。初め八達の兄海山の位を襲ふや、姪の一人を立てて皇儲と爲し之に位を讓る可しとの條件ありしも、而も豫め海山の二子和世球及び圖帖睦爾 Temour を朝廷より遠けて、實子に皇位を傳へたり。碩德八剌に對する弒逆の計畫ありし當時、兄はタルタリに弟は南方支那に在りしを以て、也孫鐵木兒は容易にその不在を利用して帝位を奪ふことを得たりしなり。

也孫鐵木兒の崩ずるや、皇后は使を大都に遣し、平章政事烏伯都刺 Orpetoula に命じて百司の印章を收め掌らしめんとせしに、大都を留守せる僉書樞密院事、燕鐵木兒 Yang-temour は

海山の皇子を擁立せんとする黨派の首領なりき。燕鐵木兒は軍事上の天才として名高かりし牀元兒の子にして父祖の功に依りて重用せられ、海山の時正奉大夫、同知宣徽院事に擧げられたり。燕鐵木兒は海山に愛幸されしより、値遇に感じてその皇子の爲に盡さんことを思へり。也孫鐵木兒は數月前上都に向て出發するに方り、之に帝都の留守を命じたり。茲に於て燕鐵木兒は興聖宮に大官を集めて海山の皇子を戴きて皇帝に推さんことを提議し、この決議に反對するものはすべて脅すに死を以てしたり。かく宣言せる後烏伯都刺その他の大官を拘引し之に代ふるに腹心の徒を以てしたり。軍隊も亦その眞意の那邊に在るやを知らず集合の命令に従ひしに、膝を屈して南方に向て叩頭す可しとの號令は下れり。燕鐵木兒はこの儀式によりて、當時江南の首府南京に流寓せる圖帖睦爾を皇帝に擁立するの意志を軍隊に知らしめたるなり。而して公子に向ても使を派して速かに北上せんことを乞ひ、一般に對しては公子も亦その兄和世球も共に纏て來着す可きことを聲明したり。據る。

成吉思汗統の諸王三人は燕鐵木兒の傍若無人の態度を怒り、大官十五人と謀りて、之を誅せんとせしが、謀洩れて却て悉く殺されたり。〔宋元通鑑には上都諸王滿禿等十八人、同謀附燕帖木兒、事覺悉誅之とあり、本文は誤譯と思はる。〕然るに皇帝は上都に在りて皇子阿速吉八を位に即かしめ、甘麻刺の孫梁王王禪 Yantsin を平章政事 (premier ministre) と爲し、康里人より出でて右丞相となりし脫脫 Toto の子、塔失帖木兒 Taché-te-

mour を軍司令官と爲し、之に命令を與へて燕鐵木兒に對して進ましめたり。而して燕鐵木兒は上都との交通を斷たんとして兄撒敦 Satun に居庸關を、子唐其勢 Tangkitchi に古北口を占領せしめたり。

懷王圖帖陸爾は大都に入りて政柄を收め(九月)、百官を任命し、平章政事烏伯都刺を殺し左丞朶朶 Toto その他燕鐵木兒の禁錮せる人々を流竄せり(十月)。燕鐵木兒は圖帖陸爾に對する帝都人心の歸嚮、熱烈なるを見、之に乗じて帝位に即かんことを逼りしも、長兄和世球は多年タルタリーの軍務に服し帝國の爲に盡瘁せること大なれば當然帝位に即く可く、その來着を俟て之に政權を交附せんとするの外他意なしとて、勧誘に應ぜざりき。茲に於て燕鐵木兒は帝位定まらずんば不平の徒之に乗じて事を起さんとするの慮ありとて、公安の爲速に即位するの必要あることを切言せり。かくて圖帖陸爾は遂に之に同意せしも、詔を發して、已むことを得ずして帝位に即けるに過ぎず、謹で大兄の至るを俟て固讓の心を遂げんと聲明したり。

即位式了りて、燕鐵木兒は軍を遼東の境上に進め阿速吉八の黨與也先帖木兒の指揮せる一軍を伐たんとせり。〔元史燕鐵木兒傳には即日詔將兵出薊州拒禿滿迭兒、乙〕偶々王禪來て居庸關を攻めて之を奪へりとの報に接し、軍を班して之を破りタルタリーに退却せしめたり。支那の中心の地に於ても亦阿速吉八に黨して武將の兵を起せるあり。曾て御史臺臣たりし帖木哥 Temoukou は重兵を

擁して南方より河南に向て進み、靖安王、闊不花 Kokoha は陝西省の兵に將として潼關の險を奪ひ、陝西行臺御史大夫、也先帖木兒 Yesien-temour は同省に於て阿速吉八即位の事を公布せる後帝都に向つて進軍し、之を距る四リーグの通州を陥れ、將に大都を圍まんとせり。然れども燕鐵木兒は能く主君に反抗せる諸將に當り、也先帖木兒を攻撃してその軍を寸斷せり。

燕鐵木兒の叔父不花帖木兒 Borca-temour は東路蒙古元帥として遼東の境上に在りしが、圖帖陸爾即位の報を得て齊王月魯帖木兒 Yuelou-temour を誘ひて共に部下の兵を合し十一月進んで上都を攻撃したり。この帝都の守備に任せし左丞相倒刺沙 Taolacha は阿速吉八の諸王大臣と共に數々開城突撃を試みて包圍軍を破りしも、遂に策の施す可きなく、出でて敵營に投じ、阿速吉八の御璽を之に交附したり。幼帝は崩御せしもその最後を詳にせずと云ふ。帖木哥翰赤斤の後裔にして遼王たる脱脫 Toto は害に遇へり。月魯帖木兒は上都の主人となり皇帝の寶を獲て、母后と左丞相倒刺沙と也先帖木兒その他の著名なる多數の捕虜とを大都に送れり。皇后は北直隸の東安州に追放され、倒刺沙、王禪、也先帖木兒以下この黨派の重なる人々は死罪に行はれたり。

阿速吉八は支那にては之を天順帝と稱せるが、その悲惨なる最後に就ての報道は、支那の各省に於て圖帖陸爾に反抗して同盟せる諸王大官をしてその兵器を收めしめ、而して圖帖陸爾は重立

たる將校數人を沙漠シヤモの北なる和世琿クシヤコの許に遣りて政變の顛末を報告し、且南歸して帝位に即かんことを切望したり（十二月）。

和世琿は恰も危惧せるものの如く徐ろに南進し、和林附近カラグルムに至りて皇帝の位に即けり（一三二九年二月）。圖帖睦爾は燕鐵木兒ヤンチムールに命じて皇帝の璽寶と玉袍と裝飾物とを之に齎さしめたり（四月）。和世琿は燕鐵木兒に優遇を與へ、その辭し去るに方りて、皇弟の敍任を悉く允准す可しとの意を傳へしめたり。之と同時に新皇帝も又宦臣を選敍し、その一人に命じて燕鐵木兒ヤンチムールと同行して皇弟を擧げて皇儲と爲すとの意志を致さしめたり。

圖帖睦爾は燕鐵木兒ヤンチムールを從へて上都シヤンツに向ひ、この都城を距る小距離の地に於て皇帝に謁したり。この會見の後數日、和世琿は突如として崩御したり。これ全く毒殺ならんとの風説は傳はり、嫌疑は燕鐵木兒の上に罹りたり。和世琿は齡三十歳にして諡して明宗ミンツォンと云へり。その崩後一週日にして、圖帖睦爾は再び皇帝の位に陞りたり。

圖帖睦爾の治世は短日月に過ぎずして、傳ふるに足るの事實は唯、雲南統治の任に當れる諸王禿堅ツキキエン Tonkien の叛亂あるのみ。但し禿堅は親ら雲南王と稱せしも、その僭上の計畫は翌年兵力によりて威壓せられ了ぬ。

圖帖睦爾は熱心なる佛教信者にして、鉅額の國帑を投じて佛寺の再建を爲せり。又畏兀兒ウイグルの地

方より有名なる喇嘛、鞏眞吃刺思 Nientchinkilas を聘して之を帝師と爲し、その至るや朝臣一品以下に命じて咸な郊迎せしめ、之と語る毎に必ず膝を屈せしめたり。大臣等は之に従ひ俯伏して之に觴を進めしに、帝師は傲然として之を受けたり。國子祭酒はその不遜を怒りて立て之に觴を進めて、帝師は釋迦の徒にして天下僧人の師也、予は孔子の徒にして天下儒人の師也、請ふらくは各禮を爲さざらんと云へり。帝師は乃ち笑て起ち、觴を擧げて卒飲したり。口に據る。皇帝よりかく敬重されしに拘らず、喇嘛の徒、畏兀兒人等は蒙古の豪族と共に陰謀を企て、阿難荅アナンダの子月魯帖木兒ユエルチムールを帝位に戴かんとせり。陰謀は暴露し、罪犯は月魯帖木兒を併せて死刑に處せられたり。

皇帝は又、儒者にして心服せば支那人の平和的服従を保證し得可きを認め、之を籠蓋せんと欲し、孔夫子の父母及び重なる弟子等に新に尊稱を授けたり。

即位の初めに方り、皇帝は又一日翰林國史院に臨み、支那史上の各節に就て史官と暫く意見を交換したせしめたり。皇帝は又一日翰林國史院に臨み、支那史上の各節に就て史官と暫く意見を交換したる後、一身上に關して如何に記述されたるやを知らんと欲し、治世の實録を藏せる櫃を開かんことを命じたり。隨從の官吏は之が搜索に着手せしも、國史院の大官等は敢て之に反對せざりき。然るに屬僚の一人呂思誠 Liusetching は進んで皇帝の足下に俯伏して、國史院は嚴正に善惡となく皇帝諸王大官の行爲を記録するを以て神聖なる義務と爲せるが故、往古より何れの帝王も

未だ曾て國朝實錄の祕庫を發きたるものなし、況んや我が治世の實錄に於ておや、切に望む皇帝の慣例違反の俑を作さざることをと苦諫したり。かくて圖帖陸爾も遂にその命令を固執せざりき。専ら快樂に耽り、政權を擧げて右丞相燕鐵木兒に託せしが、この皇帝は一三三二年九月、二十九歳を以て上都に崩御せり。諡して文宗と云へり。

圖帖陸爾は遺詔して和世球の皇子を立つ可しと命ぜしも、燕鐵木兒は皇后不荅失里 Poutaché-
 II に向てその實子を奉戴せんことを諮れり。蓋し圖帖陸爾は深く右丞相を愛し、皇子女納答刺 Courou-dara を之に託してその邸に於て養はしめ、且その名をも燕帖古思 Yang-tekouss と更め、而して燕鐵木兒の子、塔刺海 Tarakai を以て之に代へ宮中に於て實子の如く育てたり。然るに皇后は圖帖陸爾の遺詔に隨ひ、和世球の第二子にして齡七歳なる額琳沁巴勒 Rintchenpai をして皇帝たらしめんとし、その即位を公布して攝政となり、撒迪 Sati は中書平章政事と爲れり。されど額琳沁巴勒蒙古源流に據る、シヌミットは西藏語なりと云ふ。イ、
 ロには斡璦質班 Ilincheban へには Yéchéhé とあり。は身體虛弱にして十二月を以て崩御し、諡して寧宗と云へり。

茲に於てか燕鐵木兒は新に燕帖吉思の爲に運動する所ありしも、皇太后はそのなほ幼冲なるを唱へて之に反對し、皇帝圖帖陸爾が和世球に向て帝位をその子に譲らんと約せしことを想起せしめ、且既に使節を廣西なるその長子妥懽帖陸爾 Togan-temour の許に遣して、速に帝都に來ら

んことを求めたりと告げたり。この公子は時に十三歳なりき。

皇太后不荅失里は圖帖陸爾治世の初に方り、和世球の皇后、八不沙 Papoucha を殺さしめ、皇子妥懽帖陸爾を高麗の一島嶼に竄流して何人と雖も之に近くことを得ざらしめたり。一歳を閱して後、妥懽帖陸爾は正統の皇儲たるより追放されたりとの風説傳りたるより、圖帖陸爾は天下に詔して、和世球の蒙古に滞在するや子なかりしを以て、妥懽帖陸爾はその子にあらずと云ひ、且高麗より歸らしめて、之を廣西の靜江（桂林府）に移したり。

三 燕鐵木兒は諸王大官と共に殊に大都の南數リーグに位せる良郷リヤンヒヤンに赴きて妥懽帖陸爾を迎へたり。然れども皇子をはじて隨行員より冷遇されたるを不快と爲し、速に即位式を舉行せざりき。妥懽帖陸爾曩の過てるを悔ひ、燕鐵木兒の女、伯牙吾氏 Peyaoui を納れてその心を和げんとせり。而も間もなく燕鐵木兒は病に仆れたり（一二三三年四月）。圖帖陸爾の即位以來帝國に於て威權双ぶものなかりしより、燕鐵木兒は也孫鐵木兒の皇后の寡居せるを取て夫人と爲し、宗室の女子四十人に尙して之を妾となすをも憚らざりき。その死期は全く荒淫によりて速められしが、之が爲に和世球の皇子は帝位を鞏固にするを得たり。皇太后は百官を従へて上都に至りて圖帖陸爾の遺詔を發表し、妥懽帖陸爾は皇帝の位に即けり。大官等は皇太后の要求を容れ、皇子燕帖古思の皇帝に次で帝位を履む可きことを誓約したり。

第七章 (惠宗紀)

新皇帝は唯遊惰の生活に傾けるのみなりき。伯顔 Poyen は太師中書右丞相に、撒敦は、大傅左丞相に任ぜられたり。間もなく燕鐵木兒の長兄撒敦死して、燕鐵木兒の長子唐其勢を以て之に代へて中書左丞相と爲せり。即ち皇后伯牙吾氏の同胞なり。蓋し妥懽帖陸爾は勢力ある燕鐵木兒の一族を股肱と爲さんと欲してその女を納れて皇后となせるなり。然るに短慮なる唐其勢は伯顔が重要な政務を専決せるを怒り、皇帝蒙哥の孫にして昔里吉の子なる晃火帖木兒 Hoang-ti-temour を擁立せんとして陰謀を企てたり。陰謀者のうちには唐其勢の弟塔刺海、その叔父答隣答里も加はりしが、伏兵を以て上都の宮城を襲ふて之を奪はんとせり。伯顔は宗族の一公子により陰謀の企てあるを聴き、幾先を制せんとして宮中に於て唐其勢兄弟を拘引す可しとの命令を與へたり。唐其勢は聊か抵抗を試みしも直ちに殺されたり(一三三五年八月)。塔刺海は走て姉なる皇后の座下に匿れたり。皇后は之を蔽ふに衣を以てせしも效なかりき。將校は之を追ふてその室に至りしも皇后は之を制止する能はず、遂にその面前に於て之を斬れり。而も皇后の運命も決して幸福なるを得ざりき。伯顔は妥懽帖陸爾より之を殺す可しとの命令を得て、之が執行の任に

當れり。皇后はその室に入り來れるを見て直ちにその眞意を看破し、走て妥懽帖陸爾の膝下に俯伏し助命を乞へり。皇帝はその涙に心を動かさるることなく、汝の叔父汝の兄弟共に逆謀を企つ、豈能く保護するを得んやと云へり。即ち皇后を遷して宮を出でて民舎に入らしめ、伯顔之を酖殺せり。答隣答里は手に劍を執て防戦せる後、諸王晃火帖木兒の邸に匿れしも、捕へられて殺されたり。晃火帖木兒は自殺したり。名望あり且勢力ありし燕鐵木兒の一家はかくの如くにして仆れたり。

第

三

編

帝位の數々更り、宮中に革命絶へず、内亂起りて政府威望を失ひしより、支那人をして蒙古の桎梏を脱するの機到れりと思はしめたり。叛亂は同時に河南、四川、廣東の各省に爆發せり(一三三七年)。但し何れもその蜂起の初に於て壓抑されしも、朝廷は益々支那人出身の官吏を疑ひ、漢人南人には軍器を執り馬匹を養ふを禁じ、又蒙古字を學習することをも禁じたりき。蔑兒吉姆氏なる伯顔は専制權力を揮へり。その極敢て皇帝の允准をも經ずして、成吉思汗統の公子一人を殺し二人を追放したり。〔草木子曰、天下死囚審讞已定、亦不加刑、皆老死於圜、自後惟秦王伯顔、出天下囚、始一加刑、故七八十年之中、老稚不識斬戮、及見一死人頭、輒相驚駭。〕殘忍にして野心に富み、貪婪にして豪奢を好み、衆の怨府と爲れり。皇帝は左右にあるもの悉くその腹心の徒なりしよりその非行を知らざりしも、伯顔の姪にして宿衛の一人たる托克托噶 Toktagha は進んで之を皇帝に密告したり。茲に於て伯顔を除くの策は祕密に計畫せられてそ

の成功を期したり。即ちその畋獵の一行に加はらんとして都門を出でたるの機會に乗じて、之に参加せしめずして直ちに支那の南部に追放したり（一三四〇年）。但し伯顔は途上に於て病死したり。托克托噶の父なる伯顔の弟、馬札兒台 Matchartai 代て太師中書右丞相に任ぜられたり。

この年妥懽帖陸爾は祖宗の靈廟より圖帖陸爾の神主ロの校訂者の註に、この神主とは通常長さ一尺餘、幅五寸の木片にして故人の氏名諡號と誕生死亡の年月とを記しあり。例祭はこの神主の前に之を行ふ、支那人は故人の靈、神主に宿ると思へるなりとあり。蒙古皇帝の神主は銀製のあり。一三四六年六月盜あり帝室の太廟に入りて銀製の神主を奪ひたるものあり、曠古の不敬事件なりと支那史に見ゆ。を撤し、皇太后を宮中より放逐し、從來皇儲の待遇を與へし燕帖古思を高麗に流竄したり。この苛酷なる處置に就ては次に掲ぐる詔に於て歴史上の事實に基きてその理由を辯明したり。

『昔、皇帝海山昇遐せし後、太后の奸臣に惑はされたる爲、皇考和世球汗は出されて雲南に封ぜられたり。碩德八剌汗の害に遭ふや、我が皇考は皇帝海山の嫡子たるより、逃れて沙漠に居りしも、宗王大臣は同心して翊戴したり。時に地の近きを以て先づ迎へしより圖帖陸爾汗は暫く機務を總べしも、繼で天理人倫の在る所を知り、讓位の名を假りて寶璽を以て來り上りたり。皇考誠を推して疑はず、即ち授くるに皇太子の寶を以てしたり。然るに圖帖陸爾汗は惡を稔みて悛めず、當に躬ら返ふ可きの際に、其臣、月魯不花 Yuelou-bouca 也里牙 Yeliya 明里董阿 Min-litona 等と謀て不軌を爲し、我皇考をして恨を飲んで上賓せしめたり。歸て再び宸極に御し、又私に子に傳へんことを圖り、乃ち邪言を構へて禍を八不沙皇后に嫁し、朕は皇帝和世球の子に

非ずと云ひ、遂に出でて遐陬に居らしめたり。上天佑けず隨て殞罰を降せり。叔嬪不答失里はその勢焰を恃みて長嫡を捨てて次幼を立てたり。奄ち復た年ならずして諸王大官は賢なるを以て長なるを以て朕を扶けて踐祚せしめたり。毎に念ふに治は必ず孝を盡すに本き事は名を正すより先なるは莫し。天の靈に賴て權奸屏黜せられ、孝を盡し名を正すを、復た緩なるを容さず。永く鞠育極りなきの恩を惟ふ、共に天を戴かざるの義を忘るるに忍びんや。其れ太常に命じて圖帖陸爾の廟に在るの主を撤去せしめ、不答失里は太皇太后の號を削りて東安州に徙して安置し、燕帖古思は之を高麗に放ち、當時の賊臣明里董阿等なほ存命せるものは明かに典刑を正せ』。

燕帖古思は高麗に赴くの途上に於て護衛のことに任ぜる月闡察兒 Yüé-kousar に害されたり。皇太后不答失里は東安州に徙されて後間もなく崩じたり。馬札兒台は當初よりこの苛酷なる處分に反對なりしが、世人が輔弼の臣を非難せんことを恐れて辭表を捧呈して裁可を得たり。その子托克托噶蒙古源流に據る。イ、ロ。は右丞相、鐵木兒不花は左丞相として之に代りたり。

遼、金、宋三史の完成せるはこの頃のことなりき。初め忽必烈は治世の初めに方りて保存されたる官府の實錄に基きて遼金二史の編纂を命じ、次で宋の亡ぶるや、更に史官に命じて通じて三史を修めしめたり。而もこの事業は忽必烈并に以後の皇帝の命令ありしにも拘はらず閑却せられ、妥懽帖陸爾即位の當時にありても未だ毫も進捗せざりき。茲に於て皇帝は一三四三年右丞相托克

托噶を都總裁となし、平章政事鐵木兒塔識 Temour-tasch 翰林學士歐陽文 Cheou-yang sien 等を總裁官と爲し、爾餘の學者と共に編纂のことに當らしめしに、その努力によりて三史成れり。今之を繙くに何れも章を分て各種の曆を説き天文觀測の方法を論じ名士の列傳を載せ、當代學者の公刊せる著書の目錄を擧げ殊に宋史の藝文志はすべての問題に關する支那の書目を分類して一目の下に示せり。最後に三史には外國の國勢に關する記事あり、又三帝國に朝貢せる諸國の詳細なる記事をも含めり。イに據る。

皇帝圖帖陸爾は即位の後間もなく一三二九年に於て翰林國史院のあまたの蒙古學者に命じて蒙古の舊慣、祖宗の聖訓逸事を采輯して唐宋會要に準じたる書籍を編纂せしめたり。この書は先づ蒙古語にて成り、次で支那語に翻譯され題して經世大典と呼べり。Cordellieri はこの書は未だ之を見ることを得ざれど蒙古の大史に引用せるを見れば蒙古の起源制度征討地理等に關して貴重なる資料を多く含めりと見ゆと云へり。

是より先數年碩德八剌の在位中大元通制と題し、元朝立國以來發布せる法律を纂集し二千五百三十九條と爲し天下に頒行したり。ロに據る。又翰林國史院は一三〇三年を以て皇帝帖木兒に、成吉思汗、窩闊台、貴由、拖雷、蒙哥の實録を進めたり。これ貴重なる書籍にして前編 Tsen-pien と題せり。イに據る。

托克托噶は在職三年の後政務に倦み辭職を聽許せられたり(一三四四年)。後任者を奏請せよ

との詔に對して成吉思汗四傑の一なる博爾朮四世の孫、阿魯圖 Aloutou を推薦せり。然るに阿魯圖は馬札兒台、托克托噶父子を追放したり。海山の命を以て死刑に處せられたる左丞相、阿忽台の子別兒怯不花 Pierkié-bouca は一三四七年阿魯圖に代て右丞相と爲りしが、在職朞月にして罷められたり。その後任と爲れる朵兒只 Tountchi の推輓によりて左丞相となれる太平 Tai-ping の斡旋にて托克托噶は召還されしも馬札兒台は配所に於て不歸の客と爲れり。托克托噶は臆て皇帝の眷顧を回復し、之に乗じて太平を免職して郷里に歸らしめたり(一三四九年)。

この間支那南部諸省に於ける叛亂は漸くその地歩を占むるに至れり。一三四一年には二人の叛徒あり、湖廣に兵を擧げて數城を奪へり。山東の民心も動搖し、匪徒は他の諸省をも劫掠したり。海賊の一人方國珍は浙江、江南の沿海州郡を掠め、江河を溯航しては都市を屠り、商業に打撃を與へ、殊に米穀その他の商品を積んで大都に至らんとするの商船を遮つてその北上を妨げたり。蒙古人はこの當初の叛亂を蔑視せるものの如く、隨て騷擾は忽ちにして蔓延したり。之を激成せんとするものは巧みに一三五年を以て政府の計畫したる大工事を利用せり。黄河の數々堤防を決潰して氾濫を來し損害甚しかりしより政府はその故道を開鑿するの議を決し、延長二十八リ一ガに互れる水路の疏鑿を行ふこととなれり。この工事に従事せる兩岸の兵民は其數七萬人(宋元通鑑には七萬とあり)以上達したり。叛徒はこの庸役に服せる勞働者の一部并に他地方に於て徵發され

たる者の多數を誘ふて同志に加へ、而してこの工事費支辨の爲に賦課せられたる新税は益々不平を甚しからしめたり。〔草木子曰、至正庚寅間、參議賈魯、以當承平之時無所垂名、欲立事功於世、首勸脫丞相、開河水運暴擾都城、遂止、又勸其造至正交鈔、格幣惡、用未久、輒腐爛、不堪倒換、遂與至元寶鈔俱滯不行、物價騰貴、及河決南行、又勸脫相、求夏禹故道、開使北流、身專其任、潁河起集、丁夫二十六萬餘人、朝廷所降食錢、官吏多不盡給、河夫多怨、韓山童等因挾詐、陰鑿石人、止開一眼、鑄其背曰、莫道石人一隻眼、此物一出天下反、預當河道埋之、掘者得之、遂相爲驚詫、而謀亂。又曰、方國珍、台之廣岩人、其居有山、在中曰洋嶼、嘗有童謠云、洋嶼青、出賊精。〕

時に韓山童なるものあり、民心の動搖せるに乗じて彌勒佛下生して支那人を援けて蒙古人の壓抑を脱れしめんとすとの流言を放ち、山東、河南、江南地方に於て叛亂を煽動したり。然るに叛徒の領袖輩はかかる空疎なる流言の忽ちにして信用を失ふ可きことを豫想し、更に詭て韓山童は宋の帝室より出で徴、宗皇帝第八世の孫なりと言へり。乃ち白馬烏牛を刑して忠誠を誓ひ、紅巾を以て叛徒の符號と爲せり。而も自稱趙氏は永く勢力を保つ能はず、蒙古兵に攻撃されて捕虜と爲れり。されどその妻楊氏とその子韓林兒は追撃を免れて所在を暗ませり。〔草木子曰、徐州盜韓山童、詔略曰、蘊玉墜於海東、取精兵於日本、貧極江南、富誇塞北、蓋以宋廣王走瑩山、丞相陳宜中走後、托此說以動搖天下。又曰、汝寧盜韓山童男陷汴梁、僭稱帝、改韓爲姓、國號宋、改元龍鳳。〕

紅巾賊一に紅軍は毫もこの最初の敗北に屈せず、その首領劉福通は江南の數城を奪ひたる後大兵を擁して河南に入れり。他の叛徒も亦旗下に江南、湖廣の不平の徒を糾合し、同じく紅巾を以て符號となせり。その一人なる除壽輝は湖廣の蘄水を都と爲して皇帝と稱し、國號を天完と定めたり。〔草木子曰、蘄州盜徐貞一叛、徐本湖南人、姿狀醇厚無他長、生平以販布爲業。〕蒙古の諸將は微弱なる抵抗を試みたるのみにて長江

灌域の諸省より撤兵したり。偶々彗星の出現するありしかば、不平の徒は直ちに是れ安權帖陸爾滅亡の前徴なりとて流言を放てり。政府は學識優れて支那人の間に勢力ある儒者を懐柔するの必要を感じたり。かくて江南諸省の支那人をも臺省の職に任用す可しと命じたり(一三五二年)。蓋し南人はこの時まで商業學問に従事し得たるのみなりき。朝廷は河南の紅巾賊に對しては右丞相托克托噶の弟樞密院事也先帖木兒 Yesien-temour の指揮せる一軍を派遣し、且警戒を加へて宋の帝室の後裔なる瀛國公子趙完普をタルタリーの沙州に徙し、警護の武官に命令を與へてその外人と交通するを禁じたり。これ叛魁の多數が非望を蔽はんとして、この公子をして祖先の位を回復せしむるの外他意なしと託言せるが爲也。

この間除壽輝は兵士をして存亡を共にするの念慮を起さしめんとし、占領せる城市の掠奪を縦にし、その兵力は益々振へり。即ち湖廣に於ては漢陽及び武昌府を(一三五二年)、江西の北部に於ては九江を陥れ、浙江省參政樊執敬を破て宋の舊都杭州を略したり(八月)。されど濟寧路總管董搏霄江を渡て之を圍み、血戰數回の後之を克復したり。

也先帖木兒は劉福通に破られて開封府に退き、平原地方を擧げて叛徒に委したるを以て免職となれり。間もなく叛徒の勢益々盛なりしより、兄托克托噶は遂に意を決して往きて河南軍を指揮せんとし許可を皇帝に乞へり。かくて徐州附近に於て叛徒を破りしが、江西省の平章政事星吉

Sing-ki. は湖口附近に於て徐壽輝の部將趙普勝と會戦し兵敗れて戰死したり。

方國珍は依然として北直隸に至らんとするの船舶を奪ひ、かくして南方諸省の商品貢賦の北上を妨げて大都の供給を斷てり。又征討に向へる台州達魯花赤、秦不華 Tai-bouca を給きて之を殺さしめたり。而もなほ朝廷はこの海賊の巨魁と和解せんことを欲し、浙江左丞、帖里帖木兒 Tielitemour に命じて之を交渉せしめたり。方國珍は二人の兄弟と共に五品の流官に敘せらるれば、其船を納め徒衆を解散せんと約束したり。帖里帖木兒はこの代償によりてかかる厄介至極なる海賊を解兵せしむるの得策なるを認め、浙江の徽州、廣徳、信州三路に於て三兄弟に各々中州治州の職を與へたり。然れども海賊の巨魁が誠實ならざりしか將た政府の眞意を疑ひしか、知州の任命を受くるを拒みて再び海上に走れり。

間もなく他の叛徒張士誠は江南に現れ(一三五四年)、〔草木子曰、高郵盜張九四叛、張爲鹽場綱、其部下の事に糾合せられたるものなりしにも拘はらず、征討の命を受けて之に向へる達識帖陸邇 Tarchetennour の兵を全く撃破したり。茲に於て托克托噶親ら張士誠を攻めて之を破り、その曩に奪ひたる城市を克復せり。〕

右丞相托克托噶の外に在りて皇帝の敵を掃蕩しつつありし際、平章參事哈麻 Hamma は即ち之を失脚せしめんと圖れり。哈麻と弟、雪雪 Süesüé とは土耳其種の康里人にして擧動不作法な

りとの悪評ありしも、妥懽帖陸爾の腐敗せる朝廷に於ては有力者と爲れり。哈麻は努めて皇帝の淫慾に媚びんとせり。托克托噶の政權を握るや、その不道德の極めて有名なりしにも拘はらず之を重用して右丞と爲せり。纏て哈麻は高麗の公主にして皇帝の寵を一身に鍾め、且皇太子の生母たる奇皇后の援助を受けて托克托噶の眷遇に俟つの必要減ぜしより、日毎に妥懽帖陸爾に對する勢力を増し、宮中に集むるに無頼の青年并にあらゆる房中祕密の法に通せる吐蕃の喇嘛等を以てして皇帝の淫樂を助けたり。哈麻の使喚によりて監察御史等は托克托噶を彈劾して軍費を私用に充て又は徒に士卒に分配したりと云へり(一三五五年一月)。托克托噶は官爵を削奪されて淮安に謫流され、且軍隊の司令權は之を大尉平章政事月闊察兒 Ynekoutchar と知樞密院事雪雪とに引渡す可しと命ぜられたり。

この間曩に皇帝と稱し夙に湖廣の首府武昌を奪へる徐壽輝は沔陽地方を略取せんとしこの任務を部將倪文俊〔草木子曰、沔陽盜倪文俊號蠻子、聚衆從爲亂、倪世以漁業居黃州黃陂、及徐僭號倪爲僞相。〕に託したり。湖廣の鎮將たる威順王はその子報恩奴 Pounou に命じて之に反對せしめしが、船隊吃水深くして漢川に至るや水淺くして船擱し、叛徒は、火筏を以て之を燒くを得たり。報恩奴は部下の多數と共に戰死し、倪文俊は沔陽を奪へり。翌年は更に襄陽を陥れ、蒙古の元帥、朵兒只斑 Touritchipan を破て陣斬し以て中興路を略せり。

南部各省に於ける戦敗は地の隔在せるが爲、朝廷を動かすこと少かりしが、河南の叛徒は數々黄河の北方に侵略を試みて痛く之を驚かしたり。かくて援兵は山西、河南、山東各省に派遣せられたり。

河南の紅巾賊魁劉福通は黨與を増加せんことを思ひて、韓山童の子韓林兒を宋帝に立てたり(三月)。この皇帝は明王と稱し、河南の亳州を以て帝都と爲せり。蒙古朝廷は宋朝の名稱が支那人に敬愛されてその熱誠を喚起せんことを憂へ、年少皇帝を征伐せんが爲、遽に答失八都魯 Tatché-pahadour をして一軍に將として之に向はしめたり。然るに答失八都魯は許州附近に於て叛魁劉福通に破られたり。第二軍に將たる劉哈刺不花 Tieouhala-bouca は答失應援の任務を帯びしが、その敗報に接するや、劉福通を攻めて之を破るを得たり。この戦勝の行賞として答失はその職を奪はれて劉哈刺不花司令長官と爲れり。茲に於て直ちに亳州に進みて劉福通の迎へて戦へるを再び破れり。劉福通は皇帝を奉じて安豐の方面に遁れたり。〔元史本紀に據るに至正十五年、六月癸酉、以四川行省平章政事答失八都魯、爲河南行省平章政事。十二月、答失八都魯大敗劉福通等于太康、遂圍亳州、僞宋主通于安豐とあり。又劉哈刺不花傳には、答失八都魯雖以平章政事總大兵、而哈刺不花功名與之相埒とあるのみにて答失八都魯に代て司令長官となるとの本文の記事何に據るを知らず。〕

托克托噶の免黜の後哈麻は中書左丞相に拜され、雪雪は御史大夫に拜され、國家の大柄は盡く其の兄弟二人に歸せり矣。今や恐る可きは唯托克托噶の歸來にありしかば敢て之をその配所に鳩

殺せしめたり。而も間もなく帝國は壞頽し皇帝は獸慾に耽れるを見て、之を助長したるの責任輕からざるを悔み、弊政の進歩を防遏するの策を案じて、聰明にして思慮に富める皇太子を擁立せんと決心せしも、この逆謀は暴露して哈麻は流竄の刑に處せられ、反對黨の手に絞殺〔校者曰く、綱目には杖死とあり〕されたり(一三五六年)。

この時に方て他年一日蒙古人を支那より驅逐して有力なる帝室を興す可き人物は歴史上の舞臺に現れたり。これ即ち朱元璋にして、初め僧衣を脱して江南の叛魁郭子興の旗下に一兵卒として入營したり。曠て獨立して親ら一團の隊伍を率ゐ、その節度とその戦勝とは益々名聲を高め、來り投ずるもの漸く多かりき。進んで長江を渡りしに太平路に於ては人民簞食壺漿して之を迎へたり。南京、揚州、鎮江を奪へる後、朱元璋は江口附近にありて張士誠部下の占領せる常州を圍めり(一三五七年)。張士誠は一旦托克托噶に破れしも、蒙古兵の怠慢なる勝に乗じて追撃せざりしより、勢力を回復して江南東端の數城を陥れ、杭州の知行樞密院事、達識帖陸邇がその近づくに及びて撤退せるより浙江の首府たる同府城をも奪へり。然れども嘉興より來れる兵と戦て大敗し忽ち之を失ひたり。張士誠は常州の援兵に將として弟張士德を遣せしも破れて捕虜と爲れり。茲に於て書を朱元璋に寄せて弟を還附せんことを乞ひ、その臣下たらんことを約し、毎年巨額の穀物金銀を納附す可しと云へり。朱はその誠實を疑ひて、毫もこの提議に耳を傾けず、

攻めて常州を下したり。

北部にありては河南・陝西を蹂躪せる宋帝の黨與は陝西に於て同行省左丞察罕帖木兒 Tolas-artemour に破られたり。然るに宋帝の平章政事劉福通は既に河南の殆んど全部を有し、更に開封府を奪て之を帝都と爲さんとせり。その山東・山西兩方面に派遣せる兩部隊は甚しく劫掠を行ひたり。その一部隊を率ゐし白不信は陝西に入り、秦隴・鞏昌を陥れ鳳翔を圍みしが、察罕帖木兒は兼程之が救援に赴き白不信を襲ひて悉くその輜重を奪ひ、之をして去て四川に遁走せしめたり。

山東に向ふ叛徒の一部隊は同地方に於て數城を下して蒙古の將軍答兒麻亦兒 Taima-chei を破り、進んで同省の首府濟南を圍みし時、董搏霄は蒙古兵を率ゐて河南より來り叛徒をその城壁の下に破りたり。而もその一度去るや宋軍のこの部隊を引率せる毛貴は再び來て濟南を奪ひ、次で董搏霄と戰て之に克ち屍を戰場に曝さしめたり（一三五八年四月）。この戰勝の後毛貴は河間を奪ひ進んで大都の附近に逼れり。茲に於てか廷臣のうちには、皇帝須らく帝都を去る可しと説くものありしが、左丞相太平は之に反對し、同知樞密院事劉哈刺不花を柳林より招び毛貴を破らしめ、之をして濟南に敗走せしめたり。

劉福通は分遣隊の帝都威嚇に際して開封府を攻め、守將、竹貞 Tchoutchin の之を棄てて敗

走するに及びて入城し、この金の舊都に皇帝を迎へたり（一三五八年）。次で關先生と破頭潘とをして各々一隊の兵に將として黄河の北岸に渡らしめ、山西の大部分を劫掠せしめたり。關先生は遠く迂廻して遼東に達し首府遼陽を屠り高麗の國境に逼れり。歸途更に上都を攻めて之を陥れ、掠奪を行ひ忽必烈の建てたる壯麗なる宮城と共に全都を焦土と化せり。

南部にありては、徐壽輝は湖廣の殆んど全省并に江西の一部を占領せり。朱元璋は江南を本據とし、將に浙江の東部を征討せんと企てたり。偶々海賊方國珍は西にも張士誠あり南には福建を略せる陳友定ありて、腹背敵を受けしを以て朱元璋に投降せり、是れ蓋しその方正にして且仁慈あり仰ぎて以て主君と爲すの寧ろ安全なるを思へるが爲なりき。かくて軍隊の來るあらば浙江南部たる温州、台州、慶元の三郡を交附す可きを約し、質として次子方關を遣れり。朱は海賊の提言を信じてその子を還し、浙江を經略して建康（南京）に歸り、（一三五九年）新領土の行政に資するが爲分中書省を置けり。

朱がその基礎を鞏固にせる際、他の支那の兩帝は内訌によりて勢力を削げり。宋の勇猛毛貴は同僚趙均用に殺されしが、其黨續繼祖時に遼陽にあり刺殺の報に接するや直ちに南歸して益都に於て趙均用を殺し以て之に報ひたり。徐壽輝の部下に於ても軋轢は更に甚しきものありき。この天完朝開祖の一部將たる陳友諒は記憶す可き攻城戰の後漸くにして江西の東境なる信州

(廣信府) を陥れたり。蓋し守兵を指揮せる鎮南王子大聖奴 Tachinnou と畏兀兒の亦都護即

ち國王の後裔なる江東廉訪副使伯顔不花的斤 Beyen-bouka-tikin とは共に頑強なる抵抗を試み手に劍を握て戦死したりき。茲に方て徐壽輝は都城を長江に臨める漢陽より新征服地たる龍興(南昌府)に移さんことを思ひ、陳友諒が權力を制肘されんことを忌みて之に反對せしに拘はらず、漢陽を出發して途を九江に取れり、陳友諒は陽に出でて之を迎へんと稱し九江に至りしが、徐壽輝の入城するを見るや城門を閉し、而して豫め城西に埋伏せしめたる部隊をしてその禁衛隊を虐殺せしめたり。既に徐壽輝に對して活殺の權を握れるより、陳友諒は敢て之を殺さず且皇帝と稱せしめしが、而も之を拘禁して親ら漢王と稱したり。間もなく徐壽輝を挾んで東下して太平を攻め、その落城するや、船中に於て鐵櫓を以て打て之を殺したり(一三六〇年六月)。次で陳友諒は親ら皇帝と稱し、國號を漢と定めて(草木子曰、陳號漢、改元大義)九江に歸れり。

陝西行省平章政事察罕帖木兒は宋の部將の間に内訌あるに乗じて開封府に於て、劉福通とその奉戴せる皇帝とを擒にせんと計畫したり。先づその兵を三軍に分ち相互の連絡を保ちつつ行進して、三路より至りて同時に城壁の下に會し、突如として之を包圍せり、先づ糧道を絶ちて之を陥れんとし、廻らずに壘壁を以てし、その糧食の缺乏せるを知るや夜に乗じて總攻撃を試みたり。城壁を攀登して、激烈なる抵抗ありしも遂に都城を攻拔せるが、劉福通はかかる場合の混亂に乗

じて皇帝と共に脱走して再び安豐に據れり。

安豐帖陸爾は是より先一三五年を以て皇子、愛猷識理達臘 Ayour-schiri-dara を立して皇太子と爲し、その際大赦を行へり。既にして皇太子は生母たる奇皇后と謀り左丞相太平をして安豐帖陸爾に讓位を逼らしめんとせり。而もその同意を得ざりしより、乃ち之を失はんと企てたり。皇太子先づその腹心の徒の多くを或は牢獄に投じ或は死刑に處したり。太平は不敵なる陰謀奸策に對し到底抵抗するの困難なるを感じて退隱の決心を發表したり(一三六〇年三月)。茲に於てか政權は宦者朴不花 Papou-thoa 右丞相搠思監 Cho-sé-kien の掌裡に歸せるが奸佞なるこの二人は唯私腹を肥すことのみを圖り、皇帝をして全く時局の推移を知らざらしめたり。この時に方り蒙古の兩將の間に確執起り、遂に互に武器を執て相戦ふに至れり。初め察罕帖木兒は山西の晉冀の地を叛徒の手より克復せり。大同府に駐在せる勃羅帖陸邇 Polo-temour は同地は所管内に屬するが故分離するを得ずと稱し、兵を率ゐて進んで之を占領せんとし、察罕帖木兒は之に對抗せり。皇帝は兩管轄區域の境界を定め兩將に命じて各々その任地に退かしめたり。兩將のこの命を奉ずるや、間もなく皇帝は察罕帖木兒に向て冀寧を勃羅帖陸邇に與へよと命じたり。察罕帖木兒は同地方は開封府の防備上必要ありと奉答し、兵を集めて勃羅帖陸邇に向て進軍せり。皇帝は新に詔勅を下してこの交戦を中止し、兩將もその兵を戦めたり。

この事件の漸く鎮靜に歸するや、更に北部に於ては支那人の叛亂よりも恐る可き大亂の起れるありき。是より先皇帝は數々タルタリ一在住の宗族諸王に命じて手兵を引率して來援せしめんとせり。然るにその一人なる窩闊台の子滅里大王 Melita 七世の孫、陽翟王、阿魯輝帖木兒 Alou-hoei-temour は皇帝を援けんとはせずして、却て帝位を奪はんとせり。その長城を距る數日程の地に來るや、使を妥權帖陸爾の許に遣して宗祖天下を以て汝に付せしに、汝已にその大半を失へるにあらずやと詰り、帝權を擧げて讓與せんことを請求したり。知樞密院事禿堅帖木兒 Toubi-kien-temour は皇帝の命によりて之が征討に向ひしも戰敗れて上都に退却するに至れり。朝廷狼狽して倉皇新なる部隊を派遣せしに、叛公子は突然部下の將校によりて皇帝の軍隊に交附され、征討軍を引率せる皇太子の命令に依りて死刑に處せられたり（一三六一年十一月）。

察罕帖木兒は河南を蒙古の政權の下に従へ、重要なる城市に守備兵を置き、進んで太行山附近に陣し、山東叛徒遠征の準備を爲せり。その一度同省に入るや、叛徒の巨魁たる田豐、王士誠の二人は投降せり。乃ち部下の兵を數部隊に分て山東の諸城を下し、親ら往て首府濟南を圍み、包圍三箇月の後之を陥れ、更に兵を移して省内に於てなほ未だ叛徒の手を離れざる唯一の城市なる益都（青州府）を圍みし時、暗殺されたり。田豐と王士誠とは蒙古將軍の作戰を援助せるを悔み、之を失はんことを企てたり。察罕帖木兒は田豐より來て士卒を檢閲されたしとの案内を

受けしが、之を友人として信頼せしより毫も疑惑を挾まず僅かに十一人の騎兵を從へてその營に赴けり。然るにその正に田豐の帳中に入るや、王士誠は之に致命の刺傷を與へたり（一三六一年七月）。兩人は豫め益都の守將と謀る所あり、直ちに部下の兵を率ゐて城内に入れり。

察罕帖木兒の養子擴廓帖木兒 Korkou-temour はその官爵を襲ふて平章政事兼知山東河南行樞密院事となり、皇帝の勅許を得て益都の攻撃を繼續したり。乃ち奮然として攻撃を加へしも防戦も亦頑強なりしより、地下の坑路を鑿掘して、之に依りて城に入れり。叛徒の巨魁等は之を捕獲して朝廷に獻ぜしも、田豐、王士誠兩人に對しては親ら刑罰を加へんことを欲し養父の墓前に於てその心臓を抽出して亡靈に供へ、兩人に從て城内に入りしものを悉く虐殺せしめたり。

この頃四川に於ても亦新に皇帝現はれたり。徐壽輝の命を受けて同省に派遣されたる明玉珍は、その暗殺に遭ひたりとの報に接して親ら經略を企て、遂に四川の首府を奪ひて同地に於て皇帝と稱し、國號を夏と定めたり。〔草木子曰、重慶密受眼子、僭號稱帝、旻先汚陽人、瞎一目、爲巡司弓兵、諱子頭、竟引兵歸、曰、汝能爲帝、我豈不能帝耶。〕

この暗殺は又朱元璋と陳友諒との交戦を惹起したり。上述の如く陳友諒は太平を略せしが更に進んで南京地方の侵略を試みたり。朱は之に向て軍を進め、安慶占領後、九江府附近に於て之と會戦し、その兵を撃破したり。陳友諒は武昌府に遁れたり。朱元璋は九江を陥れ、次で

南昌府を降し、この首府に據り江西の重なる城市の降服を受けたり。

陳友諒は如何にもして都城南昌府を克復せんと欲し、一三六三年大に舟艦を治めて、進んでこの都城を圍み、銳を盡して攻撃を加へ、援兵の來らざるに先て之を抜かんとせり。然るに守將も亦頑強に防戦して形勢の危急なるを朱に通報するを得たり。朱元璋は艦隊に多數の士卒を塔乗せしめて南京を出發し、敵の退路を斷たんとして、長江の鄱陽湖に通せる地點なる湖口附近に駐屯せり。陳友諒は八十五日の久しきに亙りて南昌府を圍みしが、直ちに圍を解きて鄱陽湖に入り、湖上に於て敵の艦隊と遭遇したり。かくて交戦の繼續すること三日間その極陳友諒は舟師の大半を失ひ、流矢に中りて戦死せり。長子陳善兒は皇太子に立てられたりしも捕虜と爲り、重なる將校等は戦勝者に降りたり。次子陳理は遁れて武昌に還り、皇帝の位に陞りしも、〔草木子曰、陳友諒、其下復立其子、爲帝、居武昌、改元德壽。〕包圍攻撃を受けて事の爲す可からざるを見、出でて降れり。湖廣は首府の陥落に次で、臆て全省を擧げて朱元璋の有に歸せり。これ全くその寛大にして秩序を愛し軍紀嚴明なるが爲なりき。

この戦役は全く漢の新國の運命を決せるが、是より先朱は張士誠と呂珍とが宋帝の都城とせる安豊を攻めて之を陥れ、劉福通を殺したりと聞き、親ら安豊に向ひて呂珍を破りたり。かくて軍隊の指揮を徐達に委ね之をして廬州を圍ましめたり。その出發の後蒙古軍は安豊を克復したり。

蒙古人の間にも亦數々紛擾を生じたり。察罕帖木兒の暗殺せられたるより、勃羅帖陸遜は再び晉冀の地を領せんと欲し、數々皇帝の詔ありて之を制せしにも拘はらず、兵を派して之を占領せんとせしに、察罕の養子擴廓帖木兒に撃退されたり。かくて勃羅帖陸遜もその計畫を放棄したるが、更に他の事情より間もなく皇帝に對して兵を執て立つこととなれり。政府の權力衰へしが爲、朋黨比周の勢を助け、皇太子も亦野心ある大官等の確執に參與したり。右丞相搠思監は即ち皇太子に向て敵黨なる大官の多數の異圖を懐けることを誣ひ、之を失はんことを勧めたり（一三六四年）。皇太子は之に同意して父帝を説き、強てその二人を殺すことを得たり。

搠思監と中書右丞也先不花 Yesien-bouca とは共に陰謀を以て相結託し、曩に殺せる二人の大官の友人、知樞密院事禿堅帖木兒の復讐を企てんことを恐れ、之を失はんことを決心して刑事上の訴訟を提起したり。勃羅帖陸遜は人を遣してその冤枉なることを上奏せり。皇太子は勃羅帖陸遜の跋扈せるを怒り、その陰謀に干與せるを誣ひて大同に於ける兵馬の權を奪へり。勃羅帖陸遜はこの命令に服従することを拒めり。宿仇擴廓帖木兒は之を強制す可しとの命を受けたり。勃羅帖陸遜はこの命令の詔を矯めたるものなるを知り、禿堅帖木兒をして帝都に對して兵を動かさしめ、居庸關の要塞を奪へり。蓋し皇帝に逼りて君側に近侍せる姦臣等を除かん事を期せるなりき。居庸關を守れる也速 Yesou は禿堅帖木兒を迎へて戦ひしも大敗せり。茲に於て皇太子

は首府の安全ならざるを思ひ、途を古北口クベキニに取りてタルタリーに退却したり。禿堅帖木兒ツキエンチムールは進んで清河チンホに至り河畔に營を列ねて政府の處置を俟てり。蓋し政府に對しては、勃羅帖陸邇ボロチムールの命令によりて干戈を執れるものなるが、その精神は毫も皇帝に盡す可き忠誠を怠るものにあらず、唯大官の間に不和を醸せる逆賊擲思監チヤオセキエンと朴不花パフホとを君側より除かんと欲するに過ぎざれば、この兩國賊を交附せば退却せんと通告せるなりき。この要求に對して之を容る可きや否やに就きて政府の評定は久しきに互れり。數回の談判は開かれしも、禿堅ツキエンは斷乎としてその要求を枉げず、兩大官の交附を受け勃羅帖陸邇ボロチムールの官爵を復するに及びて初めて退却したり。

茲に於て皇太子は直ちに大都タツに還る可しとの命令を皇帝より受けたり。この命令には従ひしも皇太子は深く勃羅帖陸邇ボロチムールを怒りて兵を集め、且擴廓帖木兒クワクチャムールに命じて之を大同府タウトフの管内に攻撃せしめたり。茲に於て擴廓帖木兒クワクチャムールは部將關保クワンパオ Koan-pao を遣して之に向て進軍せしめしに勃羅帖陸邇ボロチムールは一隊の兵を大同タウトンに駐めて之に對抗せしめ、親ら大部隊を引率して大都タツに向つて前進したり。皇太子は大都タツに歸來せる時より、進んで清河チンホ河畔に駐營せるが、部下の兵士は敵兵の近くを見るや、大都タツを指して潰走し、而して首府シヤンシに在りても安全なりと信ぜず、直ちに反對の城門より退去せしに、皇太子之に加はり山西シヤンシの首府太原府タインアン附近に於て擴廓帖木兒クワクチャムールの軍に合したり。勃羅帖陸邇ボロチムールはその退去を俟て何等抵抗をも受けず首府に入り、多數の將校を從へて京城に至り、皇帝の面前

に俯伏して擧兵の已むを得ざるに出でたることを陳謝したり（九月九日）。妥權帖陸爾トガンチムール之中書右丞相と爲し、天下の軍馬を節制せしめたり。

勃羅帖陸邇ボロチムールの全權を授けらるるや、皇帝の寵臣にして荒淫の伴侶たる禿魯帖木兒トロテムール Tolo-temur を誅したり。又京中よりあまたの無用の人物を驅逐し、就中多數の宦官すべての喇嘛を排斥したり。皇帝は又その請求により數々使節を皇太子の許に派して歸京せんことを命じたり。然るに皇太子之に従はざるのみか、却て全盛を極むる仇敵に對して再び兵力に訴へて輸贏を決せんとせり（一三六五年）。勃羅帖陸邇ボロチムールはその兵を率ゐて來り薄るを知るや、その生母奇皇后キクイを幽閉し、之に逼て皇太子の歸京を命ずるの書を草して之に遣らしめたり。次で禿堅帖木兒ツキエンチムールを派遣して上都シヤンツの方面に於て皇太子に黨せる蒙古兵を拒がしめ、也速エスに命じて進んで皇太子と擴廓帖木兒クワクチャムールとを伐たしめたり。

也速エスは北京の南方六リグなる良郷リヤンシヤンに至りて進まず、將校を擧げて右丞相に心服せざるを見、その有力者を會して、滿場一致、之に服従せざることを決したり。乃ち軍を班して永平ヨウピンに駐り、使を擴廓帖木兒クワクチャムールにタルタリーの諸王の許に遣して、その決議の顛末を通報したり。

勃羅帖陸邇ボロチムールはこの背信の擧に望を失ひ、驍將、姚伯顔不花ヤオペイエンボウカ Yaopeyen-Bouca を派して也速エスを伐たしめたり。也速エスは之に奇襲を加へ、その兵を擊破し、且之を擒にして殺したり。茲に於て勃

羅帖陸邇は親ら兵を出せしが、三日三夜の強雨にすべての作戦を妨碍され空しく大都に歸れり。部下の反對起りしより徒に猜疑の念に驅られ、些々たる嫌疑を以て多數の將校を殺害したり。悶悶たる滿腔の不快を酒に紛さんとし、益々殘忍酷薄と爲れり。近侍せるものを手討ちにせしことも一日に止まらざりき。爲に滿廷悉く之を憎むに至れり。威順王の子和尚 Ho-chang 皇帝より勃羅帖陸邇及びその黨與を除けよとの密旨を受け、忽ちにして之を實行するの機會を得たり。勃羅帖陸邇は秃堅帖木兒より上都を略取し、皇太子に黨せる蒙古兵に對して戰勝を博したりとの報に接し、皇帝に之を奏上せんとして參内したり。その正に宮城に入るや和尚の配置せる從兵之を抑留し、一將校は劍を抜て一撃その頭を斬りたり（九月）。この報の秃堅帖木兒の軍に至るや、部下の將校等はその希望の挫折せるを認めて離散し、秃堅帖木兒も捕へられて殺されたり。皇帝は冀寧なる皇太子の許に勃羅帖陸邇の首を遣り、歸京の命令を與へたり。皇太子は擴廓帖木兒を從へて京師に至り、之を左丞相知樞密院事と爲せり。皇太子は擴廓帖木兒をして皇帝に讓位を逼るの計畫を贊助せんとせしも、その同意を得ざりしより深く之を銜みたり。皇帝は讓位をば允可せざりしも、皇太子に命じて中書令樞密使を以て天下の軍馬を總制せしめ、對等の政權を與へたり（一三六七年）。擴廓帖木兒はこの詔勅の實施に反對せんと企てしより免黜され、山西の堅城に退却したり。

蒙古朝廷がこれらの内訌によりて混亂を來せる當時、朱元璋はその新國家の疆域を擴げたり。都城を南京に定め、支那古代哲學者の設けたる仁義の道を基礎として制度を立つることに努力したり。而してその將徐達と常遇春とは江南、浙江の一部を領有せる張士誠を攻撃したり。兩將は一三六六年大にその兵を擊破して浙江諸城のうちにて最も富裕なる湖州を奪ひ、次で同省の首府杭州を陥れたり。翌年平江に於て張士誠を擒にして南京に遣れり。朱は決して城外に出でずとの條件にて之を放免したり。張士誠は之を誓約して間もなく自ら縊死を遂げたり。曩に夏の皇帝と稱したる明玉珍は一三六六年を以て殂せり。その子明昇年僅に十歳なりしが皇帝の位を襲ひ、母は攝政と爲れり。〔草木子曰、曼眼子居位六年、後爲其弟所殺、其妻復圖殺其弟、立其子爲帝、蜀主、同德壽陳少主、去高麗、然飄飄入于海矣。〕この年宋の國號を稱せる韓林兒も殂し之と共にその黨與は消滅せり。方國珍も遂に降參することと爲れり。この海賊は誓約を遵守せずして、朱の許に赴くことを拒み又穀物を貢賦として納むることを肯ぜざりしのみならず、朱に反對して北方に於ては擴廓帖木兒と南方に於ては福建の一半を領せる陳友定と同盟したり。朱はその將湯和に命じて温州、台州、慶元の諸城を經略せしめたり。敵兵の近くや方國珍は海島に遁れたり。而もその領有せる諸城が城門を開いて湯和を迎ふるを見、その子を遣して降服を乞ひ、更に親ら湯和の軍門に詣りて處分を仰ぎしより、乃ち之を南京に致したり。

朱は茲に於て爾餘の支那地方の征服を企てたり。征虜大將軍徐達副將軍常遇春は甲士二十五萬を引率して北伐し、胡廷瑞〔朝廷瑞と宋元通〕は福建、廣東を従へ、楊環は廣西を占領せり。これらの南方諸省は外人の支配を厭ひしこととて、進んで支那人の征服者に服従したり。

徐達と常遇春とは先づ淮水と黄河との間に介在せるすべての地方を奪ひ、了て黄河を渡り山東に侵入したり。兩將の同地方に入るや檄文を發表して蒙古人の如き夷狄は、文明國民を支配するの資格なし、却て之に法律を仰がざる可からず、蒙古人が帝國を征服せるは實力と勇氣とに依れるにあらずして天授なり、今や天は帖木兒汗の治世以來歴代皇帝の犯せる罪惡を憤り、之を奪ふて寛仁大度的美徳を備へたる武將に與へんとす、その兵を執て向ふ所到る所として敬愛尊重せられざるなしとの趣旨を辯明したり。兩將は何等の抵抗にも遭遇せず、山東の城邑を擧て悉く之が歸順を受けたる後、河南に入りしに、復た同一の成功を見たり。城市の門はその軍旗を臨んで開放されたり（一三六八年）。

妥懽帖睦爾はこの征服の迅速なるに驚愕し、擴廓帖木兒の許に數々急使を馳せて兵を率ひて歸來せよと命じたり。擴廓帖木兒は晉寧を出發せしも、帝都を掩護せずして重兵を擁して太原の近郊に赴けり。

初め朱元璋は吳王と稱するのみなりしが、今や支那の大半を領有せるより、一三六八年二月

即ち支那曆の元旦を以て皇帝の位に即き、國號を明と定め、年號を洪武と建てたり。その在世中は又洪武皇帝と稱せしが、崩後諡して太祖と呼べり。太祖とは通常支那に於て歴代の開祖に與へらるる諡號なり。

朱は一三六八年八月親ら一軍の將として南京を出發し、汴梁に於て黄河を渡り、途を衛州、相州、彰德、廣平、順德に取りて大都に向つて進みしに、諸城はその來るを迎へて降り。之と同時に、徐達、常遇春の兩將は山東より北直隸に入り、進んで通州に逼り、知樞密院事ト顔帖木兒 Poyen-temour を破て陣斬せる後之を陥れたり。今や敵兵は帝都の城門に逼らんとするに至れり。この危急存亡の時に方り、左丞相、失烈門 Cheliemen は太廟なる蒙古皇帝歴代の神主を奉じて、太子と共に北行したり。妥懽帖睦爾も直ちにその後を追はんと決し、淮王、帖木兒不花 Temour-boca を支那の監國に任じ、慶童 Kingtona を中書左丞相と爲して京城守備の任務を委ね、翌日三宮、后妃大官等を集めてタルタリに避くるの決心を告げ、即夜宮廷を擧げて出發し（八月二十五日）、途を居庸關に取りて上都に退却したり。支那兵は寸時も猶豫せずして大都に逼り、城門に於て些か交戦せる後九月之を占領したり。茲に於てか殆んど支那の全部を擧げて明の皇帝の掌握に歸せり。皇帝は先づなほ蒙古人の領有せる各地の征服に従事し、次で北方にその敵を追撃せんことを思へり。

妥懽帖睦爾は上都に在りても安全なりと恃む能はず、更に北方三十リーグに位せる達里湖湖畔の應昌府に移れり。支那兵は長城を超え、この地を距る小距離の點に達せし時、妥懽帖睦爾は崩じたり（一三七〇年五月）。時に齡五十一歳にして明の政府は諡して順帝と呼べり。卷末附録 第六成吉

明軍は應昌府を陥れて妥懽帖睦爾の孫、買的里八剌 Mañijipala を初として多數の公子公主大官等を擒にして悉く之を支那に遣りたり。皇太子愛猷識理達臘は惟り遁るるを得て和林に退き、之を以て蒙古可汗の都城と爲せり。〔政元宣光、諡號昭宗、事詳 繆荃孫元昭宗年號宣光考。〕

明帝は蒙古可汗がタルタリーに於て大兵を糾合したりとの報を得て、一三七二年徐達をして大兵に將として進軍せしめ、深く克魯倫、土拉兩河の河畔に達せしも、何等の決定的勝利をも博し得ざりき。

愛猷識理達臘は可汗と稱し一三七八年を以て殂せり。その子脫古思帖木兒 Tokous-temour 位を嗣ぎし時、明帝は使を遣して父の殂落を弔し、且その蒙古可汗の位に即けるを祝したり。而も爾來可汗の兵は數々支那帝國の境土を擾したり。然るに一三八八年明の太祖は一軍を出して脫古思帖木兒を伐たしめ、捕魚兒海 Buir 附近に於て大に之を破りたり。その次子、及び妃主以下百餘人、官屬三千人、男女七萬人は戰勝者に獲られたり。ロに據る。H. Yacintchikov 著 脫古思帖木兒は敗走の 蒙古誌第二册參看

途上、土拉河附近に於て、宗族の一人なる也速迭兒 Yissouudar に弑されたり。也速迭兒はかくて可汗の位を篡ひしも、他の競争者は之が下風に立つを好まずして内亂を生じ、多年紛擾を極めたる結果、鬼力赤 Goltzi と呼べる公子立ちて韃靼汗と稱したり。その在位は短くして弑逆によりて仆れ、本雅失里 Bourinschारा 汗位に即けり。一四〇八年支那の皇帝は書を以て之を諭して屬邦と爲さんとせしも拒絶せしかば、之を攻めしめしに、支那軍は土拉河畔に於て敗北せり。明朝の第三代永樂帝は一四一〇年親ら大兵を引率して遠く克魯倫河畔に進軍したり。蒙古人の間に於ける不和は明軍に利する所ありき。本雅迭里の部將、知院阿魯台 Olotai はその手兵を引率して之を棄てて東方 Catlar 河畔に退却せり。皇帝は更る更る之に向ひ、先づ本雅失里を韃靼河畔に、次に阿魯台を蒙古の東邊に破りたり。本雅失里は一四一二年瓦剌 Oirates の順審王、瑪哈木 Mahmud に弑され、瑪哈木は答里巴 Dariba を立てて汗と爲せり。かくて蒙古の諸王侯は二世紀の間絶へず最高の汗位を争ひ、支那の武威の遠く輝かざる時は之に服従し、機會の乘ず可きあらんか、その邊疆諸州を劫掠したり。明朝の滅亡せんとする時代にありては、蒙古族は汗と稱するあまたの君長の間分割されたり。喀爾喀諸部 Kalkas は漠北、蒙古の故地に住へり。その領土の西、乃蠻部、畏兀兒部の故土には衛拉特部 Eulentes 一に准噶爾部 Djoungares 二に占領せり。察哈爾部 Tchahahares 鄂爾多斯部 Ordos は沙漠と長城との間に

住へり。滿洲朝はその勃興の初に當り、漸次に極東に位せる蒙古の諸部に保護を加へ、この新同盟の援助を受けて一六三二年に察哈爾部を征服したり。以後數年の間に於て南部蒙古并に鄂爾多斯部も同じく滿洲朝に服従したり。Hyacinthe 蒙カカ喀爾喀部なほその獨立を保ちしも衛拉特部の攻撃を受けて支那の滿洲皇帝の保護を乞ふの必要に逼られたり、かくて一六九一年に康熙帝は長城の北約四十リグの地に赴きて、喀爾喀三汗より臣服の禮を受けたり。Gebillon の一六九一年の第三回韃靼旅行記は Du Halde の支那誌第四冊に最後に衛拉特部一に準噶爾部は一七六〇年頃滿洲の統轄に歸したれば今日に在りては蒙古民族の大部分は支那皇帝の制令を奉ぜり。同民族の爾餘の部族は露西亞帝國の所屬たり。

基督教は蒙古皇帝保護の下にフランシスコ僧派の Jean de Mont-Corvin 師の熱心なる努力に依りて支那に於て多少の進歩を見たり。師は波斯印度を経て一二九三年頃往て帝都に本據を定め、二箇所の教會を設け數年間に約六千人に洗禮を施したり。L. Wadding のフランシスコ僧派年代記 Annals des Freres mineurs 第六冊にモンテ・コルヴィノのジョアン師の書翰二通を収む、以てその行動を知るに足る可し。第一信は冒頭を逸せるが一三〇五年一月八日并八里克 Cambalich にて認めたるものにて、クリミア即ち Cavaria 地方のフランシスコ僧派管長に寄せたるものなること第二信によりて明なり。その大意は大汗の領土 Khatay に来りて羅馬法皇の宸翰を捧呈し、主基督の教を奉ぜんことを勧めしめ深く偶像を信ぜざるが如くなりき。されど基督教徒にも好意を表せり。余も二年前より宮中に在り。この國には基督教徒と稱しその教義を失へるネネトリウス派の僧侶ありて勢力を揮ひ、他派の基督教の僧侶の説教所を設けて異りたる教義を説くを許さず。使徒も又使徒の門弟も未だこの國に來りしことなく、前述のネネトリウス派僧侶は或は直接に或はその買収せる官吏を借りて余を迫害して、羅馬法王より派遣されたるにあらずと斷言し、余を以て、間諜なり魔法使なりと誣ひ、偽證を提供して余の印度に在るや皇帝に財寶を獻上するの途にありし外國の使節を殺してその財寶を奪ひたりと云へり。この排擠の策の謀らるること約五年その間余は或は法廷に訊問され或は無慘の最後を遂げんとせり。最後には天祐により皇帝に讒悔して余の冤枉を明にせしものありしより余を嫉視して誣告せるものは妻子と共に退放せられたり。爾來十一年間余は單身この地にありしが、約二

年前獨逸ケルン領の Arnold 師來て余に助力することとなれり。余は汗八里克に教會を建て六年前成功したり。鐘樓ありて三箇の鐘を懸く。今日までこの教會にて洗禮せるは凡そ六千人なる可く、更に三萬人以上を洗禮せんとす。余は漸次に七歳以上十一歳以下の邪教徒百五十人を購ひ、之に洗禮を施し、拉丁希臘の文字を教へ、且讚美歌、祈禱文を書して與へたればその十一人は儀式に熟するに至れり。余は羅馬よりも僧派よりも書信に接せざること已に十二年にして西洋の事情を察せし、余は和唱、聖師傳、詩篇等を送附されんことを管長に乞はんとす。余は第二の教會堂を建てて學生を分置せんとす。余は蒙古語を學習し即ち新約全書并に詩篇を翻譯せり云々とあり。○第二の書信は一三〇五年の終に認めしものにて波斯のフランシスコ僧派に寄せたり。その冒頭は逸せるが、汗の宮城の前に第二の教會を建てたり、敷地は Tauris より同行せる商人 Petrus de Lurclongo の購ひて寄附せる所、而して兩教會の距離は二哩半あり。教會にて歌ふ時は汗は居間にて之を聞くを得可く、余の宮城に入るや法皇の使節として一定の坐席を有せり。皇帝は他の何宗の僧侶よりも余に敬意を表す云々と。この宣教師の請求により羅馬法皇クレメント第五世は、一三〇七年に七人のフランシスコ僧派所屬のものを支那に派遣したり。之と同時にモンテ・コルヴィノのジョアン師を汗八里克の大僧正に任命し東邦の管長と爲したり。新管長は僧正に任ぜられたる七人のフランシスコ僧派の宣教師を副管長に採用す可き筈なりしにその中三人のみ翌年皇帝帖木兒に寄せたる書狀を携へて汗八里克即ち大都に到るを得たり。この書狀とは即ち羅馬法皇が皇帝に基督教信仰のことを勧めモンテ・コルヴィノのジョアン師の保護を乞ひしものなりき。この三人の僧正即ち Gérard 及 Peregrinus 及 André de Perusio とはジョアン師を Cambalu の大僧正として戴けり。Olor. Raynaldi G. Ann. Eccl. 并 2 Waddingi 1331 年代記の一三〇七年の條に據る。一二年羅馬法皇は更に副管長としてフランシスコ僧派に屬する Thomas 及 Jérôme 及 Pierre de Florence との二人をジョアンの許に派遣したり。前の三師は相次で刺桐（泉州）に於ける天主教信徒の監督を委託されたり。富裕なるアルメニアの婦人ありて Caïon 「疑もなく刺桐也」と稱する汗八里克を距る三週日程の都會に自費にて教會を設け、之を木山と爲さんことを

大僧正ジョアン師に要めたり。師は僧正 Gerard により監督教區の法務を託せしが、その死後 Peregrinus 之に代り、一三二二年には更に Andre de Pennisio への後任となれり。アンドレー師が一三二六年一月カイトンにてペルシオ修道院長に寄せたる書状には上述の次第を記し且法皇の派遣せる宣教師の蒙古皇帝より給養を受けたることを説けり。即ちアンドレー師その他の同僚は汗八里克帝在の五年間八人分の食物衣服を給せられ、アンドレー師のカイトンに移りてよりは同じく Astar 即ち皇帝の布施を受けたりと云へり。(亞刺比亞語 Tionifar は俸給の義なり) ジエノアの商人の計算に従へばこの給與は年額金貨百フローリンに當る可しと云へり。アンドレー僧正は更にこの帝國には萬國の人民住し各種の宗教行はる、是れ何れの宗教にても救はる可しとの謬見行はるる。大僧正ジョアン師の死後、羅馬法皇ジョアン第二十二世は一三三三年にその後任として、フランシスコ僧派の Nicolas 師を任命し、師は同派の僧侶二十六人と共に支那に向て出發したり。最後に羅馬の尙書省より出したる書簡に依りて見るに、羅馬法王ウルバン第五世は一三七〇年に巴里の神學博士なるフランシスコ僧派の Guillaume de Prat 師を汗八里克の大僧正に擧げ、師は支那の皇帝并に沿道諸國の蒙古君王に寄せたる羅馬法皇の紹介狀を授けられ、同僧派の僧侶十二人と共に出發せり。Mosheni 〇 Hist. tartarorum ecclesiastica 一七五一年 Helmstadi 發行參看。

但し宣教師等が東邦に於ける基督教の進歩に關し、且蒙古朝帝王の之を信仰せんとの意向に關して、羅馬法皇に致せる報告の聊か信じ難きことは容易に之を認め得可し。何となれば何れも羅馬の朝廷を満足せしむるが如き報告を爲し、熱心に布教せる結果に對して賞贊を受けんと希望を有したればなり。且又羅馬法皇若しくは爾餘の君侯の許を訪ひ、基督教の爲に便宜を要めんとして蒙古朝の帝王より派遣されたりと自稱せる人々も、その多くは私見を以て之を自稱せるものにして、その勅書なりと詐冒せる書狀を査閲せば直ちに之を立證し得可し。今かかる詐冒の一例

を擧んに、一三三八年 Andre なるものアラニー人 Alains と思はるる十五人の同行者とアヴィニオンに來り、順帝チユンチの使節なりと稱し、鼠の年(一三三六年)に汗八里克ハバリクに於て認めたる宸翰に同皇帝に仕ふるアラニー人より法皇に奉れる上表を添へ、之を法皇に捧げたり。大汗は羅馬法皇に向てアンドレー以下の同行者を派遣せるは、相互の間に數々使節往來の途を開き、且羅馬法皇より祝福を乞ひ、日常の祈禱に言及されんことを要めんが爲なりと云ひ、この使命を帶べるアラニー人 Alains 等は皇帝の臣隸にして法皇の兒輩なりとて之を紹介し、最後にこのアラニー人をして駿馬その他西邦の珍奇を齎らしめんが爲なりと云へり。

この宸翰と同時に認めたる他の宸翰は五人のアラニー人に代つて起草せるものにして、その羅馬法皇の使節にして、八年前に物故せるジョアン師より天主教の教理を聽けるものなることを法皇に報じたり。アラニー人等は宸翰に對して優渥なる答書を受けて、皇帝の希望せるが如く兩朝廷の間に友誼的關係を確立し、數々相互の間に使節を往來せしめ、以て信者の福祉と宗旨の隆盛とに多大の利益を與へんことを法皇に乞ひ、最後に羅馬法皇の兒輩として同胞として君王たる皇帝に推薦されんことを要め、これ多大の恩惠なりと云へり。

羅馬法皇はこの宸翰の正確なるを疑はざりしもの如く、その蒙古の皇帝に寄せたる答書は第四年六月イデス日(一三三八年六月十三日)にアヴィニオンに於て認められたり。この答書は通

譯を介して使節より聽きたる處并に使節の捧呈したる宸翰の趣旨に依りて、皇帝が神聖なる羅馬教會に對し又身その任にあらざるも地上の神たる位地を占むるものに對して歸依せらるることを知りて満足に堪へずと云へり。次に皇帝に向て從來の如く宸翰に擧げたる五人のアラーニ人の諸侯并に爾餘の基督教徒を優遇せんことを望み、天主教の僧侶その他一般の教徒に向て教會堂、靈廟、説教所等を造營して之を所有し、以て禮拜式を舉行し、自由に神の言葉を帝國内に説教するの許可を與へんことを乞へり。最後に近く大使を支那に派遣せんことを約し、之を欸待して忍耐と厚意とを以てその説を傾聽し、かくしてその皇帝の心裡に播ける生の種子をして豊穰なる果實を結ばしめんことを要求せり。

羅馬法皇は之と同時に、五人のアラーニ人 *Alains* の筆頭なる *Fodein Jovens* に勅書を與へて、同民族なる他の諸侯と協力して、基督教徒をして教會堂を建立せしめ、僧侶をして神の言葉を説教するに方りて自由ならしめんことを勧めたり。第三の宸翰は五人のアラーニ人 *Alains* の諸侯に連名にて與へたるものにして、基督教の主なる教義を説けり。この年羅馬法皇は實に四人のフランシスコ僧派所屬のものを出發せしめ、一三三八年十月三十一日附にて *Uzbec* 汗に寄せたる書、すべての蒙古民族の皇帝中の皇帝なる君主に寄せたる書、并に中華の蒙古皇帝なる堂たる順帝チユンテに寄せたる書等あまたの紹介狀を之に與へたり。 *Dr. Moshemü of Hist. Tartar. ecclesiastica* 附録參看。

蒙古人の戦勝は亞細亞の兩極端を連絡せしめたり。波斯、タルタリー、支那の同一帝權の下に統一さるるや、亞細亞のすべての民族に屬する私人と軍人とはこの大帝國の領土内を去來し、アラーニ人、欽察人等の軍隊は東京方面トシキョウに於て奮闘し、支那の技術家はチギリス河畔に於て從軍せり。回回教徒の多數は當時往きて支那に定住し、文官として第一流の地位を占めしのみか、武將として功を立てたるもありき。大都ダツの宮中に在りては波斯の星學者數學者は支那の學者と相議したり。蒙古歴代の皇帝に仕へて互に比肩したりし二十種の異民族は實に第十三世紀以前にありては、その名をさへ知られざりしものなりき。

成吉思汗チンギスハーンの子孫のうちその宗家の歴史を了りたれば、次に波斯に於ける蒙古朝の歴史を述べて旭烈兀フレイグ統亡ぶるの日に及ばんとす。その記述に際して時に成吉思汗チンギスハーンの他の兩家、即ち朮赤ヂユチ統と察合台チャガタイ統とに及することあらん、蓋し回回教徒の歴史家は兩統と波斯の君侯との間に衝突ありし場合に於てのみ漸く記述の勞を執り、而して兩統の歴史は假令存在せりとも、その所在を知らざるを以てなり。

附 録

註 第一 (第二七、一九〇頁参照)

ラシッドの拖雷支那遠征記事。附蒙古人の魔法、卜筮、迷信。

附

録

『拖雷の潼關ツンコアンに近くや、豫想せるが如く敵のこの要地を占領せるを知れり。契丹(實は金)の騎兵十萬人は Cadai Zengou と Camer Tégouudar との兩將の下にこの險隘に據り、蒙古兵の兵力劣れるを侮り之を迎へて戦はんとせり。拖雷は衆寡敵せざるを見て將軍 Schiki Contoucon を招きて如何なる方略に出づ可きやを諮れり。拖雷は之に向て敵をその陣地に攻むること難ければ、之をしてその陣地を移さしめんとて Contoucon に三百人の騎兵を與へて契丹(金)軍の前面に於て虚勢を張り以てその動靜を察せしめんとせり。Contoucon はこの命令を實行せしも Altan-khan (金帝)の軍隊は毫も運動を起さざりき。金軍は蒙古軍を侮蔑して大言壯語して我軍は能く進んでこの蒙古兵を包圍して悉く之を捕虜となす可し、その女子は之を妻妾となす可しと云へり。拖雷は Contoucon の戦略の效無きを認め、而してこの有利なる敵の陣地に攻撃を加ふる能はず、又退却の士氣を沮喪せしむ可きが爲、側面より Altan-khan (金帝)の帝都を定め

たる省内に進み、皇帝窩闊台の大軍と連絡を取るに決したり。かくて Toucoulcou Tchahbi 千人を授けて後衛と爲せり、この將軍は阿兒刺氏の博爾朮、諾延の弟なりき。

『契丹(金)軍は蒙古兵が交戦を避けて方向を轉換せるを見て喊聲を發して挑戰せしも、蒙古兵は毫も之を意とせず進軍を繼續したり。契丹(金)軍は已むを得ず陣地を棄てて蒙古兵を追撃したり。衆寡敵せずして意氣沮喪せる蒙古兵を追躡すること三日間に互れる後、契丹(金)軍は突然その後衛を襲ひ、約四十人とある水路に擠れたり。Toucoulcou は往きて敵兵の追及せることを拖雷に告げたり。拖雷は進退維れ谷まりしより djedamisch 稱する魔法を利用す可きことを命じたり。その法に據れば或る石を水に浸して後之を拭ふ時は盛夏の候に在りても暴風を生じて降雪嚴寒之に伴ひ、少くも強風を生ずるなり。蒙古軍のうちにはこの種の魔法に熟練せる一康里人ありて、その法を行ふ可しとの命令を受けたり。拖雷の部下は身に外套を纏ひ、三日の間乗馬の儘にて走り村落の住民悉く遁走して、衣服財産を遺棄せる地方に到り、夥しく被服と糧食とを得たり。この間康里人は巧みにその法を修め、先づ雨を降らし翌日は雪を降らし暴風を起し、而も朔風は膚を刺せり。支那兵は盛夏の候にありて冬季にも曾て經驗せざるが如き氣温を感じて全く勇氣を失へり。拖雷は令を下して千人の大隊をして各々一部落を占領せしめ、乗馬を屋内に牽き入れて能く之を覆はしめたり、これ疾風強くして……を許さざればなり。然るに支那兵

は野外に在りて凜烈たる風威に暴露され、三日間は全く進退の自由を失へり。四日目には雪なほ降りしも拖雷は部下士卒の能く休養して人馬共に毫も寒氣に冒されざるに、契丹(金)軍は恰も互に頭尾足相接して伏せる羊群の屯集せるが如く、衣服は凍りて堅く兵器には氷の被へるを見て、命じて銅鼓を打たしめたり。茲に於て部下の士卒は皮革の外套を纏ひて馬に跨れり。拖雷は之に向て勇を鼓して奮闘せんことを命じかくて蒙古兵は宛ら鹿群を驅るの獅子の如く、契丹(金)軍に向て突進し、その隊伍の大半を粉碎したり。その山間に遁れたるものは餓死せり。契丹(金)の兩將は五千人の兵を收めて退却せしが、追撃を恐れて急遽河流を亂らんとして多數の溺死者を出せり。蒙古兵を諷り之に向て大言壯語を敢てせる契丹(金)人を罰せんが爲、兵士に命じて捕虜に對してはすべて Louth の民の爲せるが如く之が處分を行はしめたり。』

この條に記せる魔法は太古より中央亞細亞の遊牧民族の間に行はれたり。魔術師の雨を呼ぶが爲に用ゐる石は yéda 又は djéda と呼び、魔法を djedamisch と呼べり。此術を行ふものは今日も Kalmoukes の間に在りて、djédadj 旅行家 Bergman 著 ssaddattsch 稱して是に就て記す所あり。即ちベルグマンは Nomadische Streifereien unter den Kalmen 第三册一八三頁に於て、ssaddattschis は雨を呼び雷電を支配するものと目する。雨を呼ばんとする時は、ベゾル Dézoar (山羊等の腸にある糞石)を用ふ、之を水に投ずる時は自ら

蒸發氣を生ずるなり。ssaddattschis はこの蒸發氣こそは雲の成分にして隨て雲を發生せしむるの力ありと稱し、雨の將に降らんとする時を選びてその術を行ふ。若しその術の成功せざる時は、或は他の魔法使の逆ひし爲なりと云ひ、或は暑熱甚しくして雨の力によりて之に勝ち難きが爲なりと云ひて、是を遁辭となすと云へり。

Pallas は蒙古人に關してあまたの興味ある事實を傳へたるが、第十三世紀に於てその祖先の間に大に行はれたる他の迷信に就て記す所あり、即ち焼ける肩胛骨の裂け目に依りて卜ふの術是なり。成吉思汗家の帝王がこの種の神託に諮りしは史上に見ゆる所にして、皇帝蒙哥の朝廷を訪へる宣教師ルブルキ師はこの神託を諮るの方法に就て記述せり。その記述は全く下に譯出す可き Pallas の記事と一致す。(Samlungen hist. Nachr. über die Mongolischen Völkerschaften 第二册三五〇頁參看)

『種々の神託は極めて太古の時代より蒙古種族に屬する迷信深き民族の間に行はれ、且曾てシヤマン教を奉じ或は今なほその迷信に支配さるる、殆んどすべての亞細亞民族の間に流行せるが如くなるが、殊に注意す可きは、火によりて肩胛骨の上に現はれたる裂け目を視、この卜法の通則に従ひ或は反覆せる實驗に従ひて、一日若しくは、數日前に將來の事件を豫知するの習慣是なり。Calmoukes はこの豫言の方法を Dallatülke 之行ふものを dalladschi と呼ぶるが

Kirguises はこの卜者を jauruntchis と稱せり。この卜者は殊に魔法を使ふにもあらず又僧侶の階級に屬するにもあらず、多年の實行によりてこの卜法に大に熟通せる人々なり。Dalla と題する蒙古文の書物あり、肩胛骨を灼りて生じたる縦横の裂け目に對して解釋を下す可き規則を説けり。この卜を行ふに方りて最も善き材料は羊、サイガと稱する羚羊、鹿、馴鹿の肩胛骨なり。先づ之に用ゐんとする肩を灼り、次に庖丁を以て巧みに肉を除き、かくて骨を炭火の上にて灼り、dalladschi が見て以て十分に裂け目を生じたりとなすまでその儘に置き、かくて裂け目の位地、長短、組み合わせ等に従ひて、將來を豫言し、事件の結果、幸不幸、生死等を判斷す。かくして豫言する處數々適中するは不可思議にして、隨てこの種の卜法は廣く亞細亞の粗野なる人民の間に信ぜらるるなり。その豫言は一定の名稱と意義とを有する主たる線を定め置きて、すべての裂目を之に對比して説明するに在り。』

支那に於ては太古より之と相似たる卜法を實行せり。但し肩胛骨を用ゐずして龜甲を用ゐ、その上にて或る草を燃し以てその裂くるに及で卜する也。(Mailla 支那史第一册參看)

蒙古人の迷信に關しては更に、ラシッドの蒙古種族に屬する Ourianguites の條より下の一節を援かん。

『蒙古種族に屬する Ourianguites が暴風雨の竭まんことを望むや、天を呪ひ雷電を叱咤す。

蒙古種族の他の部族は多く之と異りて、雷電の股々たるや、恐怖措かず室内に蟄居す、*Ouirian-curies* は雷火に打たれて死したる動物の肉を食はず、之に近づくことをも避く。蒙古人の信仰に従へば雷鳴は龍の如き動物空中より下り尾を以て地を打ち、臆て身を縮めて火を吐くが爲に生ずと爲せり。信仰深き蒙古人は親ら之を目撃したることありと云へり。又地上に葡萄酒、馬乳酒、牛乳、凝結せる牛乳を灌ぐ時は、雷火は家畜殊に馬を打つ、但し葡萄酒を灌ぐ時は、必ずこの結果を生ず可しと云へり。又濕りたる靴を太陽に暴す時は雷鳴を招く可しと信じ、注意して天井の窓を閉ちて屋内にて之を乾すを常とせり。雷鳴はその地方に頻繁なるより、恐怖心は之に種々の原因を求むる也。又神靈出現して之と談話を交ることありと云ひ、同地方にはこの種の迷信少からず。巫師 *canes* は夥しく殊に住居地域の邊境 *Bargouti* 又は *Bargoutchin-Tougroun* と稱する地方に多く、神靈はこの魔法使を媒介として來て談話を交ゆるなり。』

註 第一一 (第一一〇頁參看)

アライ・エツヂン及びラシッドの拔都西征記事。

蒙古人のヴォルガ江西地方遠征に關する *Tarikh Djihankuschai* 及び *Djami ut-Tévarikh* の記事の譯文を下に掲ぐ可し。初に掲ぐるは歴史家 *Alai-ed-din* の記事なり。

『窩闊台の治世に開かれたる第二回の庫哩勒台に於て、拔都の領土に隣接せる諸民族即ちブルガル人、*Asses* 露西亞人等を征服す可しと決議したり。皇帝はこの計畫に於て拔都を助く可き宗族諸王を指定せるが、是れ即ち蒙哥、その弟撥綽、(帝の)實子、貴由、喀丹、諸王闊列堅、不里、貝達爾、拔都の同胞なる鄂爾達、唐古忒等を始としてあまたの公子にして、將軍のうちには速不台巴阿秃兒ありき。諸王は何れも食邑に歸りて遠征の準備を講じ、翌春總集合地と定めたるブルガル人の境上に向て進軍したり。先づ名邑 *Boutgar* を奪ひてその住民を或は殺し或は奴隸とし、次で露西亞人の領土に兵を進めて連戦連勝、城内の住民蟻の如く又蝗の如く夥しき *Mocoss* (莫斯科) 城に逼りたり。莫斯科に逼るに先ち樹木繁茂して蛇も容易に之に入り得ざるが如き森林の前途に横はれるありしが、蒙古の諸王は先づこの森林を廻りて之に三輛の戦車を相並べて走らせ得可き道路を造らしめたり。かくて莫斯科の城壁に對して弩砲を据え數日の後之を陥れたり。戦勝者は同地に於て夥しき戦利品を得たり。戦死者の右耳を切る可しとの命を下せしに二十七萬を數へたりしと云ふ。

『露西亞人、アラーニ人、欽察人の盡殺されたる後、拔都は極めて著しき基督教國民にしてフランク人の隣國なりしと云はれたる *Baschgurides* (著者は匈牙利人のことをかく呼べり。元來 *Baschgurides* は土耳其種に屬すれど *Carpin* の紀行等に據りて見れば、當時匈牙利人を以て之

と同人種なりと見做せるが如し。北方土耳其人は m と b とを混ぜるより Magyar と Baschguirides との區別紛しく成れる事も、この誤解を來せる原因ならん。征討を準備したり。拔都は年の初にこの遠征に向て出發したり。四十萬の騎兵は之に對抗せんとして進み來れり。拔都は弟、昔班に一萬人を授けて之を偵察せしめたり。昔班は一週目の後歸來して敵兵の優勢なることを報告したり。兩軍の互に相近くや、拔都はとある丘に登りて止まること一日一夜、何人とも言葉を交はさず、天佑を乞へり。陣中の回回教徒にも命を下して共に祈禱を神に捧げしめたり。翌日拔都の軍隊は干戈を執て立てり。兩軍は大河を挾んで對陣せり。拔都は夜に乗じて部下の一部をして之を渡らしめ、かくて昔班はこの分隊を引率して數、敵軍に向て突撃を試みしも衆寡敵せずして敵陣を破ること能はざりき。既にして蒙古軍の殘部來り加はりしより昔班は全力を擧げて敵兵を襲ひたり。蒙古兵は進んで敵營に入り、劍を揮て帳幕の繩索を斷つに至れり。國王の帳幕の仆れたるを見て、Kélaré (Kélaré は國王の意味を有せるスラヴ語 Kéial 又は Crál より出でたり。露西亞人が匈牙利國王を Koroí Vangeraki と呼べるを聞き蒙古人はこの稱呼を借り用ひしこと疑ひなし) の軍隊は勇氣を失ひて敗走せり。その命を全うして遁れしは少數にして、全王國征服せられたり。是れ實に蒙古軍の博し得たる最大戦勝の一也。』

ラシッドの歴史はこの遠征に關して次の記事を掲ぐ。

『十三三三年 Djomadat-akhir の月 (一三三六年二月) より始れる猿の年の春、拖雷の子なる蒙哥、撥綽、窩闊台の子なる貴由、喀丹、察合台の子なる不里、貝達爾、朮赤の子なる拔都、鄂爾達、昔班、唐古忒及び速不台巴阿禿兒以下の諸將は欽察遠征の途に上れり。夏季を通じて進軍し、秋に至りてブルガル人の住地に隣接せる朮赤諸子の斡耳朵に到れり。是より拔都と昔班と Bouroudai とは Polo (波蘭人) と Baschguirides (匈牙利人) とに對して兵を進めたり。Polo は基督教を奉ぜる極めて有力なる國民にして、その國はフランク人の國と接壤せり。Polo は四十 tounans 即ち四十萬の大兵を率ゐ來りて拔都を迎へて戦はんとせり。先鋒隊一萬人強に將たりし昔班は敵の兵力極めて優勢なることを兄に報告したり。兩軍の互に相望むに至るや拔都は祖父成吉思汗に倣ひてとある丘に登りて一日一夜祈禱せり。陣中の回回教徒にも命じて同じく戦勝を祈らしめたり。次で夜に乗じて Bouroudai と共に敵陣との間に介在せる大河を渡りて之を攻撃したり。昔班は親ら襲撃の任に當り、將軍 Bouroudai は全軍を擧げて突撃を試み、蒙古兵は深く進んで Kélar (Crál) の帳幕を侵し、劍を揮てその繩索を斷てり。敵は意氣沮喪して敗走したり。怒り狂へる獅子のその獲物を目懸けて飛び掛るが如く、蒙古兵は敵を追撃してその大多數を殺したり。この國は悉く征服されたり。この戦勝は蒙古人の兵力に依りて得たる偉勳の一なり。Polo と Baschguirdie とは大國にしてあまたの城塞ありしも、之を征服するを得た

り。而もこの兩國民は次で叛旗を擧げ、今日（ラシッドは一三〇〇年に脱稿せり）にありては全く服従せず、國王を奉戴して之を *Ketar* と呼ぶ。（ラシッドは蒙古兵の波蘭に於ける遠征と匈牙利に於ける遠征とを混ぜり。此處に記せるは一二四一年の *Sayó* 河畔の戦にてこの際匈牙利兵の大部分は殺されたり。されどこの歴史家は事件の順序に依らず、次に一二三七年に於ける蒙古軍の交戦に就て敘せり。）

『蒙古兵は（一二三六年より一二三七年に互れる冬に於て）一の河畔に集合し諸王は速不台巴阿秃兒を分派して *Ase* 并にブルガルの領土を征服せしめたり。速不台は進んで *Casan* 城に至りて敵を破れり。その部長 *Bayan*、*Tchicou* の兩人は親ら來りて宗族諸王に忠誠を表し、款待を受けたる後歸國を許されたり。而も間もなく叛旗を翻へせるより、速不台は再び命を受けて之が征討の任に當れり。

『諸王は總會議を開きての後軍を別て廣漠たる地方を圍み、更に恰も大規模に野獸を驅るが如く、各方面よりその中心を指して進軍せり。……（此處寫本に缺字あり、蒙哥と大汗の名を朱字にて記す可きを忘れたるにあらざるか）は路を左翼に取りて（裏）海の沿岸を進みしが、欽察民族のうちにおいて最も勇敢なる首領の一人にして *Oerik* 部に屬する八赤蠻、并に……（*Ase* の文字脱せるならん）人なる *Catchar Ogola* とを虜にせり。その顛末は下の如くなりき。初

め蒙古人の虐殺を免れたる八赤蠻は賊匪その他亡命の徒等を糾合して地方を横行し、蒙古人に對して掠奪を試み、日毎に益々御し難きの勢を成せり。一定の住所を有せざるが故に之を虜にするの便なく、日中は *Atil* の兩岸に密生せる森林中に匿れたり。蒙哥は命じて二百隻の兵船を製造せしめ、一隻に武装に身を固めたる二百人宛の兵士を乗込ませ、かくて親ら川の左岸を航し、更に弟、撥綽をして右岸を航せしめ以てこの森林を隈なく搜索したり。その極蒙古兵は或る地點に於て人の去りて間もなき舍營の遺址を發見し、その地に一老婦人を得て之を鞫問して八赤蠻が或る一島嶼に遁れしこと、并にその國內を横行して掠奪せるものは悉くその地に所藏せることを知るを得たり。而も附近に船舶在らざりしより、蒙古兵はこの島に到ること能はざりしに、偶々大風突然起りて河水を對岸の側に吹流し（寫本には以下缺文あれども）の記事はへに據りしこと明かなれば之に據りて補へり）河床を露すに至れり。蒙哥は部下の兵士に命じて之を徒涉せしめたり。蒙古兵は不意に島に到りて八赤蠻を虜にしたり。その部下は擧て直ちに或は殺され或は溺死せり。その妻子は夥しき掠奪品と共に蒙古兵の有に歸したり。蒙古兵は再び徒涉して河を渡りしも一人の溺死者をも出さざりき。八赤蠻は蒙哥の前に牽き出されて、之に向て手づから首を刎ねられんことを求めしが、蒙哥は弟、撥綽に命じてその身體を兩斷せしめたり。（以下はチに據る）*Ases* の部長 *Catchir Ongola* は殺されたり。蒙古の諸王はこの地方に於て夏を過せり。

(口にはこの戦争に關して支那の史籍に依りこの年(一二三七年)三月蒙古は欽察部を攻めて寛田吉思 Koan-tienkis 海(Koan は支那語にて險隘の要塞の義 Tengnia は土耳其語にて海の義也、故に兩語を合する時は Derband の海の義となる。譯者曰く Derband とは土耳其語にて鐵門の義にて裏海西岸の都會なり、隨てデルベントの海とは裏海のこと也)に到れり。其酋八赤蠻は蒙古兵の近づくや部下と海島に逃れて以て追跡を避け得可しと爲せり。然るに適々大風起りて海水を吹き去り島に到るの途を開けり。蒙古は之を利用して悉く欽察人を屠りたり。部長八赤蠻は捕へられて蒙古の面前に牽き出されしより、蒙古は之をして俯伏せしめんことを思へり。八赤蠻曰へらく、我は一國の主たり、豈に苟くも生を求めんや、且つ身は駝にあらざ何を以てか人に跪くことを爲さんと。蒙古は即ち兵士をして之を監禁せしめたり。八赤蠻は之に向て今や水の廻る期且に至らんとす、軍宜しく早く還る可しと告げたりと記す。)

『鶏の年(六三四年又は一二三七年)拔都、鄂爾達、伯勒克、喀丹、不里、闊列堅は Bokschas 及び Bourtasses を攻め忽ちにして之を従へたり。同年の秋諸王は庫哩勒台を開きて全軍を擧げて露西亞人を伐ちたり。貴由、蒙古、闊列堅、喀丹、不里、の諸王は Ban? を圍み三日の後この城を抜きたり。次で Iga? の城を陥れしが、闊列堅は城下に於て負傷し之が爲に死するに至れり。諸王は挑戦し來れる露西亞の諸侯 Ourman (公爵 Roman) を破りて之を殺したり。』

又攻撃五日にして某城を抜き宰相 Oulai-Timour (Wladimir) を殺したる。Grand George (大公ジョオルジュ)の城を下すには一週間の攻撃を費したり。激しく攻撃を加へ……親ら盛んに武勇を示し、遂に能く勝利を博することを得たり。Venceslaw の國の首府 Saint-Nicolas 城を降すには僅に五日間の攻撃を要したるのみなりき。諸王はこの國の君、大 George の森林に匿れたるを捕へて之を殺したり。次に諸王は會議を開きて相別れて廣漠たる地方を併呑せんとし途を分て露西亞の内地に進軍し、征途に横れる都市要塞を悉く降せり。拔都は二箇月間 Kiri Acaska? 城市を圍み、諸王喀丹、不里の來會せる後三日初めて之を陥れたり。次いで諸王は舍營に就き休養して以て……。

『狗の年(六三五年又は一二三八年)の秋……と喀丹とは Circasses に向て進軍し、冬に至りつその王 Toucan? を殺したり。昔班、撥綽、不里は Tchintchakes? 民族の別部なる Mérimés の領域に入寇し、伯勒克は欽察部を攻めて Mékroutis の部長等を擒にせり。』

『豕の年(六三六年又は一二三八年より一二三九年に互る)の冬、……は不里、喀丹と Mancass を圍み六週間の終に之を奪へり。翌春即ち鼠の年(六三七年又は一二三九年)に諸王は Coucdai を派し鐵門(Derbend)其他附近地方の征服に當らしめたり。同年秋諸王、貴由、蒙古は皇帝窩闊台に召還され、牛の年(六三八年)にその鞞耳朵に歸着せり。』

以上の記事は窩闊台の本紀に出でたるが、更に欽察曠野地方諸王の傳と題せる章に於て下の如く之に繼續して記述しあり。

『鼠の年（六三七年又は一二三九年）の秋、貴由、蒙哥兩王の可汗の命を受けて（タルタリーに還らんが爲）軍隊を辭去せし時、拔都はその同胞并に諸王喀丹、不里、撥綽と共に露西亞人并に黒帽人（Cara-Calpaks 露西亞の歴史家は之を黒き Klobouks と稱す）に對して進軍したり。諸王は九日間にして露西亞の大都 Minguercan を陥れ、次で Ouladimour (Wladimir) の城市を悉く降したり。地方の大部分を侵し各方面より軍を進めて沿途到る處都市と城塞とを略取したり。かくて諸王は兵力を合せて Ortch-Ogoul-Ouladimour（土耳其語にてウラジミルの三子の義なり）城を圍み、三日の後之を陥れたり。牛の年（一二四〇年）に死せり。（誰のことなるや明かならず。）』

『（一二四〇年）春の半ばに至り諸王は某山脈を超えて Boulares 及び Baschgurdes の國を侵したり。右翼の方面より進軍せる鄂爾達は Iloute の國を通過して Bezerenbanam の兵を率ゐて來て迎へ戦ふに遭ひ之を破れり。喀丹と不里とは Sassans に向て前進し三度戦て之を征服せり。撥綽は同地方の山脈を超えて Cara-Oulag（トランシルヴァニアとワラキアとのことなるらん）に入り Oulag 人（ワラキア人）を破り、更に某山脈を超えて Mischelav の國に入

り迎へ戦へる敵兵に勝ちたり。諸王は分れて五路より軍を進めし Baschgurdes Madjars Sassans（是れ必ずや匈牙利の東部に住して喀丹より攻撃されたるサクソン人即ち獨逸人の植民を指せるらん。Michow の Cronica Polonorum に Hungariae の東部 Almani の住へる地方を Cadan 襲ひて蹂躪せりとあり。ラシッドの記事の冒頭に掲げたる匈牙利人撃破の項は此處に入る可きものなり）の國々をすべて奪ひしかば、その王 Kélar は出奔したり。諸王は Tissa (Theiss) Tonha (Danube) 兩河の沿岸に夏期を過したり。喀丹はその部下を引率して Ma-coute 等の國を征服し同地方の國王なる Kélar を追撃して濱海の地に到れり、國王は之を避けて某と呼べる沿海の都市より乗船して海上に走りたり。茲に於て喀丹は師を班し數々激戦數合にして Oulacoute の城市に於て某々を擒にせり。蒙古兵は可汗崩御の通報に接せざりき。

『虎の年（一二四一年）に諸王は欽察人が大舉して來りて某と朮赤の子 Schingour とを攻めたるより之と戦ひて勝利を博したり。諸王は秋季に再び兵を動し、鐵門を過ぎ、山脈を越え、Iloundar に一隊の兵を授けて戦敗れてこの地方に退却せる欽察人を攻め之を虜にせり。Ouroungcoute-Badadj の國も亦降服してこの地方に越年せる諸王の許に代表者を派遣したり。兎の年（六四〇年又は一二四二年）の初諸王はこの王國の征服を完うして師を班し、途上に夏と冬とを過せる後蛇の年（六四一年又は一二四三年）に各その食封に還りたり。』

註 第三 (第一五三頁參看)

蒙古皇帝ダヴィデに關する俗傳

附

Eccard の *Corpus hist. medii aevi* 第二冊に成吉思汗の記事を收めたるが、この記事は成吉思汗の波斯侵畧後間もなくネストリウス派の僧侶の起草せるものなるが如し。Eccard に依れば、亞細亞の基督教徒は好んで基督教を信奉せるタルタリー國王ダヴィデ(成吉思汗をかく稱せるなり)はシリア并に埃及の土耳其人に反對して進んで基督教徒を援けんとすと説けり。當時十字軍のナイル江畔に於て大敗を受けたる際なりしかば、この希望は殊に必要なものありき。法皇の大使なる cardinal Pelage 并に聖堂武士團も亦故らこのダヴィデ王に關する想像談を流布し、且之を法皇に上奏して以て之を動かして新に聖地に援兵を派遣せしめんとせり。エツカルトの公にせるは羊皮紙に記されたるこの想像談の一にしてザアクセンのツァイツに保存されたるものなり。この記事はフォリオ版四頁ありて六章に分てり。

第一章には成吉思汗の出身を説けり。基督教徒ジョアン王の子イスラエル王の子ダヴィデは六人の同胞のうち在りて末弟なりき。長兄はイスラエルの位を襲へり。この兩王もその祖先も Chan-chara () は疑もなく Khan-khata の誤なる可く、領域の記事より見れば哈刺乞魯の汗

録

附

録

を指せるが如し)と呼べる波斯人の大王即ち諸王の王の臣隸なりき、而してこの宗王の領土は東は Chassar (喀什噶爾) より西はアム河を越え、Bella-Garum (Bela-Sagoun) に達せり。占星家は Chan-chara に豫言してダヴィデなるものその王國を征服することある可しと云へり。然るにイスラエルの子のかく呼べること知られしより、之を宮中に召して殺さんとせり。而もこの少年公子は國王の意を怡ばしめ、且ジョアン王の女、王妃の一人として他の王妃と共に哀願せるより、國王はその命を助けたり。かくてダヴィデは健全に且安全に故國に歸ることを得たり。

第二章。三年の後イスラエルの長子死せるよりダヴィデ國王に推選されたり。ダヴィデは Mahatchin (Mahatchin 即ち大支那) の國王の女を娶りて王妃と爲せり。次で大軍を率ゐて波斯人の王 Chan-chara の國を襲ひたり。ダヴィデは一戰能く之を破りて Chan-chara を擒にし王國全土を征服したり。王國內には大都六十四を數へ、その廣袤は七十八日程に達せり。

第三章。次にダヴィデ王は Alaanar (Mavera-un-nahar) と稱する國を侵せしが、その地は印度の隣境にしてあまたの都城あり、波斯人の國王が宮殿を營める地は Gazna と稱せり。ダヴィデは Alaanar の王を破り、その全軍を虐殺したり。その領土を征服し了りてダヴィデ王は Chara (Khatai) と稱する國に還れり。Chara の王は Charnamisa (花刺子模沙、是れ即ち支丹、謨罕默德なり) とは Bacharim (蒲花羅) Samarchant 及び Bellecharim (Bilad Kha-

razm 即ち花刺子模國)の領有に關して互に確執したり。上記の Charnamisa は使節をダヴィデ王の許に遣して之と和を講じ Geon (Djihoun 即ちアム)河以往の領土を悉く之に讓與したり。この方面安全となりしかば、大軍を糾合してホラサンに入りバグダードを距る六日程の地に逼り使をハリフハの許に遣して之に向て宣戦したり。茲に於てハリフハの朝廷はダヴィデ王をしてその後を襲はしめんとせり。

回回教徒の歴史家は成吉思汗をして花刺子模帝國を襲はしめたるはハリフハ那昔爾なりとの輿論行はれたるやに説けるが、この無名氏の著述と一致する所あるもの如し。之と同時に東邦の基督教徒は同地方の僧侶を以て蒙古征服者の思想を左右し得るの力ありと稱せり。即ち無名氏は第六章に於てダヴィデ王のバグダードのハリフハに遣れる使節は十字架を畫ける使節旗を翻せりと云へり。而も蒙古人はこの頃グルジアを侵して基督教徒をも攻めたるなりき。

註 第四 (第三〇三頁參看)

支那の地理に關するラシッドの記事

Djami ut-Tévarikh のうち忽必烈の兩都、支那の官制行政區劃を説ける一章の翻譯を左に掲げん。

『Khitai は極めて文物の隆盛なる大帝國なり。信ず可き人々の傳ふる處に據るに、地球上何れの國に在りても文物の進歩し人口の夥しきこと Khitai に及ぶものなし。大洋は西北に彎曲して Khitai の海岸に竄入し、以て高麗と蠻子 Manzi とを分ち、汗八里克を距る四 fersenk の點に至れり。故に舟楫の便はその地に及べり。かく海の接近せるより雨量は多し。帝國內には暑き地方もあり、又寒き地方もあり。

『汗八里克は支那人之中都 Tchoung-dou と呼びこの國の皇帝の舊都なるが、冬季の都城たり。初め成吉思汗之を破壊せるより、忽必烈は之を復舊せんとせしも、更に舊都に近く新都を興して名譽を後世に傳ふるに若かずとなし、之を大都 Daidou と名けたり。兩都は相隣接せり。此都城の城壁を掩護する爲七個の高塔を設けしが、各塔の間の距離一 fersenk 宛あり。都城の人口夥しく溢れて郭外に家屋を設くるもの少からず。各國より移植せる果樹は庭園菜圃に繁茂し、その多くは結實せり。忽必烈は住居に宛てんが爲この都城の中央部に大なる宮殿を營み之を Carschi と稱せり。宮城は飾るに圓柱を以てし鋪くに大理石を以てし、分て四廓となし、相互の距離は矢の達する程度によりて定めらる。外廷は之を奴婢等の用に當て、第三廓には將校等毎日早晨より之に詰め、第二廓には千戸長伺候し、第一廓は宮内官に宛てらる。可汗は冬季この宮殿に住へり。

『汗八里克及び大都の傍に沿ふて大河あり、北方夏季の帝都の附近より來りて Djemdjial (古北口の峽谷也) をも流る。他にもなほ枝流のあるあり。都城に近く極めて大なる池を鑿てるが恰も湖の如し。池畔に傾斜面あり之によりて小舟を池上に浮べ、以て遊子の娛樂に供す可し。この河は往古流れて大洋の灣頭に注げり、實に大洋は灣入して汗八里克を距る少距離の地點に達せしなり。而も歲月の経過と共にこの海灣は漸次に遠かりて船舶の到達を困難ならしめたるより、船貨を汗八里克に致さんとせば、馱獸の背を借らざるを得ざることなれり。かるが故に支那の技師學者の報告に據りて Khitai 各省よりも Matchin の首府よりも京師 (Kingsai) 刺桐等の都市よりも、商船の帝都に到るものなしとの事實を確め、可汗は大運河を開鑿して上記の河を始として爾餘の河流の水を之に注ぐ可しと命じたり。汗八里克より印度との商港刺桐若しくは Matchin の首府、京師に至るには四十有餘日の航海を要す。この運河にはあまたの水門を設け、以て附近の地方に配水するの用に供す。故に船の之を超えんとするや荷物を満載せる儘、機械を以て之を牽き上げ、更に他の側に移して、下りて水に浮ばしむるなり。運河の幅は三十 guz 以上あり。忽必烈は命じてその内壁を石にて疊ましめ以て之が崩壞を妨げり。之に沿ふて Matchin (南部支那) に通ずるの大道あり、延長四十日程にして、悉く石を舗き、強雨の後と雖も馬蹄の深く泥土に没するが如きこと勿らしむ。兩側には楊柳その他樹木を植ゑて陰影を爲せり。軍人た

ると否とを問はず、何人と雖もその枝を折り又は嫩芽を動物に食ましむるを許さず。沿道至る處村落あり店舗あり、旅舎あり、故に四十日程に達せるこの通路に於て人家の斷ゆることなきなり。『大都の城壘は土を以て造れり。支那にてかかる城壁を造らんとするには、先づ板を並べてその間に軟き土を填め、大なる木塊を取て之を打ちその固まれるに至りて板を撤する時は即ち茲に城壁を得るなり。支那にては雨多く土輕きが爲堅牢なる城壁を造らしめんとするには數々この方法を反覆せざる可からず。

『忽必烈は大都を距る五十 farsangs の開平府の中央にも大都と同一の宮殿を起工せんとせり。大都と夏季の帝都との間には二道ありて通ず。一は公衆の往來を禁じ、畋獵の時に用る使節の往來のみを許す。一は Tchou-tchou の城市を過ぎ Sanguin 河の岸に沿ひ、沿途葡萄その他の果物多く産す。この城市に近き Sémali と呼べる町の住民には撒馬爾罕人多く、果樹園に植ゑたる植物も全く撒馬爾罕とその種類を同うせるもの多し。一は Siking と稱する峠を通過し、之を超えて開平府に到るの間は渺茫たる平野と避暑地とあるのみ。當初は宮中にては前記 Tchou-tchou の附近に避暑せしが、忽必烈は開平府の東に宮殿を營みて之を Leng-ten と稱せり。而も惡夢に驚きて之を棄てたり。學者と建築家とは何れの地を選択す可きやとの下問を受け、最も適當の地は開平府に近く平野の四周せる湖なりと相一致して奉答したり。この地方には木に代用

する一種の石あり。故に多數の石材と木材とを集め、石炭その他瓦の破片を以て湖水とその水源とを填め、その上に於て鉛錫等を夥しく鎔解せしめたり。この基礎は凡そ人の高さに造られたり。地中に封じられたる水は鑿て各處に洩れ出でて泉を爲せり。この基礎の上に支那趣味の宮殿は造營せられたり。之を廻らすに大理石の壁を以てし、之に接して木柵を廻らし人の出入を禁ぜる圍場には鳥獸繁殖せり。第二の宮殿は都城の内部に營まれ第一の宮殿を距ること矢の達する程度に過ぎず、但し皇帝は概して城外の宮殿に住へり。

附

『各省の頭に任ぜる大官は丞相 Tchingsang と唱へ、司令長官は太傅 Thai-fou と唱へ、萬戸の長は元帥 Vang-schi と唱へ、波斯人支那人又は畏兀兒人等行政の次官は之を平章 Fentchan (Vassaf は Pentchan と書し、薩囊薛珍は Bingdsching と書せり) と唱ふ。慣例として大 Divan (大臣會議) には蒙古の大官より任命せる四人の丞相 Tchink-sanks と波斯人支那人畏兀兒人也里可溫 arkaouns (基督教徒) より採用せる四人の平章 Fentchans とありて又その代理を置けり。首府には又六 Divans (部ならん) ありて各々特別の任務を有し、又高等會議 (Sing 省か) あり』(以下各官廳の資格權限に就て詳細の記事あれど之を除く。)

『契約を締結する時、紙に指の輪廓を押すは支那の習慣なり、これ經驗上十指の全く相等しき二人の存在せざることを證せるが爲なり。即ち契約者の指に一葉の紙を宛てその裏に指の關節部

録

の輪廓を寫し出し、他日若し契約不履行の際は、その輪廓と指とを比較して、この證據によりて論破せんとするなり。』

ラシッドは次にすべての Divans の吏員は其職務に勵精ならざる可からず、缺勤者はその地位を失はざらんが爲缺勤毎に届出づ可き規定にして、特に缺勤者の姓名を記帳するを以てその任務とせる多數の屬官あり、相當の理由なくして數々缺勤するものは免職さる可しと云へり。

『汗八里克の省は極めて大規模にして數千年來の記録を保存す。省の官吏はその數二千人に近し、地方の首府にも省あり。』

『第一の省は汗八里克と大都となり。』

『第二は女眞并に Soulangca の地方なり、Soulangca の最大都會なる Moun-tcheou に置く。』

『第三は Couli 及 Oucouli (高麗) 地方なり、此地方は別に一王國を爲し王 Yang を戴く、忽必烈の皇女を之に與へたり。』

『第四は Cara-mouran (黄河) 河畔の南京 (開封府) 地方なり是即ち Khitai の京都のなり。』

『第五は Khitai の境上たる Seltcheou の地方なり。』

附

録

『第六は蠻子帝國の首府京師（杭州府）の地方なり。

『第七は蠻子の城市なる Loutcheou（福州の誤也）地方なり、一度首府を刺桐に移したれど、最近復た福州に置きけり。

『第八は蠻子の城市なる而して唐古特の境上なる Loukingou（桂林府ならん）地方なり。

『第九は商人の Tchinkelan と稱する Lounkéli の地方なり、刺桐の港の南方に當り沿海の大都會也。

『第十は合刺章地方にして別に王國を爲せり。省は Yatchi と稱する大都會にありて住民はすべて回回教徒なり。

『第十一は唐古特の城市なりし京兆府 Kindjantou（西安府）地方なり、那木罕（忙哥列の子なる可し）の子、阿難答この地方に住し Fentchan naour と稱する地に宮殿を營みて邸宅とす。

『第十二は唐古特の大都會 Metchou 地方にして領域廣し。これ即ち Atchiki の住地なり。（ラシッドの擧ぐる地方の長官は多く回回教徒なり。）

『これらの地方に關しては云ふ可き事多し、されど附録にその歴史を記す可きが故に茲には細目のことは述べず。

『東南は悉く可汗に服従し惟り大洋中の島嶼日本國 Tchéparangou の命を拒めるあるのみ。日

本國は女眞高麗の海岸を去ること遠からず、その住民は短身にして胴太く首は双肩の間に没せり。東邦の右に方りてはすべて可汗に服従し遠く海岸まで、又乞兒吉思部の境上までを包括せり。蠻子の西南に方りて Keitjek 國と刺桐との間に海岸に沿ふて密生せる森林あり、蠻子の皇子之に通れしも物資乏しくて窮乏に苦めり。

『西北は Ketché-koué (Candjé-coué ならん) ヲルハ・ホロの Cangigu 即ち東京なり) 國あり、之に達すること困難にして、合刺章、溫都斯坦の一部并に海を以て之が境界を爲す。國王ありて之を奉戴し、國內に Loudjek と Djessan の兩城市あり。桂林府を守りて蠻子を控制せる脱歡 Tougan は又この敵視せる人民をも監視するの命を受けたり。脱歡はこの國に遠征し海岸の城市を奪ひしが、之を治むること僅かに一週間の後同國の兵は突然海上より森林より又山間より現はれて、掠奪に狂奔せる脱歡の兵を襲ひたり。脱歡は身を以て脱れ今桂林府に住す。』西北、吐蕃、金齒の境上には唯 Coutouc-khodja 及びその部下の占領地點の敵對するあるのみ、但し高山峻嶺ありて帝國との間に介在するが故、敵兵はこの方面より侵入する能はず。而も守備兵はこの方面の境上に配置せらる。

『西北北には四十日程の砂漠ありて忽必烈の領土と、海都、篤哇の領土とを分つ。この境界は東より西に互りて三十日程の延長を有す。處々に軍隊を配置し之を指揮せる宗族諸王并に將軍は

數、海都の兵と衝突す。うち五隊は沙漠の外邊に舍營し、第六隊は唐古特の領土 Tchagan na-our (白海) の附近に、第七隊は兩領土の間に介在中立を守れる畏兀兒人の都城、哈喇火州の附近に屯す。この境界線は吐蕃の山間に到りて了る。夏季は水の缺乏せるが爲大沙漠を横斷する能はず、冬季は唯雪の水のみを飲む。』

註 第五 (第三二〇頁參看)

巴里施の價格に關する記事

蒙古史上數、巴里施の文字用ゐらるるが故、茲に當時の著述家の示せる巴里施の價格を擧げん。巴里施 *Balsch* とは貨幣の計算上の稱呼なりき。Tarikh Djihankuschai の著者は序文の終に於て金の巴里施及び銀の巴里施とは五百 *miscals* の重量ある金又は銀を云ふとて、更に當時、波斯にて銀の巴里施は七十五 *dinars roknis* に當り、一 *dinar* は四 *danks* の重さありと稱せり。Vassaf は第一册忽必烈即位のことと題せる章の終に金の巴里施は二千 *dinars* に當ると云へり。Raouzat-ul-Djennat の著者に從へば金の巴里施は五百 *dinras* に當る、最後に一三二〇年頃支那に旅行せるフランシスコ僧派の *Oderic d'Udine* に從へば、紙幣の巴里施はヴェニスの一フロリン半に當る (*Ramusio* の第二册に收めたるその紀行を參看せよ)。思ふに巴里

施の價格は甚しく動搖せるものの如し。

註 第六 (第三六三頁參看)

成吉思汗統大汗系譜

即位紀年	蒙古本名	蒙古尊稱	支那諡號
一一〇六	鐵木眞	成吉思汗	太祖

一一二九	窩闊台		太宗
一一四六	貴由		定宗
	拖雷		睿宗

一一五一	蒙哥		憲宗
一二六〇	忽必烈	薛禪可汗	世祖
	眞金		裕宗